



砂時計、
最後の一雫

狩野友則

砂時計、最後の一雫

狩野友則

1

「カメラ」

それは私にとってずっしりとした重みのある機械でした。私はこの機械に翻弄され、恍惚とし、そして呪われました。使い込んで手になじんだ部位がはげ、メッキの黒とむき出しの真鍮の色が相まって黒黄色の輝きを放っています。その妖気に憑かれると食指が動きシャッターを切らずにはいられず、肉を食い、骨をしゃぶり、ヘドを吐くまで撮り続けるのです。ファインダーを覗き込んだら人畜の境を悠々と乗りこえ、墮天使となり人間を暴き立てる魔性の機械。尋常ではない枚数の写真は悪霊を悦ばせるにはまだまだ足りないと、私を奴隷のように扱いシャッターを切らせるのです。

私は元々腹膜炎で入院していました。あの不安定な環境に身を置きすぎて結核となり、それが悪化したらしいのです。そして思いがけず別の病を患っていたことが分かりました。日に日に細菌が増殖して蝕んでいると同時に、精神をも侵す狂気に取憑かれたらしいのです。確かに私には自分自身に違和感を覚えていました。骨の髄から湧き上がった悪霊が憑くような感じです。

「失ったものを取り返したいんだな」主治医は続けて「君は悶えを望んでいるね。そして自分が壊れていくのに快感を覚えるのだろう」

その説明は納得できませんでした。私は望んだ生き方を追求しているわけで、悶えを望む、壊れる快感などといわれてしまうと、はたと首を傾げてしまうのです。ただこうして地獄のようなだったイラクから帰国し、安全な病院に入院し新聞やテレビやネットなどを見聞きしていると、当時には分からなかったものの分別が見えてくるようです。私が飛び込んだ戦場という極限状態は人間の本質を示している、と思われるのです。これまで撮り続けた戦場という被写体にはある抽象的な原理が働いています。それは「正義」とか「宗教」とか「思想」などを原点にして展開され、そのエゴへの執着——というと語弊があるのですが——が常軌を逸した行動を発動させるのではないかと思うのです。生物には種の保存というメカニズムが働いて、同じ種同士が敵・味方の集団となって殺しあったりすることなどあり得ません。戦争という行為が未だに止まらないのは、そのドグマに誘発されるからです。核の時代にあって残された人類の種としての時間は、存外少ないのかも知れない。恐竜は巨大隕石の衝突で滅んだそうですが、人類はこのエゴの執着によって衰退していくのではないのでしょうか。人間が神の創造物であるとしたら、このホモ・サピエンスという種はどこかが奇妙です。神は我々の営みを被験者として実験しているのかも知れません。失敗か、成功か、神は笑みながら今も観察しているような気がしてなりません。

私が高校三年の夏に姉が死にました。両親は離婚してしまい、東京上野のおんぼろアパートに八歳上の姉と二人で暮らしていました。私は女子高生ながら炊事洗濯など全てを姉に頼っていました。できることは冷凍食品をレンジでチンするか、コンビニ弁当ですませます。手作りなどし

ようものなら包丁で指を切ってしまいます。こんな私は高校三年生になりました。社会人になるにしろ、どこかの学校に通うにしろ、人生の中で大切な時期です。その大事な時期に私は一人ぼっちになってしまったのです。

あの日私は学校から帰り、いつものように「ただいま」というと姉がなにがしら反応するのに、この日は何の返事もありませんでした。おかしいな、と思いつつ居間のふすまを開けた時、暗闇の中で姉は首を吊っていました。ぶら下がっていた姉の姿は、最初なにかの夢の中のように実感が無く、ただ呆然として、自分はどこか遠いところへと誘っているように感じていました。声を張り上げたのは一時間後くらいだったでしょうか。小さなちゃぶ台の上には愛用していたカメラが置かれていたほか、遺書も何も残っていませんでした。何が姉を自殺に走らせたのか。当時姉は紛争の絶えない地域の復興支援をするN G Oで働いていました。姉は旧ユーゴスラビア紛争のころ、クロアチアやスロベニアにいたのですが、この時はすぐに帰国してきたのです。姉は元気のない暗い表情をしていました。おそらくそこでなにかがあったに違いないと思っていたが、姉は何もいいません。私は怪訝さと好奇心を持って姉を思索していました。それはやがて明らかになります。姉は妊娠していたのです。

「あの姉が！ 一体誰と？ どんな成り行きで？」身籠もった受精卵のD N Aを調べた所、白人の遺伝情報が含まれていたということでした。

私は驚きを隠せませんでした。姉の同僚という人が毎日やってきてケアに当たっていて、その人に姉を差し置いて尋ねると、難民保護の仕事はそれはそれは大変な仕事のように、私はその話を聞いてから何が起きたのか瞬時に理解しました。欲情が濛々と立ち上る男の力。男は女をねじ伏せて絶頂を得る獣の一面を持っている。姉は重々承知していたはずで、力づくで犯されたのでしょう。私は姉のことが好きでした。しかし姉のもう一つの顔で私を苦しめました。もうあんなことはなくなる、この時一縷の平安を得て、ほっとした覚えがあります。

姉が帰ってきてから自死する数ヶ月前のことです。急に姉は自分の洗濯くらい自分でしろ、三食くらい作れるようにしろ、ときつい声でしかりつけ思い切り頬をぶったのです。

「こんなに夜遅くまで遊んできて、これからどうするつもり！ え！ どうするつもりなのよ！ 自分のこともできないくせに」

私はこの殺気ばった姉の眼を初めて見ました。この変わり様は何なのかしばし唾然として、そしてそのいいようにようやく頭にきて、私は鞆を投げつけ外に飛び出しました。カツカツカツという踵に響く音が変わった途端、私は足をひねって倒れてしまいました。仕方なくしばらく足を引きずりながら、近くの公園のベンチに座るとため息をつきました。両腕を膝に、大きく体を反らせ伸びをして息を吸い込むと、後ろを見ます。誰もいません。姉の性格からして、後をついてきて体を抱きしめ、「ごめん、ごめん、一緒に帰ろうな、ごめん」と終わる場面です。姉にはそうするしかない事情があるのです。しかしそんなことは起こりませんでした。啖呵を切って出てきた以上何とも帰りづらい思いをしました。その辺を何となく歩くとホームレスの人たちのブルーシートマンションがきっちりと区画されて並んでいます。どこかで見たことのある光景でした。いや本当は知っているはずなのに見て見ぬふりをしていた光景です。

「自分のこともできないくせに」

ここが私の行く末なのか、とずしりとした重みを感じてぞっとしました。姉と私はいわゆる家族崩壊というものを見続けていて、いい生徒、いい成績、いい学校、いい大学、いい会社……などという標語で飾られる青年期からは自由でしたが、鉄道のレールに乗っていく奴らにも憧れました。私は受験勉強が楽に見えていたのです。自覚がなかったのでしょう。

姉は大変な模範生で、勉強も運動もできたし、人づきあいも愛嬌があつてみなに好かれ、人望もありました。料理は一週間分の食材を買い込んできて、その場で一週間分のレシピを作り、あまり野菜はシチューやきんぴらなどにして、とても美味しく食べていました。その代わり姉は毎年数ヶ月ほど間をおきながら仕事のために海外に出かけては、帰国するという生活をしていました。姉の仕事のためでこれは仕方ありません。その期間はこれで何とか生活してね、とばかりに数十万のお金を渡してくれました。姉は毎日執拗に電話をかけて寄こし、私は丁寧に言葉を返しました。無駄使いをさせないため、という理由もあるでしょうが、何より私が清潔である必要がありました。だからこそ姉は確認する必要があつたわけです。つまり姉は私が成熟するまで待っていたのです。姉はじっと耐えていたのです。

姉のぶらさがっている様子をまだ見ていました。体が小刻みに揺れていました。

「姉さん」と私は涙声で呼びかけました。もちろん返事などしません。しかしあの姉が死んだということ自体、まだ信じられません。するりとひもを抜け、カメラを握って私を撮るつもりじゃないか、と勘ぐったりしました。しかしそんなことはもちろんありませんでした。

姉とはこんなエピソードがあります。姉はいつもある部屋にいました。そこは八畳部屋の書庫でした。梯子までついており、屋根裏部屋まで本が収められていたようです。幼い頃私は黙ってこの部屋に入ったことがあります。天井にまで届くかというほどに高い本棚が数列あつて、上から下まで本がぎっしり並べられていました。身を圧するかというほどの本の山です。私は見上げすぎてお尻をついたことを覚えています。やがて私も小学生となり、姉と一緒に読みたくなったのですが、部屋の本を手に取り窓辺にある長机で姉の隣に座り本を開こうとすると、姉は制しました。

「お姉ちゃん、なんで？」

と問うても何も姉は答えません。手を緩めてまた読書に戻りました。姉のそれはまるで規則正しく一文字一文字、一行一行を読み進め、データを脳にインプットしているように見えました。まるでページをめくる「労働」に思えました。そこへ父が入ってきました。

「おお悠もここにいたか、お姉ちゃんはな、大切な勉強をしているんだ。さあ、さ、お母さんの所に行きなさい」

私はそうして追い出されると、かちりと内鍵を閉められてしまいました。何だか嫌われている気がして寂しかったです。私はドアの前で座り込みました。だだをこねました。しばらくすると寝ていたようです。二人の時間に何があつたのか、私は知らずに済みました。姉が受験の時期になるとその書庫の本は大半が捨てられ姉の受験部屋に改築されました。しかし父は相変わらずその部屋に行つては内鍵を閉めました。癪に障った当時の私は、

「どうしてパパはお姉ちゃんとだけしか遊んでくれないの」

と夕食の時に面と向かつていったこともあります。母はぴたりと箸を止めて、父を窺っていました。

「お姉ちゃんはな、大切なテストがあるんだ。お姉ちゃんが分からない問題を優しく教えてあげているんだ。悠もお姉ちゃんくらいになったらパパと一緒に教えてあげるからな」

父は毎回そう言って、いつも陰湿な笑いをします。当時の父と姉の関係を見ていた時、私はこの夕食の晩を迎えると、血の通っていない家族を見ているような気がして怖かった思いがあります。

また姉の本読みで私が被ったことがあります。私はあまり女の子の友達がいません。幼いころからずっと。

「なんかさあ、悠ちゃん、妙に難しい言葉使うよね」とよく言われたものです。それは何となく話し言葉が文語調になっているからでしょう。そればかりでなく流行ものにも無頓着でした。みんなが見ているテレビの話題で盛り上がっていても、愛想笑いしかできません。みんなが楽しんでいることが私には合わない、みんなと共感できないのです。何というか疎外感を覚えました。姉は父の蔵書を強制的に読ませられ、書き言葉、話し言葉が角張っていて、それが姉との会話から私に伝染したのでしょうか。姉の毎日毎日文学三昧の日常が、こういう固い調子になった理由に違いありません。それが普通の友達作りができない理由なのです。私は女子との会話で表情が強張り愛想笑いもできなくなると、休み時間は学校で日の当たらない図書室で身を潜めていました。

そのかわり受験勉強のポイントや進路についてなんでも姉は相談に乗ってくれ、姉のおかげで志望校に合格できたわけですが、私の恋愛については徹底的になじりました。目をつり上げ、男なんてものを信じてはいけない、といつもいっていました。高校生の恋愛など、馬鹿な男と女がくっついているだけだ、そのうちちゃんと分かってくる、ちゃんとお姉ちゃんが教えてあげるから、といつも物別れに終わっていたように思います。私はこの頑なな姉を、何というか、同性の女として嫌っていた。いや嫉妬、というか、つんけんしていた……、ちょっと言葉が見あたらない。何というか尊敬しつつわざとらしく意地悪くしていた、という感じ……、とっばいというか、あまのじゃくというか……

とにかくその姉が死んだというのは私にとって天地がひっくり返るくらい大変な衝撃だったはずなのに、この私が姉のぶらさがっている死体を眺めている時、何か心地よい風のようなものが頬を撫でていくのを感じたのです。緊張が解け、抑圧から自由になりました。目の前にいる男が私を脅すイメージ。そして服を乱暴に脱がし私を犯していく情景が浮かび上がり、私は陰部に粘液を感じ性器をいじり始めました。姉がぶらさがっているその現場で、私は不覚にもその場で服を脱ぎ横になって自慰行為に及んでいたのです。その時カメラは私を見ていました。それは姉がその死後をも私を監視しているという官能的な呪縛でした。姉には面倒をかけていました。しかしそれはそういう役柄を演じて暮らさないと姉妹関係が崩れてしまうかも知れない、という恐怖のもとでの壮絶な演劇だったのです。カメラは確かに私を見ていました。私たち姉妹を写してきたカメラ。強固に見えた姉妹関係は終わってしまいました。写真は薄い紙っぺらになりました。

姉のちょうどつま先がかかるくらいのちゃぶ台の上に載せられていたカメラ。姉はカメラが好きだったので、外国へ行っている時などによく手紙につけて寄こしてくれました。かなり高額だったらしく、毎日入念に手入れをしていたものです。しかしこの姉のカメラはデジタル全盛の現

在にあって、古くさいアナログの銀塩カメラでした。私を映しているこのカメラは何を映していたのでしょうか。ただ見ているとそのレンズがすべてを暴き出す。きっとあの時の私はまるで青い海の中で波に吞まれていたのだろーと思ひます。その波で大いに水を吞んでは吐き出し、また吞まれていくのを繰り返す。そんな船酔いのようなものを感じると、目の前に炎が立ち上がり、笑んでしまうのです。罪悪感はなくレンズを通して撮られた写真のイメージを想像しながら。私は真っ赤にほてらせた肌を両手で撫でながら、うっとりとした絶頂を迎えていました。

すると私の喉元から何か、かつする熱を感じました。今までとは真逆の隠微な青い炎を感じたのです。人間という怪物をねじ伏せる力、その瞬間私の体にまとわりついている筋肉が一段と引き締まりました。私は一人で世界と闘わなければならない……大げさですが、自活せねばならない、と子供の私から大人の私にようやく目覚めようとしていたのです。

警察が入り、遺体は運び出され捜索が始まりました。鑑識が入り、何やら証拠として持ち出していきました。後に死亡推定時刻と私の帰宅時刻が合っていることと、私の陰毛と粘液が残っていたという事を問質されましたが、しよっちゅうだ、と答えておきました。何がしよっちゅうなのかについて、警官はそれ以上何も聞きませんでした。私の妖気がそうさせたのかも知れません。葬儀の後、地縁血縁の方々から香典をもらいえらく金が集まるな、とほくそ笑んでいました。さらに姉はかなり貯金があり、私はちよくちよくバイトをしていれば生活には困らず、学校に進学できるほどの金を残していました。私はそれを使い美術系の専門学校と英会話の学校に進み「表現とはなにか……」などという講義をよそに、基本的なカメラの技術を学ぶと、いきなり飛行機に飛び乗ったのです。

ちょうど旧ユーゴスラビアのサラエボにいた時のことです。都市での戦闘のためグレーの軍服を着せられました。撮影許可をもらう時命令されました。面倒だと思ひながらも、その指示に従いました。

歩いていた時足下にぐにやりとした感触を得ました。

下を見ると土色の丸いものを踏んでいました。踏んだ辺りにはどす黒い砂山ができていました。雨の後の水たまりのようにしみだしていました。昨日は確かに雨が降っていました。しかしその砂山は不自然に盛り上がったたり窪んでいたりしていました。流線型を描いていて、ちょうど私の背と同じくらいの長さでした。目をこらしてよく見ると、口のような大きさの穴がある。そしてそこには白い突起が見えました。白い突起？ その上のほうにも二つの穴があって、ハエやアリが群がっていました。さらによく見ると毛髪のようなものが見えます。毛？ 瞬間思ひ出したように仰天しました。それは女の死体でした。私が踏んでいたものは、母胎から這い出ようとしている嬰兒でした。私はそれを足で潰していたのです。すぐに足を引っこめるとそこからまた勢いよく羊水がしみだしてきました。そしてようやく酷い死臭に気づきました。

「お前、女のくせにそんなに平然としていいのか」

女のくせに、という言葉に苛つきましたが黙っていました。死体には目もくれずそんなことをほざいていました。平和維持軍から若い白人の兵士を警護につけてくれました（おそらく情報統制のためでしょうが）。その兵士は階級とかはよく分からなかったのですが、ページュの立派な制服で、肩や帽子についている星のマークが一つきらきらと輝いていました。たぶんえらい人なの

でしょう。私は気にせずカメラを構えシャッターを切っていました。軍服の男は真心をこめて十字を切り、

「かわいそうとかいう感情がないのか」男は語気を強めてそうほざきます。

「……さあ、どうでしょうね」私は平然と「あなた達がこうしたんでしょう」と応じると、

「そんなことはない。我々が両者を停戦させたのだ。我々が市民を救ったのだ」

そう答えた男は誇らしげに顔を上に上げた。その兵士は青い空を瓦礫と化したビルの閉ざされた谷間から見上げていました。神の意志を感じているかのように。だが男は勇ましい割にはどうにも落ちつかずにいて、男はタバコの箱を取り出し、とんとんと指で叩きながら一本取り出して火をつけるとすぐに踏みつぶし、またタバコ取り出してに火をつける。何度もそれを繰り返していました。こっちは落ちついて撮影ができません。

「ちょっとそこ！」と私は英語の落ちついた声でいい、

「あなたの影が入っちゃうのよ、どいてくれない」兵士はのそのそとその場を離れると、今度は空を見上げてはらはらしながらあちこち目を配っていた。カメラのシャッター音にいきなり銃口を向けた。「きゃあ！」と叫びそれと同時に私はひっくり返りました。

「少尉！」

私の後ろから現れた男が敬礼をしていました。大柄でヘルメットをかぶった男で、腹の出ている年をとった黒人の兵士でした。この若い男とは違い私と同じ作業服のような制服を着ていました。星もありません。二人は私を無視し、お互いぴしりと腕をズボンに縫い目辺りにぴたりと手を戻すと、辺りはやたら静かになりました。

「もう戻れとの命令です。交代を命じられました。私がこのものを警護いたします」というなり再度敬礼した。

「ほ、本当か、本当なんだな？ サンダース軍曹」

「はっ」

若いのは喜び勇んではしゃぎ軽くスキップしながら、来た道に戻っていきました。

「何なのあの人？」

カメラを腹に抱きながら倒れた私はゆっくりと立ち上がると、

「士官殿だよ、お嬢さん」男は近寄ると頑なさが消え、いがいと大様に話してくれました。老兵は掌で私の体の砂埃を叩きながら、

「まだ実戦慣れしていないのさ、戦場はサバイバルだ。本当の、な。いきなりそんなところへ投げ出されてみろ、怖じ気づくのは当然じゃないか」

「そうかしら？」

「あんたも妙な女だな」この男も煙草を口にくわえ火をつける。うまそうに煙を吐き、

「女が戦場に来るなんてな、ヤツテもいいぜっていつてるのと一緒にだぞ」

「その辺の女とは違うわよ」男は笑って、何回も頷きました。

「どうだ最前線の戦場の感触は？」

「悪くないわね」

「悪くないわね？」男は疑問符をつけた語尾上げの声で復唱しました。

「お前、女のくせにそんなに平然としていいのか」

「さっき、あの男と同じことってたわ。答えは簡単」私は続けて、

「あなた達がこうしたんでしょ」私は同じ言葉を老兵にいうと、男はまたうまそうに煙を吐きながら、笑いました。

「……なるほどな、そうかもしれんなあ」老兵は呟くと、

「俺らは人を殺して食っている、お前はその現場を写真に収めて食っている」

「なるほど食い扶持は大して変わらないかもしれん。だがな生身の戦闘は違う……戦友たちが散っていく悲しみ、とかな。ジャーナリズムはこんな視点には立たないだろ？」

（生身のねえ、現実をつきだして戦争へ世論を洗脳する報道もあるけど……）私はしばらく言葉を失いました。軍隊は国家を守るために生死をかけた仕事をします。その極限を見続けたこの老兵に、私は不覚にも優しさを感じてしまいました。

「この死体はどうして？ 見たところお産をしていたようだけど」私は尋ねると、

「民族浄化ってやつさ。ここで異民族の女を強姦して孕ませるんだ。墮胎できなくなるのを見計らって放り投げる」老兵は続けた。

「向こうに行こう、スタジアムがある。さすがにお前でも驚くだろうよ」

老兵に案内されたのですが、戦いで破壊され道らしき道がありません。瓦礫と化した建物の骨組みと壁には無数の弾痕が蜂巢のようになって残っていました。人間はあくどい知性を増幅し蓄積するずる賢さがあります。ここは人間の本性の現場です。私は水筒の水を一口飲みました。気持ちを張りながらきりきりしている現場を大きく目を見開いてついて行きました。

私は観念を背負っている哲学者のようなことを考える女ではありません。私はハードカバーの本を執筆しているような学者やコメンテーターを挑発したいのでした。その時こそ私はつまらない倫理や批判に拘泥させている世界に真正面から対決できる。私は世の中を人間の裏側を暴いたり、啞然とさせたりするスクープを突き止めるのが夢でした。興奮とっていいかも知れません。それが私をここに導いた理由かもしれません。あまりしっくりする答えではないのですが。

大きな岩のような崩れた建物の壁をよじ登ると、そこからジャンプしながらついて行く。足をひねらないように十分注意しました。倒れた柱、水たまり、そして粉々になった石ころがばらまかれている所に足をとられそうになりましたが、次第に広がりをもつ道になりました。そして大きな広場が見えてきます。そしてスタジアムが現れました。広い空で眩しい真昼の光が降り注いでいます。その巨大な建築物は私を圧倒しました。銃弾の痕跡、その悲鳴を耳に感じました。東京ドームなどこのスタジアムに比べればちんけなものです。ここは平和を象徴するような場所だったに違いありません。蒸し暑さを感じながらその広々とした周辺を見渡しました。私はすぐさま広角レンズに取り換えカメラを構えると、胸の奥から噴き出してくる官能を覚えました。この感じ。自然と笑みがこぼれ、徐々に鼓動が速まる。呼吸が荒くなる。

倒壊した入り口の残骸を乗り越え競技場に入ります。

一面枯れ木で作った十字架が立てられていました。墓場です。スタジアム全部が墓場に置き換わったのです。

市民は文明という肉食の猛獣に追い詰められ、虐げられ、そして悲鳴を上げ、じっと解放されるまで耐えるしかない。その間の戦いに多くの血が流されます。ここにあるのは悲しみの郷愁でし

ようか。むしろ私は悲劇的なエロティシズムを感じました。引き裂かれた時代が泣いていました。言葉を頭の中で羅列しながら、私は夢中になってシャッターを切りました。弾痕で灰色に砕けている白鳩のモニュメント。干からびている椅子。そして、この夥しい数の枯れ木の十字架。ここに眠っているのは人間です。生物としての人間です。腹が減れば飯を食う、眠りたい時に眠り、そして愛する心を持った同じ人間だったはずです。

何がこうさせるのか？ 宗教的対立、民族の対立、歴史的な対立、いろいろ考えられるでしょうが、要するに人間が狂っているのでしょう。しかしその時の私にはそんな哲学的な問いよりも、興奮が勝っていました。ここでの殺し合いは、人類の歴史の一ページを飾るだけのことです。当然、この先にも悲劇が繰り返されるでしょう。

永遠に繰り返されなければ困ります。

私は笑いました。生き血のワインが飲みたいとさえ思いました。それがどんな味か、そんなことに興味はありません。肉体を切り刻まれ、のたうち回る男達の表情をリアルタイムで見たい。その一瞬を収めたい。変質者だというならいわせておけばいい。人間には私のような生き物がいるという一つの類型が、後世の詩人や科学者に、または一般市民の心の奥底に傷を負わせるだろう。その傷から何かを読み取るだろう。

瞬く間に一本のフィルムを使い果たしました。老兵は当てが外れて私が驚かないのに慥然としていて、私はそれを横目にフィルムを交換するとまたシャッターを切り始めました。

「やはりお前は少しおかしいようだな」

私はファインダーをのぞきながらひしめき合っている墓の細い小道を走ります。遊んでいる無邪気な幼児のように。いい位置にたどりつく立ち止まりまたシャッターを切る。

私はとにかく写真を撮っていました。ある超越的なものに取憑かれ、ファインダーをのぞきその悠久の一瞬を待ちかまえる。さあ、何が出てくる？ 何が出てくるか分からない。テロリストが現れ銃殺されるかも知れない。しかしそんな恐怖は吹き飛ぶ。むしろこんなジジイの兵士に見張られるのが邪魔です。死んでもかまわない。なにかを感じてきた。呼吸の間隔が短くなる。こっちも命をかけてその甘美な味のなにかを吸い尽くしたくなる。脈はさらに上がってきている。来て！ 早く来て！ 白い十字架にピントを合わせた。何が来るのだろう、いや必ず来る。絶対に来る！ シャッターを切る指は強張り震えてしまう。深呼吸をして落ちつかせる。喉が渴いてきた。「……、v i c, 」という墓碑銘がかろうじて読める。何とかビッチ、という名前だったのでしょ。何とかビッチさんどうしてあなたは死んでしまったの？ 妄想で私は自然と笑みがこぼれました。どこかの家庭に兵士が押し入る。まずその家の主人は足を拳銃で撃たれる。そのすぐそばで慌てふためくその妻、そして妻が抱えている幼子が泣き叫ぶ。撃たれた夫が妻と子供を助けようとする、今度は左掌を撃たれて苦悶に満ちる。次は右腕を撃たれ、腕がもぎれて床に転がる。次に太腿、横腹、足首や股を次々と狙い撃つ。ワイドに撮影しつつ徐々に狙い定めて撃っていくにつれてアップで、ハイアングルからローアングルへと角度をつけて撮る。とにかくそんな情景を撮りたい。その痛みはどんなものだろう。その恐怖はどれほどのものだろう。その悲鳴は何デシベルだろう。息も絶え絶えに許しを請っている。しかし殺してはいけない。それではいけない。それでは私が満足できない。爪をゆっくりと剥いていくのはどんな痛みだろう。

ナイフで突き刺す感触はどんな手応えだろう。手首を切ってほとぼしる血の喜び、がっちりとした肉体から鞭で叩かれる喜び、そして生から死へと移りゆく様子は……たまらない、たまらない、全身の細胞が覚醒して体中が性感帯となってピリピリとした快感が脳髄に達する。眼前に血走った視覚が現れ、カメラを握っている両手に触覚が宿る。じりじりと首を締め上げると、もがけばもがくほど指が食い込む。動脈のドクンドクンとする心拍の感触がこの手に伝わる。夫は口を半開きにして身をよじるが抵抗する力がなくなる。兵士は飽きてきて手を緩めると後ろの壁に突き飛ばし、今度は足を大きく振り上げ軍靴の踵を落として頭蓋骨を叩き割った。割れ目から血が噴き出し、夫の顔は倒れ反応は消えた。今度は婦人の番だ。婦人は抱えている子供ごと後ろに押し倒し銃声で脅した。子供の悲鳴が一層轟く。息子だけは助けて、と婦人は懇願する。兵士は息子をむしり取りどこかへ放る。もう一人の兵士がノートラップで足蹴りし壁に叩きつけた。悲鳴は消えた。あんた達それでも人間なの、婦人はいう。ああそうだよ、俺もあんたと同じ人間だよ。凜とした顔つきの婦人がいやに興味をそそる。ふふん、いい体つきしているじゃねえか……

ああもうどうなってもいい！ やりたい。精も根も尽き果てるまで吸い尽くしてやる！

あ、と私は口を開けてしまった。あの老兵が散策でもするようなよたよたした足取りでファインダーに現れたのです。ああ、と私は天を仰いでしまいました。

「わしを撮ってくれんか」老兵はピースサインでもするかのような、じゃれた満面の笑顔をしていて、「ン、どうした。撮ってくれんのか。けちだな」とほざきました。そんな気力など残っていません。

「また後でね」私はため息混じりにいいながら立ち上がり、あちこちを見回して何枚か撮った。それは七五三で千歳飴を抱え笑んでいる子供を父母が撮るような、ありきたりな風景です。私は一息つくと、目の前に盛り土の上に生えている綿毛のタンポポをとらえました。なかなかいい被写体だと思い、鞆からマクロレンズを取り出してカメラに装着させながら老兵に尋ねました。

「もうここは安全なの？」

「一応な。国連の平和維持軍とNATOやアメリカの圧力などで守られている形にはなっている。だがまだまだ安心できるとはいえん」

私はほっと安堵しました。妙な感覚でした。レンズが綿毛のタンポポをとらえシャッターを切ると、ファインダーから目を外して手を伸ばし、茎の部分をちらちら散らし綿毛を飛ばし、またシャッターを切る。

「何をしている」と老兵は尋ねます。

「欧米の人はタンポポが嫌いなんですってね」私は体を地面にへばりつかせローアングルで何枚かシャッターを切りながらいいました。老兵は、

「ああ、フランス語で『ライオンの歯』という意味だそうだ。この花の葉のギザギザした部分が獠猛に見えるだろ」

「変なの」私は起き上がり、茎をむしって口元でふうっと吹きます。綿毛が宙を舞う。

「遠くからここまで飛んできて、ここで芽吹いて、そしてまた種をつくって命を紡ぐ」

「人の手をかけたバラより、ずっと健気に生きているじゃない」男はしばらく黙りこんでいました。いい返すべき言葉が見当たらないみたいに。

「なかなかいい話だ。俺も嫌いだがそういわれると愛らしく見える」

老兵はまだ何か納得のいかないような表情をしていました。黄色いサルに説教されて慚然としたように。

「花に罪はない、か……」顎髭を左手でこすりながら仕方なく譲歩するかのような言葉を呟きました。私は笑みを隠しながら立ち上がって、またシャッターを切り始めました。

フィルムが無くなる頃は夕方になっていました。老兵に帰るよう促され、来た道を戻ると、制服姿の男が這いつくばっているのを見つけました。老兵は私を手で静止し、一人で近づきしばらくすると、

「少尉！」と叫ぶ。

私も慌てて近寄った。さっきまで私を警護していた少尉の体が血で染まっていました。

二人して黙りこんだ。老兵が死体を担ごうとしたが、私も手を貸した。老兵の目はきりっと目を厳しくさせている「男」の目で、私は戦場カメラマンとしての意地のある「女」の目で応えた。

「私にも責任の一端はある」私はいうと、老兵は頷いた。

夜も更けて私はある部屋にこもります。部屋といっても何とか爆撃を免れたコンクリートの建物で、半分部屋が吹っ飛んでいます。しかしこれで十分でした。雨をしのぐにも、寝袋で休むにしろ本当にこれだけで十分なのです。小さい発電機で赤色灯をつけることもできるから夜中に現像できるし……とにかく誰にも邪魔されなくなかったのです。

私は現像液にさらし浮かび上がったフィルムを印画紙に焼き付けたばかりの写真を一瞥すると、水で洗いそれを角から角へ張ったひもにぶら下げ乾燥させました。

「いまどきアナログカメラで撮っているのか？」あの老兵がまた現れました。酷く酔っているようで、バーボンをラッパ飲みしながらやってきました。邪魔者が来てしまいました。

「夜は一人にさせて、とあなたの上司に言っておいたんですけど？」

「まあ、いいじゃねえか、女が一人さびしくしているのがかわいそうでな」

老兵は乾燥させた私の写真を眺め、

「デジカメのほうが楽だし、サイトとかいうのに掲載できるって聞いたが？」老兵はぼかりとした表情で私にいった。

「私はね、これでもプロなの」私は言葉に気を付けていましたが、大切なものをいじられた気がして我慢がなりませんでした。

「デジタルは所詮コピー商品よ。いい、デジカメで撮った映像なんてね、顕微鏡で拡大するとただの三原色の整列にしかないの。画質なんてひどいものよ。そこにどんな芸術性があって？」

アナログカメラはこの平面のずっともっとずうっと先前まで見通すことができるの。激流のように流れていく瞬間に永遠の感情がこもるのよ、私はそういうのを撮りたいの。だいたいデジカメなんて、このカメラで、そのカメラで、あのカメラで、撮った写真なんて全く区別はできないわ。カメラの形も同じだし、写真の質も同じ。人間はいつの間にか画一的なドグマにはまっているのよ。恐ろしいことだと思わないの？ デジカメで撮った画像なんていくらでも加工することができるじゃない。事実の捏造がいくらでもできちゃう。しかもワンクリック。みんな簡単にすまして、喜んでいる。それこそ怠惰な証拠よ。いい、本当の写真がすばらしいところはね……

」

「分かった、分かった」老兵は諸手で降伏しました。私は大人げなさに気づき沈黙しました。
老兵はいいました。

「とにかくここは危ないんじゃないか」腕を下げながら、
「一応この辺は終日警備しているがな、不安定な壁だから崩れるかも知れないし……ここのも
とあった場所知っているのか」

老兵はなにがしらを話している。別にいいじゃない、自分さえ納得していれば。
「ここは元病院の跡地でちょうどここは霊安室だったんだぞ。気持ち悪くないのか？」
「コンフォータブル」私はそういいながら、口笛を吹きました。乾燥させた写真の具合をチェック
していました。ため息を聞き足音を立てやがて消えました。私が振り向くと老兵は瓦礫の盛り
上がったところに座っていました。
「君の力作とやらを拝見したいんだが」

老兵はいいました。手持ち無沙汰で困っているように。私は黙ったまま鞆を手繰り寄せ、何百枚
もある写真の束を渡しました。

「なんだこりゃ」西欧人独特のボディランゲージと奇妙な裏返った声を発した。
荒縄で体中を縛られた女を四五人の男が笑いながら輪姦している連続写真。切断された上半身
と下半身を両手につかんでにっこり笑っている男の写真。熱帯雨林にある小屋で数人の男が目隠
しされ両手足を背中で縛り、反った姿勢のまま首を吊られている写真。等々。

「お前がこの写真撮ったのか？」
「そうよ」と私は相変わらず感情のこもらない返事をする、
「大した度胸だな、新兵なら恐怖で吐くような写真だ。だがよ、こんな写真売れないだろう？
日本ならなおさらだ。酷い写真は発売中止になるんだろ」
「それは私の趣向品。仕事用の写真は企業秘密よ」

私は乾燥させておいた写真を取り外しチェックしました。男は悪い趣味だといったげにその写真
の束を私の鞆に入れました。

手にはあの射殺された少尉の肉感が残っていました。固く、冷たくなった体。そこかしこに死
の眼がある最前線。「霊安室」なるほどいい響きだ。私は恐怖など感じる暇はありません。きっ
とあの少尉は一瞬助かったと喜んだのでしょう。しかしそれが仇になった。運がない男といえる
かも知れない。戦場は運がすべてを決めるといっていいのかもしれませんが。恋人選びと違うの
です。ふと姉を思い出しました。やりがいのある仕事に就いた姉。スナイパーに殺された少尉。
性格は違っていても同じような運かもしれない。急に姉が恋しくなりました。私は泣き出しそう
になると、老兵は私の肩をさすり、

「大丈夫か？ 俺がなぐさめてやるよ」

私は鼻を吸って頷くと私は座りこんで、服を脱ぎました。老兵は上着を脱ぐと後ろから私を抱
き寄せました。汗ばんだ体臭が鼻につく。

「最近ご無沙汰でな」とかすれた声で老兵はいった。生死を分けた時人間は炎を見る。殺気ばっ
た状態で灼熱するあの炎を。赤色灯で赤く染まった老兵が乱暴に私の乳房をこねまわします。

「やはり好いな、若い女は」老兵はいうと、私はただやられるがまま、嫌がろうともしない。

嫌がればどうなるか、それも分からない。私は冷酷な血液が頭を廻り始めました。老兵の尻のほうをたぐりました。銃の入ったホルスターがありました。やはり。所詮男族はこうして欲望を満たすんだ。

老兵の愛撫は想像するほど悪くはありませんでした。若い男が老婆を犯す時もこんな感じをするのでしょうか？ まさぐられている感じはただくすぐったいという感じ、乳房を揉みし抱く感じは痛いという感じ、体を動かすと指の角度が変わり違う反応がする。何となく陰部が濡れてくる。直接女性器を舐めているその視線を見続けるのはいい感じはしなかった。本当は蹴飛ばしてやりたい。私はホルスターに目を遣った。老兵はズボンを脱ぎ舐めろとばかりに首を両手で握りしめ陰茎を近づけてきます。私は顔を左右に振り懸命に抵抗しましたが、

「やらなかったらどうなるかくらい分かるだろう？」

中途半端に勃起したその陰茎から猛烈な臭いが鼻につく。ろくに体を洗えないせいもある。「ほれ、ほれ」

とばかりに陰茎を振るわせます。私はしゃぶりました。しゃぶると男は安堵したように目を閉じた。私はそのまま尻に手を伸ばすと、

「その銃ならここだぜ」目を上にやると老兵は拳銃のトリガーをいじくっていました。私は愕然としました。

「すまねえな、これも男の性ってやつでな」

老兵の含み笑いに頭にきた私はその陰茎を歯でかじりました。

「な、が、何すんだ、うあ」

老兵は体をひねりましたが私は絶対離しませんでした。老兵は不運にも拳銃を放り投げてしまいました。男って意外ともろいのね。私はそう思いながらがっちりと噛み続けました。老兵の体が上下に揺れます。

「やめろ、やめろ、このアマ」体を必死にゆすりましたが、私は絶対離しませんでした。

「ひー、ひー、や、たっ頼む、やめてくれ！」

ブチッ、というソーセージをかんだような音がしました。男の印を食いちぎってやりました。血が噴き出した。私の口の中に血がたまっていきます。私は立ち上がりながら血を顔面に、陰茎は遠くへ吐き棄てました。みすばらしい一物が転がりました。老兵は絶叫してうずくまっていました。命の危険が上がるにもかかわらず、拳銃そっちのけで老兵はうずくまっていました。私はゆっくりと歩みより拳銃を手にとりました。これまでに銃を手にとった覚えはありませんでしたが、掌になじむスタイリッシュな銃でした。どう操作するのかわかりませんでしたが、トリガーを引けばいいのだらうと、勝手に考えていました。

「相手が悪かったわね」私は銃口を老兵に向けました。何か物足りないと思いながら。

「つまらないわねえ」

私の中でなにかが惹起しました。私は銃口をおろしてうずくまっている老兵の尻を蹴り上げました。何回も何回も蹴りました。顔面を蹴り、みぞおちも蹴った。押さえている股にも蹴りをいれた。変態ジジイは、ひい、ひい、と叫びながらなすすべなく転がるばかりで、今度は仰向けになって丸くくるまり股を両手で必死に押さえている。ズボン全体が赤黒く滲み、どうにもなら

ならないのに嘔き出す血を抑えようとしている。ジジイとはいえなかなか屈強な肉体を持っているのに、のたうち回り苦悶の表情を浮かべている。こんなに痛いんだ、と私は改めて思いました。股を蹴り上げられてうずくまり、転がっている男のジェスチャーを思い出していました。こういう姿をテレビなどで見てはいましたが、ただのジョークではないかと思っていたのです。しかしこのただの一撃でぶっ倒れた男を目の前にして、私自身ようやくここが男の急所なのだと納得できました。同じ人間でありながら男族にも女族の知らない急所があるものだ、と思いました。まあともに戦ったら負けるに決まっています。敵の急所を狙うのは当然でしょう。

その時私は自分を通り過ぎていった男たちとの辛い思いがこみ上げてきました。私の体を知っている男。高校生の初恋は成就しませんでした。それから私と姉との関係が微妙にさせました。姉は人間の雄、雌を「男族」「女族」と分けて考えていました。「男族」は「女族」を肉体的暴力で支配するのだという固い信念を持っていました。常軌を逸した強固な思想のようでした。私はそこまで徹底して考えはしませんでした。やはり好みの男が現れると、愛されたいと願ってしまいます。ただ裏切られると、陰湿な女の衝動が発動して、ねちねちとまた凶暴にふるまうようになりました。それが「子宮女」の逆襲です。この老兵にも急所をぐりぐりと痛めつけてやろうと当然のごとく考えていました。どこをヤルか、まずは初めて知った男の急所に蹴りをいれました。老兵は絶叫しました。

私は面白くなってきて鼻歌交じりに腹を蹴りました。その鼻歌はラベル作曲の『ボレロ』でした。スネル・ドラムの刻むゆっくりとした小さいリズムから始まる。頭を蹴る。喉仏を蹴る。みぞおちを蹴る。馬鹿のくせに、女々しいくせに、ヤルことしか考えないくせに、と間に言葉をはみながら蹴りました。

「ストップ、プリーズ、プリーズ、プリーズ、ストップ！」かすれた声で何度も叫ぶ。フルートのツーパターンのメロディ。「ノン、ノン」私は笑いながら人差し指を左右に振る。クラリネットのメロディが被さる。「女は力では男に負けるけど、考えることは結構残酷なのよ、よく覚えておきなさい。手遅れだけど」私は鼻の頭を何度も蹴りました。あの、つーん、とする痛みがするところです。オーボエのメロディが続く。一度目は顔に痛々しいしわが出ましたが、やがて鼻が折れまがり穴から血が流れだしました。いよいよ金管楽器のトランペットが加わる。老兵に馬乗りになると両手に握った礫を顔面に喰らわす。この時曲のテンポは変わらないのに、周りの時間が酷く間延びして感じられ、反作用でごす、ごす、とゆっくりと掌に戻ってくる響きを鋭敏に感じ取り、老兵の顔が崩れていく様子をゆっくりと観察しました。いよいよトロンボーン、サクソフォーン、ヴァイオリンが加わり曲が踊り出す。私は立ち上がりなますのようになった全身を見下ろしました。ファゴットが、ホルンが、ピッコロが、チューバが、ヴィオラや、チェロや、コントラバスの大団円を迎えようとしていました。フィニッシュのフォルティシモの瞬間、ジャンプしてあばらを両足で踏みつけました。曲は終わり、めりめりとする骨が砕ける感触を得ました。

「ご苦労様。一応約束は守るわね」私はかわいらしい女の子の声で銃口を首の辺りに向けました。老兵はまだ助命を請うて、喉に溜まった血をごぼごぼ吐き出して声を上げようとしていましたが、私は顔面に向けてトリガーを引きました。軽い爆竹のような音が辺りに響き、薬莖の臭いが漂っていました。なんでしょう、心躍る充実感がありました。

「ポー！」

私は歓喜をもって何度も飛び跳ねました。死体はそのたびに揺れました。その顔は原形をとどめず顎が半分以上砕け、大きく見開いていた目玉が粘液を帯びて飛び出し、裂けた頭蓋骨から薄茶色い脳みそが辺りに飛び散っている、その果てた姿を写真に収めると当然のように高笑いしました。するとどういうわけか急に涙が溢れ、泣いてしまったのです。

私は荷物をまとめてその場を離れ、拳銃と作業着は瓦礫の山に適当に投げ捨てました。「しまった」拳銃くらい持っていくべきでした。後悔しても仕方なく私は一夜を過ごしました。翌朝見に行ってみると、何人もの兵士がこの現場に現れ、その老兵を運び出していきました。ばれなかったか、私はそれだけを恐れていましたが、

「くたばれ、ミロシェビッチ」と口々に連呼していました。殺したのはセルビア系テロリストだと誰もが信じて疑わないのです。ある兵士が、リベンジだ、というとな、リベンジ、ゴートウヘル、とまた口々に叫びます。この恐怖の最前線にいて士気が高まったようです。私は少々安堵しましたが、私は一ヶ月ばかりこの現場から離れ身を隠しました。拳銃があれば脅すこともできたでしょうに、水ばかり飲んで空腹を抑えました。いつかばれるかも知れないこととその後どんな仕打ちがあるのか、怖かったです。とても怖かった。

戦場には冷静なものがいるようで、どうやら何人もの兵士が私を搜索しているようでした。私は斥候に注意しながら動きました。しかし食べ物も無く逃げていたので、結局連行されてしまいました。

そこは狭い個室でした。左手奥には星条旗が掲げられ、青白い蛍光灯の光が堀の深い顔面に影を作り、をより恐ろしくさせます。三人の男が待っていました。左右にはカーキ色の軍服を着ている肩に星が二つの男が立っていて、中央には同じ色で星が三つある男が椅子に腰かけて私を睨みながら取り調べました。左右の二人の男は机を驚くほど大きく叩き、怯む私にゆっくりとそして丁寧に真ん中に座っている男が問質すのです。死体の股にある陰茎にはひきちぎった跡があったこと、銃声がしたこと、拳銃と作業着が近くで見つかったこと、なぜいつもの場所にいなかったのか、など執拗に問質されました。あれこれ逃げ口上を並べましたが、どうしても頷かざるをえません。しかし老兵の件はたまたま死んでるのを撮影しただけだ、としらを切りました。するとこの男は私の取材許可を取り消す、と行ってきました。

「取り消す！　なんで、どういうことよ！」

私は猛然と抗議しました。もう写真が撮れないというのは納得がいかない。

「洗いざらいされると戦況に響くのでな」と左側の男はいい、

「別にいいだろう、君のほかにも多くのメディアがいるのだから」右側の男が続きました。

男はいかにも男らしい技巧で私を突き放しました。私はジャーナリストとして軍や権力を正さねばならないのだ、と枯れ葉のような言葉をそれこそ何度も必死に述べました。

「こんなことは始終起きていることだ。それを軍の機密事項として黙殺されていると公表されると、軍全体の士気にかかわる。お前にはその責任がない」中央の男は続けました。

「楽な商売だな、君の仕事は」

その男の三つの星が妖しく輝いていました。この男がこの基地では一番階級が高いようでした

。権力には勝てない、と私は悟りました。私はもう写真を撮ることはできなくなる、という現実
に苛立ちが募りました。しかし軍にとっては疎ましい存在であることは分かります。あのカメラ
に入っている写真は証拠になるのは分かっていました。だったら、なぜ私はあのむごい老兵の姿
を写真に収めたりしたのでしょうか。

「この写真は偶然撮った、というわけか」

その時誰かが脳裏をよぎりました。内なる声で私は泣きそうになりました。

「……怪しいものだな」

私は黙りました。そして私は危険人物としてこの司令部の一室に閉じこめられました。

独房は照明もない部屋でした。意外に広く壁も床も真四角の鋼鉄でできた立方体の部屋でした。
兵士に背中を押されバランスを崩し前のめりに倒れると、金属音の冷たいロック音が耳に響き、
男たちの笑い声が徐々に遠くへ消えていく。ドアについている覗き窓は外側からしか空けられない
ので完全な闇でした。目を閉じてても、目を見開いても同じ光景でした。私は暗闇を見ていました。
いやひょっとしたら暗闇が私を見ているんじゃないか、という感じになり、しまいには実は自分
自身が闇なのではないかと感じ始めました。暗闇は私を襲います。封殺された記憶が浮かび
ます。無意識に現れる、つまりそれが頭に浮かぶと、全力で自分の拳を使ってこめかみをぐりぐ
りと押しつぶします。それがすむと舌を噛みます。床に頭突きをします。そして大声を張り上げ
打ち消す。しかしその声はこの空間に反響するだけで、何の解決にもなりません。息が上がり、
気づくと口で呼吸していました。私は声を上げました。今度は不協和音のような反響を起こし私
の耳に届きました。私はわなわなと心が乱れてきました。暗闇から一筋の光が漏れています。な
にやら悲鳴が聞こえます。

「お姉ちゃん？」確かに幼い時の私の声でした。その記憶を抑えこむように、ただただ叫声を発
していました。しかし私はゆっくりとゆっくりと忍び足で近づき、その光の切れ端を覗きました。
覗きこむと一瞬息を呑み、そしてそれを好奇の目で眺めました。私の人形が落ちていました。

「やめて！ やめて！」

「うるさい！ 黙れ！」

父の声は笑んでいるようです。姉の声は聞いたことのない妙な声を発していました。私の呼吸
は乱れ、何とか覗き込もうと目をあちこちに飛ばすと今度は母の声がしました。

「何やってるの、あんた！」

それから「だまれ！」という父の罵声。突き落としてガラスの食器棚を倒してたくさんの食器
が割れる音を聴きました。どしん、どしん、と地響きがする。父の暴言がそこに被さっていま
した。父母の口論に姉は止めに入っているようでした。

怖い、とにかく怖かったので、私は急いで二階へ上がり自分の寝床にくるまりました。

「優しいパパがお姉ちゃんをなにかしている」

一体何をしていたのか、そんな焼き餅は失せました。ただなにかが壊れていく。何かが裂けてい
る感じがしました。私はどうなるのか訳が分かりません。耳を押さえ体を震わせていました。目
眩がしました。さっきの光景が目に焼きついています。それが魚眼レンズで撮影したようにぐに
やりと歪んでいきました。そして体がぐるぐる回転しながらある中心へと吸いこまれて行きま
した。どこへ連れていくのか分かりません。私はこの家族の一員としては扱われてはいました。

私にとって父は良い記憶ばかり残っています。それなのに私は毎日毎日同じように父の声と、姉の声が不協和音を起こしたような淫らな声を張り上げるのを繰り返し繰り返し聞いていました。私は何の抵抗もできないのです。

いつも私が父と笑っているのを見ると、姉はしれっとした笑顔を見せながら部屋を出て行きました。私は姉を追って、

「どうしてお姉ちゃんは怖い顔するの？」

「いいわね、子供って」続けて「いやな男だけど親ですからね」といいながら私とすれ違いました。

「お姉ちゃん、パパと一緒に遊ぼうよ。どうしていつも私を除けものにするの？」

「あんたもいずれ分かるわよ」私の言葉を切るようにそういうと続けてうつむきがちに、

「親も獣になる時があるって」

その証明がこれでした。姉のあの表情は父への憎しみでした。姉は私よりずっと多き悩みを背負って生きているのかも知れない、私はそのような感触を得て、その場で座りこんで耳を両手で押さえ、廊下にうつぶせになるしかできませんでした。まるで歯車が外れかけのまま回転を続けているようでした。

「本当は知っているんだ」

誰の声でしょう？ 音声を加工したような声が頭上から聞こえました。誰もいません。いるはずがありません。

「よく思い出せ、お前は知っている。忘れられるはずがない」

はっとして私は目を開けました。暗闇があるのみでした。私は叫びました。目の前は夢か現か分かりません。すると艶めかしい叫び声が耳に残る感じで、目の前の光明にくるまれた姉が現れました。私は天を仰ぎ見ながら地べたを這って逃げました。

お姉ちゃん、と私は叫びます。私の呼吸はどんどん荒くなっていきます。喘息のようにいくら吸いこんでも吸い足りない、そんな呼吸でした。声をあげ続けていました。声は狂ったように頭の中で放出され、衝突し、爆発します。記憶に留め置いた不毛な自分がいました。私は……とそこで私は吐き気を覚えます。あのインターハイに出場したあの男。告白を受けた私は有頂天になっていました。その恋は姉の不興を買いました。私の本気な恋に酔っていた私を姉は徹底的になじりました。酷い暴力を振るい、いうことに従わせようとししました。私は本当に姉を信仰しなければならなかったのでしょうか。私にはそれを確認するすべはありません。姉は私を守ってくれました。しかし壊れてしまった姉は私をも道連れにしようとししました。こんなの酷すぎます。私は……私は、死んでしまった姉についてどう決着させればいいのでしょうか。

その彼はテニスのインターハイで優勝するほどの男子で、スマートな肉体と俊敏な足取りで相手を攻略する彼のプレーを遠目で眺めていました。彼の周りには私よりずっと魅力的な女子がいましたし、ただ私は彼に思いを寄せていたまま心の奥底に留めていくしかないと思っていました。そんな中彼は私に近づき私に告白してくれたのです。どうして私を？ 信じられない思いでした。私は彼に尽くしました。すると私の周囲が変わりました。玄関で上履きに取り替えると、画びょうが仕掛けられていたり、そこここの女がいかにもといった表情で私を睨んでいました。

しかし私には彼がいる、という一身で乗り越えようと心に決めたのです。間もなく彼は私の体を求めてきました。私は彼が望むなら、という純真な気持ちでいましたし、愛し愛される人と結ばれるべきだと思っていました。しかしただベッドに横になるだけで、緊張してなかなか彼を受け入れる準備ができません。それで結局彼との恋は終わりました。私は悲鳴をあげました。「子宮女」「子宮女」「子宮女」「子宮女」……私はその場でしゃがみこみ、耳を両手で抑えました。

姉のなじりは確かにその非恋への処方箋としては当てはまっていた。ただでも少ない女の友人をも失った私の初恋は、悲劇的な結末を迎えることになりました。姉は優しくいってくれました。

「だからいったでしょ。男は魔物なの。でもいい経験ができてよかった。これで男は汚れた種族だと分かったんだし」

打ちひしがれている私を救ってくれた姉の言葉を福音のように感じました。確かに姉だけが私を受け入れてくれました。確かに姉は私を救ってくれました。しかしそのあとに待っていた姉の私への仕打ちまでも受け入れなければならないのでしょうか。

それから間もない時のことです。どうしても男を遠ざけようとする姉の気持ちが分からず、私は姉の部屋をガサイレしました。卒業アルバムを見てみたかったのです。いつもの本棚にあるだろうと思っていました。しかしありません。違う、違う、私はその場にしゃがみこみ両手を耳に当ててうつむきます。隠している？　なぜ？　どこだろう？　本棚じゃない。机の抽斗でもない。私は余計に姉の本性を知りたくなりました。ベッド。ん？　ベッド。私は急いで立ち上がってベッドパッドをひきはがします。しかしありませんでした。いや違う、見つからぬよう隠しているのだろう。ベッドの下は？　私は床に飛びおり、ベッドの下を覗きました。奥の方に黒いものが見えます。ベッドの端に手を握りしめ、ベッドを動かそうとある限りの力を使って引っ張りました。それでもなかなか動きません。右へ左へ引きぬくように引っ張りました。十数センチほどの隙間ができるとベッドに飛び乗り手をそこに差し入れました。ありました、アルバムらしい硬い感触が。なんでこんな所に隠すんだらう。ひょっとしたらなれそめの彼氏の写真が入っていたりして。

「だめ！　見ちゃだめ！」

私の頭の指令を幻覚は無視します。私の記憶は再生されるがままです。私は汗をぬぐってアルバムを引き抜こうとしました。なかなかアルバムは取れません。アルバムを横にして柔らかい部分を背にして丸めた形にしてやっと引き出しました。おもむろに開くと茶封筒がはさんでありました。私はその中身を取り出しました。

息を呑みました。眼球が小刻みに揺れました。そこに映っていた写真……凌辱された姉のあられもない姿がそこここにありました。立ちながら腰を使っている父が鏡に向かってフラッシュをたいて撮ったスナップショット。姉の両腕は後ろに回され、口には靴下とかパンティーとかが詰めこまれ、姉は何の抵抗もできないでいる一枚。頬をぶたれたのか真っ赤にはれた頬には涙が流れていました。蝋燭を垂らされ小刻みに変化する表情を連射した写真。肉汁を絞るような写真が並べられていました。

好奇心が先走って見てはならぬものを見てしまった思春期の私。

「ね、男なんてみんなきちがいな生き物なの」

姉は戦場という極限状態に身を置いていました。善良な市民のために働いていたつもりでも、不純な動機でいるようなやつが潜んでいるものです。姉は男である父に身を捧げました。そして姉は男の筋力を使う場で働いていました。そんな周りが男ばかりの環境で働いていました。その場に身をさらした姉の行動がうまく説明できません。心も体も引き裂かれてしまったのでしょうか。ひょっとしたら姉は暗に自殺を模索していたのかもしれませんが。どうせ死ぬなら本望だ、とばかりに。男を恐怖していた姉。父の仕打ちに耐え続けた姉。壊れてしまった心から何とかはい上がろうとする姉。可哀想な半生です。だからといって許されるのでしょうか。私はただ姉の求めるままに……

はっと目を覚ますと、真っ暗闇の中私は右手の指を口の奥へ突っこみ吐いていました。寝る前に食べたどろどろと粘々とした吐瀉物は、胃液とともにすえた臭いを放っていました。それでもまだ吐こうと、指を突っ込みます。ふと姉の声が聞こえました。その笑んだ声。私はまた恐怖が蘇ってきました。叫びました。しかしその声は自分の耳にも誰にも届きませんでした。何か恐ろしいことが始まろうとしている。姉の指先が……

予感が目の前を漂っています。姉が寄こした数々の写真には呪いがかかっています。姉は死に、私が残されました。取り残された私は今何をしているのでしょうか。こんな危険な戦場にまで来て、姉の打ち込んでいた仕事の不毛さを証明しようとするのでしょうか。

馬鹿な！

私は知っている。確かに姉は私の心に酷い傷を負わせました。姉が私を壊したのです。しかし私は感謝しなくてはならない。父は姉を自分の色に染めようとしていました。いずれ私も同じ運命をたどったことでしょう。姉のおかげで私は助かりました。やはり姉は正しかったのです。こうして延々と無間地獄に陥っている私が間違っているのです。

音が聞こえてきます。起伏がサインカーブを描いてくると、私の心は正常な軌道を描き始めました。声が聞こえる、近づいてくる。もうすぐそこに。

ザク、ザク、ザク……大きな足音が同じペースで近づいてくる数人の兵士の足音を聞いていました。おそらく並んで歩いていたのだと思います。この暗闇の中でこの足音だけが現実的な時間を取り戻す唯一の情報でした。真夜中なのか早朝なのか分かりませんが、私はこうして目覚めるのです。三食の食事が出るには出ますが、いつもまちまちでした（私の体内時計が狂っていたからかも知れませんが）。それと同時に自分が処刑されるという、宣告を告げに来ているのではないかという気がしました。死を悟ってもその軍靴の足音が気になり立ち上がると体を抱えこみ、助かるよう祈りました。時々足音はびしっと止まる日もあります。それにぎょっとするのは。おそらく上官に敬礼しているのですが、しかしそれは分からない。私はあふれ出てくる死の恐怖で頭が割れそうでした。いやここで頭蓋骨をがち割ってやりたい、と思うのですが、いざ床に頭をつけたところで止まってしまいます。相変わらず部屋の中央に足を両手で抱え座りこんでいました。うんざりだ！ 早く殺せ、早く殺せ！ 私は死を望んでいました。でもこんな無様に扱われようと心の大半は生きていたいと願っていたのです。立ち上がり見えない壁を蹴飛ばしました。反作用の痛みが同時につま先に届きます。同じことです。毎日、毎時間、毎分、毎秒、自

分のいやらしい部分を攻撃する自分が憎たらしくてなりませんでした。私は声を発することなく、声を聞くことができました。そしてあの男声です。

「こんなことは始終起きていることだ」

冷酷な瞳で、我々が正しく私が悪い、という二分法で私を責めます。戦場でも同じです。我々が正義を貫くのはその敵がいかに悪逆非道で、殺さないで平和を乱すことになる、という言葉の前線で戦う兵士に号令をかけ延々と躡けるのです。つまりあの士官たちは自軍を統率するため欺瞞を平気で吐露するのです。本当に殺されるのはそんな重要人物ではなく、何の罪も持たない市民に向けられるのです。私はそれを追求するのがジャーナリズムだと信じていました。しかし世界平和の実現などというお題目に大規模な世論操作に手を貸しているというジレンマも感じます。私は腹に差しこみを感じます。何が正義か。誰が正しいのか。

呻き声を上げました。そしてまたいつものように呼吸が早まり、喉が乾燥するのです。あの鋭利な知性にとって私のような女一人くらい殺しても、事故だといひ張れば通るようなことでしよう。意味のないことが頭の中を駆け抜けているのと無関係に、自分に迫りくる死が頭を突き抜けていきました。突然ドアがガチャガチャと唸りました。鍵を開けていました。現実が迫ってきました。ガチャガチャと一層大きな音がする。鍵を開けている、鍵を開けている！ 差し迫る恐怖に後ずさりして後ろの壁に体を密着させました。ドアが開くと酷く明るい電灯で目をしかめました。ハレーションを起こした光の先に三人の影が整列していました。兵士のようです。

鍛えられた肉体。怯まぬ勇気。そして高い矜持。

これが男なのだ。強さと優しさ。ただただ私を笑顔で守り、悪逆な連中を退治する精巧な時計のようなメカニズムを持った男。私はほろりとときめいてしまう。どうか私も守ってください。本当はそんなもの一粒もないのに、私はこういう男たちが魅力的に見えました。いやな男族は上官の命令を生返事で復唱するような、やる気のないそんな毎日を送って時間をつぶすことしか考えない。常に弱いものをいじめ、脅し、いざとなったら簡単に降参する底辺の心しかない奴ら。弱いものには実にいやらしく、男性本能に忠実な連中。

しかし私は息を止め壁に体を押し付けました。そうして無駄なことをしているのを知りながら手で壁をつかもうとしました。私は殺されるかもしれない。特にあの写真は軍にとっては有力な証拠でしょう。私は一切あの老兵については黙りを続けました。そう無言の主張をしても戦場では通用しないと考えているのでしょう。徐々に怖くなりました、同時に向こうから確実にやってくる「死」の足音を聞いていました。なぜ顔面に発砲しそれを写真に収めたのでしょうか。私は苦悶している表情は歓喜に満ち、その後は号泣するほど悲しくなるのです。決していいのがれではありません。優しいあの表情が重なるのです……

「立て、女」

筋肉隆々の体で威圧するかのように命令調にいいました。私は素直に立ちました。右足から一歩前へ進めました。「断頭台への行進」。眩い光に私は両手で眼をかざしました。案内されたところは意外にも前と同じ部屋でしたが、待っていたのは違う男でした。

「私はこの辺りを管轄するトーマス・アンドリュース准将だ」

男は笑顔で私を迎えました。その男はくすんだ白いシャツに紺の背広のような軍服を着ていて、その襟には星が一つつけられており、胸の左側に勲章がつけていました。その男は握手をお求め

ました。私はおののきながら握手しました。

「以前君の取り調べをしたシルヴェスター大佐は、君に酷い仕打ちをしたらしいね。まさか一ヶ月も独房に閉じこめるとは。君の精神力はたいしたものだ、普通は発狂してもおかしくないのだから……まあこれは戦局しだいで変わる現場の人間ならではの反応なのだ、それをまず理解してもらいたい」

この男は自分たちにはほとんど過失がないといった口ぶりで話を進めました。私は厳しい視線をこの男に向けながら、

「で、私はどうなるわけ？」ふてくされたように言葉で、なぜか強気に反応していました。

「戦局は膠着している、NATO諸国が空爆をする計画のようなのだ」続けて、

「戦局次第で後方支援をするよう大統領が決断した。大統領の決断に逆らうわけにはいかない」男は私の目をはっきりと睨みながら続けました。

「我々はここから撤退するよう命じられている」

「つまりお前のようなお子ちゃまを守るために戦力を割くわけにはいかない。つまり君は無駄な存在なのだ」男は冷静に葉巻に火をつけた。

「私は自由なのね、だったらここから釈放して。あんな酷い監禁は許されないわ、帰国したら裁判所に申し出て……」

「そうはいかない」アンドリュー准将は会話を切って私の言動を止めた。椅子を直角に回転させると、壁に貼ってある世界地図を眺めながらいいました。

「まったく君の国からの命乞いに、我が軍は辟易だよ」

「だったら探さなきゃいいのよ。私はフリーカメラマンよ」

だんだんと彼の人格が変容してゆく、そして私も今までの自分と違う人格が憑依してくるのを感じました。それ以上進むなと意識しても自制がききません。

「フリーカメラマン、ね」アンドリュー准将は苦笑しながら、「もうばれてんだぞ」

「君を殺すこともできた。しかしそれでも君を確保するよう国防総省から重要案件として命令を受けている。命令には従わねばならない、しかしな……」

「なぜ逃げた。そのおかげで君一人のために貴重な兵士を数連隊も割いた。そして死傷者も出したんだぞ！」

アンドリュー准将は正面を向き顔面を私の面前につきだして眉間にしわを寄せた。

「君の言動を消すすべはない。だが、君のカメラのフィルムはすべて処分した。この点についても了解してもらう」

「すべて！」私は叫びました。

「あれは私が命がけで撮った写真なのよ！ それをすべてだなんて……」アンドリュー准将は言葉を切った。続けて「勇敢な部下を何人も失った」椅子を正面に戻し沈鬱に机に肘を載せて、
「サンダース軍曹を殺したのは君だろう？」

「単なる事故よ、何だか知らないけど、おかげであなた方の士気が高まったようだし、いいじゃない」

彼は平静を装いましたが、はらわたは煮えくりかえっているに違いありません。しかし私もこの男

も同じように睨みつけました。

「私を釈放なさい」私はぎらりと目を向けました。アンドリュー准将は、
「君は日本に帰ってもらう」と切り捨てるように却下しました。
「駄目よ、そんなことには従えないわ」唾を飛ばしながら、
「私の行動は私が決める」といい張りました。

延々とジャーナリズムの脳天気なご託を並べて反対しました。我々には今ここにある真実を公開する義務がある、中立的な立場で納得のいく世論を持ち上げねばならない。戦争という最終決断は本当に妥当なのか権力を監視する役目がある……

アンドリュー准将はゆっくりとパイプに火をつけた。もうもうとした煙を吐きながら、
「私がこの最前線にまで派遣された理由が分かるか？」
「さあ？」私は肩をすくめました。
「佐官級士官には拘束における政治的判断ができないからだ」

「シルヴェスター大佐は君のいう『事故』の案件について我々の司令部へ報告してきた。もちろん君への仕打ちもな。現地の将帥たちは射殺して事故の案件として処理する、という意見が大半だった。しかし国務省と国防総省が割り込んできた」

しばらく沈黙が続き、
「日本政府が我が国務省と国防総省に命乞いを申し出たのだ。軍の恥部にまで入りこみ、人一人殺した上に何のお咎めもない、全くふざけた話だ」続けて、
「そういうわけで君は日本に送還しなければならない。そして君が犯した犯罪はすべて不問に付す」

最後に、
「これで手打ちだ」

アンドリュー准将はその大きな体を背もたれに預け、私は顔を突き出して苦々しい表情を見せつけた。

「私をここから追い出しても、この仕打ちを告白するわよ」
「それはその時のことさ、ちゃんと手は打ってある。君は人の生き血が吸りたいんだろう？ だったら吸ればいい。洞窟の奥にでも隠れて」

男はにやりと笑いました。すると後ろの金庫を開けカメラを取り出しました。私のカメラでした。

「いいカメラを持っているな、ニッコールレンズは私の好みだ」そして「これがデジタルカメラだったら破壊しなければならないところだが、その点銀塩タイプは安全だ。これも返却してやろうじゃないか、それとお前のあの写真、グロテスクにしか見えんが、まあこれも返してやろう。これだけの厚遇はないぞ」

そして大きく口をあげて大笑いしました。全てはある目的を達成させるための手段なのです。こうすることが国民のためである、と主張し自分の正義に合致するような身勝手な論理を組み立てる。ここにいるのはそんな男たちばかりでした。男とはそういう生き物なのでしょうか。

「日本は暑いですよ、覚悟してくださいね、ははは」などと飛行機内で同席した外務省の邦人援護官とかいう黒縁メガネの男が不調法に笑った。何がおかしいのか分からない。ふーん、と私は受け流した。すると急に幼子が泣き出すような顔になって、内ポケットから手帳を取り出し、ぺらぺらとめくって読んだり、メモしたりしていました。全く何をしているのか分かりません。

羽田空港につくと一般乗客とは別のゲートに出て、促せるままに荷物を持って歩いていると、いきなり詰めかけた記者とテレビカメラと数え切れないほどのマイクに囲まれてしまいました。口を開いたり目を伏せたりすると、合間にフラッシュが何回もたかれました。

「はい、はい、ここでの取材はごめんください。ああ押さないで、危ないですよ、さっさ」

私は何人もいる紺のスーツに身を包んだ男の導きに頼りながら、訳も分からず押し寄せる人の波をたどたどしく歩いていきました。

……無事帰ってこられてよかったですね、これからどこへ、親御さんにはどう報告するつもりですか、ユーゴでの生活はどうか、ユーゴの日本人に対する扱いはどうでしたか、日本はアメリカやEU各国を支持する発表をしていますかどう思われますか、セルビア人による非人道行為と認定しているようですがこの件について現地の反応は、爆撃はいつになると思いますか、もう交渉の余地はないのですか、ミロシェビッチ大統領のセルビア人の支持は高いですか、日本の対応の遅さに不満はありませんでしたか……

外務省の手配した車に乗せられた。車の中で私は何も発しませんでした。外から見られないよう黒いスモークガラスできっちりと閉じられた息苦しい車でした。薄暗い遮光ガラス窓から外を見ると、ギラギラとした太陽が何層もの高層ビルの窓ガラスに反射して跳ね返っていました。熱線はビルの陰に隠れて幾ばくかの吐息を洩らすと、また影を抜けその光は永遠に私たちをじりじりと蝕み続ける。下の方に目を向けると、道路が何層にも重なりその下には何百、何千という人々が信号待ちをしてゆっくりと歩いたり、走ったりしていました。まるで迷宮にいるような錯覚に陥ります。ここだけではない。この巨大都市のそこかしこにこんな光景が当たり前のよう広がっているのだ。そしてビルの呑みこまれていく人々の群れは、さながらクジラのえさのようなものだろう。あのでこぼこ道のサラエボとは違い、アスファルトでほとんど揺れない潔癖症のような道をどこまでも、どこまでも走っていく。ああ、ここが日本なのだな、としみじみと感じました。焦土と化した日本がこれだけの経済力を持つようになってみてもみな何かを求め苛々している、私にあれだけのライトとフラッシュとマイクを向けて何かを聞き出そうとしている、その真意は何なのでしょう。私の生死になどどうでもいいじゃないか。私に正義を問質しても無駄です。私は写真でなにかを感じて欲しいのです。追いかけて回すくらいなら、ちょっとした言動の行き違いをさも極悪人ように、あるいは笑いもののように扱う不毛さに気づいて欲しい。そうしているうちにますます卑しい人間になっていき、信義と信頼を裏切ることになっていることに気づいて欲しい。

都内の高級ホテルにつくと豪華なスイートルームに通されました。今度は何々課の誰とか、何々局の何とか、参事官とか、紺のスーツを着ている、二十人ほどの男たちに囲われました。私は

男を見て一瞬怯んで逃げようとしたのですが、押しこむように部屋にいられてしまいました。

「言葉に注意してください。特にユーゴなんて危険地帯に勝手に行かれたんですからね。記者会見ではそこを注意してください。ああ、それと、『今回は私の不手際で皆さんにご迷惑をおかけして大変申し訳ありません』なんていういい回しもいいですね。とにかく低姿勢で臨んでくださいね。それとあなたが得ている情報はランクが高い情報ですから、『知りません』と必ず答えてくださいね、下手すると外交問題になりますから。そうしたらまた我々が慌てふためくこととなります。もういいかげんこちらの迷惑も考えて行動してくださいね」

その男たちはみな首を右に傾けながら、私に想定問答を詰めこむ。別に頼んでもいないのにあれこれ指示されることに、私は憤慨しましたが、

「あなたはもうヒロインになっていますからね、気をつけないと轟々とした非難に遭いますよ」担当者の一人がいました。

テレビをつけると私の帰国のシーンがアップで映っていました。キャスターはいました。「ああ、まだ少し緊張されているようですね、しかし戦場に一人で乗りこんで平和を祈る、なんと勇敢な方でしょう」

するとアンカーマンが、
「ええ、全くです。彼女だけでなく、こういう高い理想に燃えた人々を政府はもっと育てなければなりません。政府は、たとえばもっと平和教育を充実させるとか、ですね。とにかく無事に帰国できてよかったです。本当によかった」

テレビは街角のインタビューの場面が変わった。
「えー、ほんとー。よかったですねえ」
「何より日本の威信を引き上げてくれた人だからね、同じ国民として誇りに思うよ」
「幼い時、母親に手をつないで逃げ回ったものよ。戦争は恐ろしいよ、彼女のような勇敢な人が増えていけば戦争はなくなるんじゃないかしら」
「とにかくこの国の政府は腰が重い。本当に平和国家を目指すならもっと違う協力もできるのに」

私はただのフリーカメラマンだ。閉じこめられた間中、私は凛々しいカメラマンというストーリーが全国に広まっている。これがアンドリュー准将の打った手なのだろうか。あのアンドリューもそうだし、ここにいる外務省職員も同様です。結局私の本性をいえば、理不尽に暴行され、痛めつけられた人を撮影することが好きなのです。しかしこんな不純な目的を公然といてしまったら、社会の大反発を喰らうことになります。だから社会派カメラマンとして「平和の天使」に祭り上げられてしまった私は、もう踊るしかないのです。私はかせをかけられた囚人のようなものでした。窮屈で、重苦しい、そんな毎日を息絶えるまで演じ続けなければならない。それだけで吐き気がしました。私はごくりと唾を飲み、そして黙りました。

相変わらず容赦のない想定問答攻めが続きました。今何が起きているのかよく分からないでいるにも関わらず、昼食時のパンがぱさぱさのサンドウィッチで咳き込んでも、彼らは介抱もせずなおも続けました。私は基地の収容中で情報がシャットアウトされていたので全く分からないの

です。しかし特にその内容が聞きたいわけではないようでした。ここにいる男たちは明らかに焦っていました。彼らとの問答である程度の分析ができました。

要するに日本はセルビア人勢力を攻撃した、アメリカ、EUを支持していたということです。まあそれがこの国の頼りない立場なのだろうな、と私は思いました。冷静な分析や人道に対する倫理規範に基づくものでなく、日本の政治とはそういうものなのだとすることは、ある程度分かっているつもりです。本音は迷惑かけんなよ、という具合でしょう。第一無事に私が助かったことをも自分勝手な行動としてしか見ない、この国の官僚によるこの無理強いするコメントの「お勉強」が何よりの証拠です。世論に右往左往して私を助けるのに、まるで世を騒げた悪人のような仕打ち。まあそれはあのアンドリューとかいう准将の解説を聞くまでもない。日本は欧米諸国に諸手を挙げ協力しないと日本列島の安全が脅かされる、とおののいているのです。いわゆる「安全保障上の問題」というやつです。政党間の生ぬるい論戦が頭の中に浮かんた。国連からの要請であっても、アメリカが関わると集団的自衛権がどうの、と自衛隊を派遣するのに恐ろしいほど反対するのに対し、日本人が巻き込まれる事件には、国民の安全を保証しろ、努力が足りないなどと論理をすり替える、無責任きわまりない国会議員やマスコミたち。真実はその辺にあるのでしょう。国会の様子を想像してみても不毛な論戦を続けているもやもやとした、空転する論戦ばかり浮かび上がります。馬鹿げている。戦場の論理は生か死かないのだ。この国を動かすリーダー達はそこら辺を忘れていやしないか。すると私は微笑むのです。いやいや国家を背負う気概がないからこそ、私は助かったのではないか。アメリカに日本の外務省担当者が外交努力という名の土下座させたのは私です。そう考えれば実は私は罰当たりものかもしれません。国家意識や民族意識が希薄だからこそ生き残れたのです。バルカン半島を持ち出すまでもなく、神を侮辱したら誰であってもその場で命を失うことでしょう。この国にはそういった文化がないのです。

「私の不注意で引き起こした事件ですが、無事ここに戻ることができました。この度は多大なるご心配とご迷惑をおかけしまして大変申し訳ありません。私の軽はずみな行いで、大事件となりましたことを本当に申し訳なく思うところです。以後身を律して仕事に邁進していく所存です。本日はありがとうございました」

深々と頭を垂れるとフラッシュが猛烈にたかれる、後ろによろけてしまうほどの勢いがありました。質問が何回か飛んできましたが、あの「お勉強」通り回答すると司会者に促され席を後にしました。新聞、テレビ、雑誌に写真週刊誌、エロ本にいたるまで、私はこの国家にとってヒロインになってしまいました。私はあの「お勉強」の通りに、つかえずそういいきりました。妙なことを口走るのはやめ、また丁寧にお辞儀をしました。私はもうあの連中に抵抗する余裕はなかったのです。あの男たちの手で私の命が守られたことは不本意でしたが。

「本年の毎朝新聞主催写真賞発表」

写真雑誌の表紙には「本年の受賞者直撃インタビュー」と題されていました。写真界の名誉などには私は魅力を感じませんでした。だったらなぜこんな雑誌を買うのでしょうか。ただ技術面では負けていないとは思っていました。鬱積した心の奥では自分の矛盾を必死に抑えています。

命拾いをした写真の一部を胸に抱きながら私は上野のおんぼろアパートに戻ってきました。カビくさくなっている居間には小さな仏壇と笑っている姉の写真が飾ってあります。線香を立てかんと鉦を鳴らし、両手を合わせて頭を垂れました。昼間ですがかげっていてひんやりしているように感じました。その時誰かが玄関のドアを叩いていました。積年の恨みを晴らすかのように鬼気迫ってくる音でした。慌ててドアを開けると、出てきたのは大家のおばさんでした。

「ねえちょっと、家賃払ってよ」

「ああ……」と私は声を渋りました。

「まあ、テレビ見てたけどさ、三ヶ月もいなくなっちゃうなんて酷すぎるんじゃない」

私は頷くに留めました。大家は右手を出しています。

「ちょっと、今お金がなくて……」するとそれを見計らったかのように、

「だと思った。大体ここから死人が出たんだからね、もう入る人なんていなくなるわよ。どうすんの、あなた、ここに残るつもり？」

私は頭をかきながら頷きました。

「まあ今はいいけど、いずれは出て行ってもらいますからね」

ああ、ついに来たか、と私はその場で座りこみました。姉の貯金も底をつきつつある。さあ、これからどうするか。出て行ってホームレスになるか。そうしたらもう写真が撮れなくなる。それは嫌だ、とすれば……私が撮った写真を売りこむしかない。ため息をつきました。私はあんな写真しか残っていません。エロ本を出版する会社を回るか、そうとも考えましたが、私は首を横に振りました。逃げちゃだめだ、と首を何回も振りました。ふと使命感の強かった姉を思い出しました。姉ならどういう行動をするでしょう。

「なんだあこりゃあ」タイヨウグラフの牛吉編集長は、私の撮った写真を机の上につつ返すと、肘掛椅子をくると一八〇度向けて、外を見ていました。私はしばらく黙っていると、牛吉は、「お前の趣味で撮るなって何回もいっただろ！ 十八禁どころの話じゃないぞ、こんな写真。全部モザイク入れにやならねえ」と後ろ向きに言葉を返しました。

私は黙っているしかありませんでした。編集者に持っていくべき商売品のすべてを処分されてしまったのだし、もし私がふてくされたように答えたら余計に怒ることでしょう。編集長だけでなく、私にも苛立ちがあり憤慨していましたが。

「これが戦場のヒロインの仕事ってか」と牛吉が咳こんだ後、私は、

「みんな狂っているんですよ、戦争にはそれが如実に表れます。戦争に遭遇した兵士と奴隷女、それを写真に表現したんですよ。そんな感覚読み取れませんか？」

「ふん、そんなところまで読み取る人なんかいねえよ。『社会に悪影響がある』みたいな倫理を振りかざすマスコミに圧殺されちまう」

それとな、と牛吉編集長は椅子を戻してこちらを睨みつけると、

「お前全部取られたんだよな」

突然立ち上がって私の写真を丸めて頭に放り投げました。

「全部！ 百本のフィルム全部な！」牛吉は怒声をまた私にぶつけました。

肥満体で無精ひげで頭の天辺から毛が薄くなりつつある、この編集長はどうにもならない怒りが治まらず足で机を蹴飛ばし、いてえ！ と大声を上げて両手でさすると、

「お前にどれだけ苦勞かけたか分かってるのか。フリーだと突き通せ。全部おれがお膳立てして入国させた。それをばらしやがって、なんで黙秘しなかった！ おかげでみんなばれて政府の役人に呼ばれてどやされて、俺は何遍も頭を下げたんだぞ！」

「誰のせいだ！」

「そんなこと喋りませんよ。みんな米軍の情報当局の仕業ですよ。それから……」牛吉は話を切って、

「そんなことはどうでもいい、とにかく俺たちがどんな酷い目にあったか、分かってんのか！ そのいいぐさはなんだ。そうしたらお前は今ここにはいないんだ。ええ！」

「しかたなかったんです。フィルムは燃やされたし、ほとんど捕虜の扱いですよ。私が残るっていても、強制送還するの一点張りだったんですから。でも大事なカメラとレンズは無事でしたけど」

牛吉は頭を抱えた。呆れた声で、

「だからデジカメにしろっていったじゃないか。デジカメなら撮った写真を現場から直接日本に送信できたのに」

「あんなの玩具です。それに……」「送信には基地の回線を使うしかないので、検閲されますよ」

牛吉はまた没写真を右手で払いました。写真は机のまわりにばらばらと散らばりました。もったもな理屈を立てられて面白くないのでしょう。

「なんだなんだ減らず口叩きやがって。とにかく謹慎だ、しばらくその面も見たくねえ」

私は溜息をついて撮った自分の作品をかき集めて茶封筒に入れると、黙って編集部を出て行きました。

牛吉は父の古くからの友人で、私が幼かった時はよく家に来ては父母とともに全共闘の話で盛り上がっていました。

ゼンキョウトウ？

その闘いの様子を牛吉は撮り続け、黄色く変色したアルバムに編集してありました。何だか分からないがヘルメットをかぶり、細長い材木を持って一糸乱れぬ歩幅で走っているのが写っていました。上からのアングルで撮った写真は同じ歩幅で大蛇がうねって走り回っているように見えました。

「パパはどこ？」と私は聞きました。

「パパはここだな」

とそこには白いぼろ布で顔を覆い、青いヘルメットをかぶっているうえに、黒いサングラスまでかけていた男が写っています。

「これじゃ分からないよ～」そういう私に父は笑って返しました。

「これがママだ」

私はまた覗きこみました。おにぎりを手渡している女、それが母でした。それを見て私は父と

母を確認しました。これは本当に本当の私のパパとママだ、と安堵しました。父はビールを一口飲むと、

「お前も大きくなったなあ、もうお父さん抱きかかえるのもできないよ。さあさ、ママと遊びなさい」と母の方へ行くように促しました。私を股から下ろしました。それでもキャッキヤと喜んだものです。それを姉が遠目で見ていたといった具合に。

私はその日から無為な生活を余儀なくされました。

朝目覚めると、食パンを焼き、コーヒーを淹れ、フライパンにベーコンを焼きそして卵を割り入れました。それを皿に盛りつけちゃぶ台に並べ、いただきます、と小さい声でいうと、マーガリンをつけたトーストと目玉焼きを食べ、マグカップのコーヒーを飲みました。食事が終わると私服に着替えて、今まで着ていた服を洗濯機で洗いました。待っている間はカメラのレンズの埃をブロアブラシで落とし、本体に取りつけて様子を確認しました。レンズは十本ほどあり、同じような要領で掃除します。洗濯が終わるブザーが鳴ると、洗濯物を洗濯かごに移して、日が射しているベランダにそれをハンガーにぶら下げて洗濯はさみで閉じました。そうしているうち昼を迎え昼食にはレンジでチンする冷凍食品のカルボナーラを温め、マグカップにティーバッグの紅茶を淹れました。食べ方ははしたないなあと自分でも思っている、ずずず、というそばをかきこむような音をさせていました。いいじゃん自宅なんだし。

その時ぞっとしました。マグカップを落としました。

私は姉がやっていたことをやり始めていたのです。一人暮らしなんだから当たり前だということではありません。ぼんやり観察していた姉の姿通りにしていたのです。私は不摂生ですので、いつも適当に済ましていました。もちろん服やら下着やらが散乱し、雑誌は積重ねてあり、ごちゃごちゃしている部屋だったのに、綺麗さっぱりと片づいているではありませんか。いつの間にこんなに綺麗にしたのだろう。自分でも気がつきませんでした。まるで姉が生き返って片付けたようにも思ったくらいです。

私は探しました。そしてこの部屋の中に姉の臭いがするものをすべて捨ててしまおうと思ったのです。姉の服、姉の化粧品、姉の手鏡、姉のアクセサリー、姉の布団、……姉の写真、姉のカメラ……

私はそこではたと手を止めてしまいました。

「姉」の「カメラ」

カメラのレンズはこちらを見続けています。それは私の荒れた肌、髪の毛の一本一本まで、恐ろしいほどきめ細やかに映していました。逃げているんじゃないです。姉の手が私の腕をつかみ姉の享楽に引きずりこもうとしているのです。私は部屋の中を気が狂ったようにひっくり返して、浮かんでくる姉の顔を徹底的に、ぐしゃぐしゃに汚してやりました。整理整頓された部屋はすべては姉が作り上げた姉の自己満足です。そして姉は私を自分勝手に捏造しようとしていました。私は私の生き方でいたい。しかし姉がそこに割りこんできます。私の頭の中で姉が暴れ出して、頭蓋骨から脳みそが噴き出していきそうなくらい……しかし結局は私の不幸を姉になすりつけようとしているだけです。

そうしてぼんやりとした睡魔が襲ってきます。私は目頭が重くなるのを感じながら、睡魔を無理に追い返そうとはしませんでした。目を睨りました。涙で歪んでいる真昼の月が見えるある日の午後。

姉への邂逅はその後も続きました。邂逅という言葉遣いはおかしいです。しかしあの時の私にはそういう言葉のほうがしっくりくるのです。私の頭の中で涙を流しながら抱き合い、微笑みを絶やさない姉のイメージが姉への愛慕と憐憫となって、いつものように苦悶することになるのです。

別の写真雑誌の編集部に持っていっても似たようなものでした。

その日はもう部屋に戻り、ちゃぶ台に倒れこみました。額を両手の上に載せうつむかせました。首を横にすると、部屋越しに小鳥が二羽飛んで行きました。ああ。

今日も十社くらい回ったでしょうか、ほとんどコネクションがない編集者は、私をとりつぎさえしてくれませんでした。

「なんでこんなに頑張ってるんだろ？」

ぼんやりした頭の中で覚醒しているのはそのことでした。カメラなんて旅行で使うコンパクトカメラでさえ扱えなかった私が、カメラの専門学校にまで通って、おもむろにこんな危険地帯に潜りこむ。なんでこんなに走り回っているんだろ？

全く理由がないわけではありません。姉がパレスチナのガザ地区に仕事に行った時くれた写真を、私が勝手に写真の懸賞に送ったらまさかの最優秀賞をもらってしまったのです。

それは黒猫が砲撃の砂塵の中から現れ、ゆるりとした歩幅で逃げている写真でした。

「野良猫さえ逃げる戦争の悲惨さを表現した一枚だ。絶妙な距離感、絞りの調節も適切だ。何よりこのほとんど偶然と思える一瞬に目をつけたセンスの良さに脱帽だ」

「被写体の黒猫がいい。不吉の象徴と戦争の交錯。だがまた弱々しい猫がそれでも生きていくという生命力を我々に与えてくれる」

「この猫の目元がいい、砂塵をくらってくしゃくしゃになって目が開けられないのだろう。確かに人間の横暴とは猫にとって迷惑な話だろう。そこに現代社会に住む人間のカリカチュアさえ感じる」

「戦争が持つ悲劇は常に弱者に向けられる。だから我々は悲劇をヒューマニズムで乗り越えようとしてきた。未だその悲劇を防げないでいる。しかしこの写真をみるとなんと可哀想なことよと、猫に同情してしまう。こんな人間の身勝手さ、アイロニーを感じてしまう」

最後の評は妙に私の心に響きました。

「この写真には……なんというか喜々としたものを見せつけてられているような気がする。砂塵の中を逃げる猫という題材は戦争の悲劇のメタファーだが、この写真には自身が撮らざるを得ない何らかの力、インパクトのある被写体を見せつけたい欲や、……いや、なんというかうまく表現できないなにかの力がカメラに宿り、笑みながら撮影したような気がしてならないのである。こんなに侮辱をし、ここまでこの作品を貶める品評する選考委員の私こそが不合格であるが、私は素直にこの写真を推した。撮影者の謎解きに没頭し、未だに解けない謎が私の心を揺さぶり続けるだろう」

姉へのコメントを見ていくうちに、姉には才能があったのだ、ということがはっきりしました。読み進めるうちに私は頭を抱えました。

横浜にある豪奢なホテルに私はみすばらしい恰好をして受賞式に行きました。最優秀賞のクリスタルでできた盾をもらった時は、さすがに罪恶感がありました。まさかここまで来て、実は盗作でした、とはいえません。ほか何名かの優秀賞の方と集合写真に撮られました。私が日本中に

知られることになって、見つかったらさすがに立場がないな、と心配ばかりしていました。賞金は欲しいけど、姉に渡さなきゃおかしい。でもその賞金を何とか少しでもくすねる戦術を考えたりもしました。だから帰国した姉にも黙っていました。分からないなら黙っていよう、はじめはそう考えていました。そして見つかったら、「いい写真があったから送ったの」と言い訳しようと思いました。そして応募したのは私なんだし、少しちょうだいよ、といえいいい。

別に犯罪をじゃない。いや完全に犯罪です。やはり黙っていました。何となく姉がカメラを手入れする姿を後ろめたく感じながら見ていました。姉はまたその天真爛漫というか呑気というか、カメラの組み立てに私を誘いました。ここかファインダーだ、ここがシャッターで、ここが光を調節する絞리だ、だのと楽しそうに話しています。滝の流れのような緩やかな被写体はスローシャッターで、サッカーなどの躍動感を出すには高速シャッターがいいのだ、ただシャッタースピードを遅くすると明るくなるので絞りを閉めて光の量を抑える、シャッタースピードを速くするなら絞りを開け光量増やし明るくするのが基本だ、などといいながら私にレンズを向け、カシャツという耳障りな音を鳴らして笑っていました。今度は組みあがったカメラを前にして、私の横に姉は座りました。姉は肩を抱き頬も私に押し付け、瞳をレンズに指を伸ばしました。透明なレンズの奥の漆黒な世界に私たち二人がぼうっと浮かんでいました。姉は笑み私はきょとんとしていました。姉は手を伸ばしてシャッターを切ると同時に、その世界にいた窓が一瞬開きまた閉じました。

「知識とかを意識しちゃ駄目なの。その時はすでにチャンスを失っているから。実際に撮りながら覚える。そうすれば被写体と自分とが一体になる感覚が生まれるわ。そこまでいけばプロのような、いい写真が撮れるようになる。めったにないけどね」

「被写体と自分とが一体になる感覚」

私はサラエボで狙いすましたあの感覚を思い出しました。「来て！」と木っ端でできた十字架の脇を狙い頭の中で小さく叫んだあの時、あの言葉を発したのは誰でしょう？ 自分自身ではないような気がします。あそこに呼ばれカメラを構えたのは、超越的な誰かの思惑だったような気がします。しかし私は本当に写真を生涯の仕事として望んでいたのでしょうか。あの感覚はなんなのでしょう。それを思い起こすといつもの吐き気を覚えました。私が姉に接近する。あるいは姉に染められていくのに至ると、悪寒が走りました。この時、父と母と姉と妹という関係に思いが及ぶと、私は晩ご飯が載ったちゃぶ台をひっくり返しました。ご飯茶碗は割れ味噌汁は床に落ちびしょびしょになりました。この時、この瞬間、私は姉の思惑の中に取りこまれていました。私の意思と関係なく。黒光りするカメラが私を睨んでいます。冷笑してさえます。

あの日私は居間の隣の部屋で眠っていました。いや寝ているふりをしました。体が硬直していきます。姉が蛇口をひねって炊事を終え、蛇口を止めるきゅっとした音が聞こえると、私の体はわなわなと震え始めました。ふすまを開ける音。姉も隣の布団の中に体を埋めました。私の呼吸は荒くなりました。姉が布団をかぶるすれた音がしました。私は手をぎゅっと握りました。私の布団の中に姉の手が忍び寄り私の背中に触れました。「悠ちゃん、寝ちゃった？」私は黙り込みましたが、姉は私の布団に背中の方からゆっくりと抱きつきました。そして……私の体はわなわなと震え始め、姉は背中の方からゆっくりと歩みより、背中に抱きつきました。そして……

そして私はその夜姉と結ばれました。姉のゆっくりゆっくりとした愛撫は女の体を的確にとらえていました。私は目を固く閉じて緊張で体が固まっていましたが、徐々にほぐれ息が上がり始めました。

姉はよだれを垂らすよう命じました、私は一生懸命出そうとしましたがよだれまでとはいきません。姉は癪に障ったのか、ウィンウィンと機械的な音がして、先端が回転する大きな男根のようなものを見せつけました。意味も分からず緊張としていとおもむろに姉は私の口から喉の奥まで突っこむと引き出しました。それを何度も素早く繰り返しました。私は咳こむと喉の奥からよだれが出てきました。その時フラッシュがたかれました。

「そうよ、そうそう、よだれって男を興奮させる秘術なのよ。いい、騎乗位になって男の顔によだれを垂らしてあげなさい、すぐ男は我慢できなくなるから。ほんつとに馬鹿よね、男って。いい娘ねえ。お姉ちゃんがもっと教えてあげる」

姉の執拗な愛撫は止まりません。その機械を私の割れ目の中へ入れようとしています。私は必死に体をふって拒みました。しかしすでに体はそれを求めています。しかし姉はその機械の電源を切りました。安堵と渴望の間にはさまれていた私は、次に取り出した機械を見て啞然としました。

「あなたは恐れているのでしょうか？ 男族は女族を全然分かっていない。いきなり女の性器を舐めたり、無理やり陰茎を舐めさせたり。ねえ、男なんてみんな獣なの。こうして女同士でセックスすればもうなにも怖いことなく、楽しめるのよ」

姉は両端がウィンウィン回転し震えているものを見せつけ、にっと笑いました。姉は一方を自分の中に収めます。それだけで姉はその機械の回転に合わせて腰を回していました。姉は私の顔を睨みました。（さああなたも入れなさい）

私はぎらりと眼が覚めました。夜中です。夢でした。私は起きて電気をつけました。夜中に冷たい蛍光灯が灯ると辺りは青白く発光し、現実味を帯びた世界が現れました。ただの夢とは思えませんでした。どこからが事実で、どこからが妄想なのか。私は日本に帰ってきた。記者会見で自身の身勝手さを詫びたこと。そしてまともな写真がないことにタイヨウグラフの牛吉編集長から、謹慎しろ、と怒鳴られた。ここまではくつきりとしているのですが、そこからが曖昧です。確か私は真っ暗な部屋に閉じこめられたはずだ。そうだ、アンドリューとかいう司令官と会話したはずだ。日本に帰れ、といわれた。いやそれはサラエボで捕まえられた時のことだ。じゃあお姉ちゃんがお父さんを冷たく突き放した話は？ いやその前にお姉ちゃんがお父さんに乱暴されたんじゃないか？ いつの間にこの部屋こんな綺麗になったんだ？ 片付けた記憶はない。じゃあお姉ちゃんがやってくれたのか？ あの頃は姉が怖くてちらかせなかったよね。ん、でも昨日洗濯した気がするな。ほしてあった洗濯物取りこんだっけ？ 窓の方に目を向けると洗濯物がかかっていた。ああ、と私は思った。やっぱり干してからずっと寝ていたんだ。あれ、私はいつ眠ったんだっけ？ ちゃぶ台の上に頭を載せて、そのまま寝ちゃったんじゃないかな？ あれ確か晩ごはんをひっくり返さなかったっけ？ 私はふすまを開けて居間をのぞきました。何もなかったように綺麗に片づいています。お姉ちゃん私を愛撫してたよね。陰部をまさぐってなかった？ おもむろに陰部を確かめると確かに濡れていました。あれ？ お姉ちゃんは死んじゃったんだよね。お姉ちゃん確かロープで首を吊ったんだよね？ じゃあ隣のこの布団は誰

が敷いたんだろ。おかしいな今日はいつだっけ。辺りを見渡してもカレンダーはない。昨日は何曜日だっけ？ 指折りして数えましたが面倒だ。なにか妙だ。妙な世界に入りこんでしまった。いやいや疲れているのだろう。日本戻ってきてから一ヶ月くらいだろうか。ここに残された私は誰が操作した幻覚なのだろう。

やがて空が青く滲んできました。朝がやってきたのです。いくらか寝ぼけた感じがしました。ゆっくりと立ちあがる。相変わらず蒸し暑い。くしゃくしゃになった髪の毛を手ぐしでもと通りにした。パンを焼いて、コーヒーを淹れる。フライパンに卵を割り入れる。今日はスクランブルエッグにしようと考えた。そして菜箸でフライパンの卵をぐるぐるとかき混ぜた。どこかで見かけた光景に思えました。いや、いつものような毎日を繰り返しているの、遠い記憶と近い記憶が混ざりあい既視感を感じるのだろう。しかしなにか不思議に手が止まってしまいました。焦げた臭いがしたので慌ててガスを切った。少し焦げているがビターなスクランブルエッグと思えば悪くない。食べ終えてから今度は洗濯機に向かう。下着類は昨日やったからシャツ三枚と靴下二足を入れてスイッチを押す。いつものように洗濯槽は回り出した。乾燥までしてくれる自動洗濯機ならもっと楽なのにな。今度買い換えようかな。そんなことを思いながら、私の眼から涙が溢れ、その場に座りこみとめどなく流れる涙を手で拭きました。

「お前、女のくせにそんなに平然としていいのか」

「やらなかったらどうなるかくらい分かるだろう？」

「言葉に注意してください。特にユーゴなんて危険地帯に勝手に行かれたんですからね」

「女が戦場に来るなんてな、ヤツテもいいぜっていつてるのと一緒にだぞ」

「——お前のあの写真、グロテスクにしか見えんが、まあこれも返してやろう——」

「まあ今はいいけど、いずれは出て行ってもらいますからね」

「なんだなんだ減らず口叩きやがって。とにかく謹慎だ、しばらくその面も見たくねえ」

「親も獣になる時があるって」

「事件に遭遇いたしまして、無事ここに戻ることができました。この度は多大なるご心配とご迷惑をおかけしまして大変申し訳ありません。私が軽はずみな行いで、大事件となりましたことを本当に申し訳なく思うところです。以後身を律して仕事に邁進していく所存です。本日はありがとうございました」

あらゆるハラスメントが走馬燈のように流れていきます。話の順番はごちゃごちゃだっけれど、そんなことは重要ではありませんでした。私は世界から阻害されて生きるしかないと思っていました。私の未来も、ずっと、ずうっと遠くまで続いている。生ける屍だと思いました。麻薬常習者がいう、もうしない、という宣言と同じことです。私はどうやって生きていこう。もうカメラは使えなくなるかも知れない。カメラはいつものように居間のちゃぶ台に乗っていました。私はカメラに近寄り、両手でがっしりとつかむと叩きつけました。が、転がるような程度の力にとどまっていた。カメラは横を向いている。ちょうど私の正面でした。私は手繰り寄せ胸に抱きました。

私は素早く着替え、すくっと立ち上がると外に出て強い日差しに身をさらしました。そして走りました。どこへ行くあてもなくただ走りました。

上野駅に行き切符を買い、山手線内回りのプラットホームにきました。どこに行こうというのでしょうか。私は待ちました。ただ何かを撮ろうとする気分はありました。程なく車両が滑りこんできました。私は乗りこみました。

電車内はすいていました。空いている席に座り、私は待ちました。「それ」は妙な形をしていて私を困惑させます。姉がそばにいて指導してくれるような。直感、既視感のようなものでしょうか。実際に撮りながら覚える。

「そうすれば被写体と自分とが一体になる感覚が生まれるわ」

姉の言葉を振り返った時、私はぶるっと震えました。

高校生がいました。真夏にふさわしい制服を着ている男女が。男子は坊主刈りで標準のワイシャツを着ていました。女子の方は薄手のシャツにセーラー服を着ていて、胸元に深い青色のリボンが結ばれていました。こんな制服があるんだ、と私は懐かしく思いました。私の通った高校の制服に似ていたからです。悪くない純朴な感じを醸し出しています。夏の日差しで黒く日焼けしていました。向かいにいる女子は少し肌を赤くさせていました。野球かサッカーか、男子は選手で女子はマネージャーでしょう。なぜかそうだと確信しました。出入り口近くの両側のポールに背もたれにするようにして、微妙な距離をあけて立っていました。高校生、か……私は頭の中で唱えました。一瞬目線が飛んできましたが、私はすぐに視線を逸らし、また戻すと互いに笑顔を浮かべている二人を呪いました。

私が高校生だったあの時、私に目をつけていいよってきたのは男のほうからでした。しかし何もしていないのに体を売り渡したとさえ噂さするのです。いやらしい女の論理で、何の変哲もないあの女、なんでアイツなのよ、とひがみもやっかみも含んだ作り話が学校中に噂されました。目ざとい視線で私を睨み、私の親友でさえ私を捨てました。あの冷たい目、あの何ともいえない嫌味をこそこそいいながら、いつの間にか女の世界からはじき出されてしまいました。しかし男とは実に巧妙に演技する。男のほうからいいよられ、変な噂をつけて放るのです。私は緊張してただけなのに、

「いつも視線送ってたくせに、やらせねーんだよ、あの女」

とその男子のつぶやきを女達は誇張して、やりたいくせにやらせない、近寄るとハードルを上げる汚い手口、やっぱ子宮でもの考えてる女なのよ、

「あ、子宮女だ」「あんなブスもよく考えたものね、さすが子宮女」「毎日あんな事やこんな事考えてるのよ子宮女だもん」

「子宮女」

と、みなが私を命名しました。恋のきらめきとは果実を握りつぶして指から流れ落ちる甘酸っぱい果汁のようなもので、残った絞りかすが愛の真実でした。列車が進んでいくにつれ私の拳に徐々に力が加わっていきます。純朴そうな少年少女。私の高校生活ではついにかなわずもがれた夢が、私を苛立たせるのでしょうか。

次の駅の日暮里で二人は降り、代わりにトラベルバッグのローラーを転がしながら若夫婦と幼い子供が乗りこんできました。海外旅行にでも行った帰りなのかもしれません。子供は半ズボンで膝に擦り傷がありました。やたら元気だ。血が滲んでいましたがこれくらいの傷なら元気な証拠

でしょう。子供は必死に父親のお尻にパンチを打っていました。痛い、痛い、と父親はあしらっていると今度は足にしがみつきます。「何だ、どうした」と子供にいうと、あそこ握りたい、といった。父親の手首は吊皮があった。これ？ と母親はいう。子供は頷く。しょうがないなと父は子供の胸を持ち抱え、子供に吊皮を握らせてやりました。喜ぶ子供、母親は笑みながらコンパクトデジカメでその様子を撮っていました。泣く子と地頭にはかなわない、といった風な父親。何枚も撮っている母親。子供の笑顔が印象的でした。私には何か遠い出来事のように思えました。その親子は池袋で降り、代わりに女子と男子の高校生がいっぱい乗りこんできました。また居心地が悪くなりました。それは私が青春時代にやっておきたかったこと。男子と女子とがたわいもない会話をしたり、恋愛というのとはまた違う男と女が何となくつきあってみたり、その他大勢で街を闊歩したり。そんな青春物語の主演になりたかったからなのかもしれません。

私は渋谷駅で降りました。実は私は渋谷で遊んだことがありません。若者の街で普通に遊べなかったのは、一緒にいられる友達がいなかったこともありますが、そこにも姉の管理がありました。学校が終わったら直通で家に帰る、そういう不文律が出来上がっていましたから。苛々した時、夜の渋谷の雑踏に憧れていたものです。

何となくうきうきした気持ちになって多くの乗客と一緒に電車を降りました。ただなぜか厳つい顔をしている男性が多くいた意味は分かりません。熱くたぎっている感じはこちらにも伝わり、私も額と脇の下から汗が出てきました。みな明らかに何かについて怒っていました。プラットホームにはすでに人が溢れています。降りてもなかなか前に進めません。みなは何かを待ち合わせているようでしたが、私はそことは違う方向へ行きました。そして私は迷ってしまいました。といっても気の向くままにしか進んでいないので迷ったというのはおかしいですが、とにかく渋谷駅の改札を抜け駅ビルに入ります。

何が起きているんだろう、私は上からその様子を探そうと決めました。私はいつも一歩手前から考えるタチなのです。

複雑な駅ビルに苛立ちました。とにかく渋谷を俯瞰できる場所にたどりつきたいのです。それなのに案内板の通りに東急百貨店に足向けると東急東横線の改札に出てしまいました。そこじゃないと私は思いました。百貨店に出口があるに決まっている、また中に入りました。喫茶店に行けば窓があるだろうと思って、エレベータの案内表示板を探しました。喫茶店を見つけました。中に堂々と入ると窓を見つけました。そうやってようやく外が見えました。異様な街並みでした。しかしどうやらセンター街ではなさそうです。私がいるここはどこだろう、ますます苛々が募ってきました。ほとんどやけくそになってこの空間をカメラに収めました。見上がると何だか違う電車が見えました。橋脚には驚くことに地下鉄銀座線とありました。地下鉄なのに地上にあるのは解せません。何だここは？ 下を見ると渡り廊下がありました。メニューとお冷を持ったホール係がやってきましたが、もう結構です、といって喫茶店を出ました。

ただただ歩きました。すると私はいつの間にか回転して歩いていたらしくまた同じ東横線の改札に出てしまいました。私はがっくりし大きくため息をつきながら、案内図をまた探して駅ビル西口に向かう連絡通路を確認しました。そこへと進むと京王井の頭線の駅についてしまいました。私はどこにいるのでしょうか。とにかく出ようと思い、近辺をうろついていたらいつの間にかハチ

公の像があって驚きました。その近くには地下にむかう階段があり、案内板には田園都市線と書いてあり矢印が下を向いていました。地上と地下に地下鉄が通り、やたらに多い路線。どうするとこんな都市が出来上がるのでしょうか。私はこの都市にいいようのない不安がよぎりました。その不安はどこを辿っていくとどこにもたどり着かない、先の見えない世界がありました。逼迫した恐怖がありました。この都市に注ぎ込むエネルギーが無限に膨張しています。私はそれだけで圧倒されました。私はこの都市で迷子になっています。この辺りをたむろしている若者は不感症です。ある若者の男が座り込んでいる女子高生をナンパしていました。それはこの街にはありふれた日常でしょう。でもその先に何が待っているというのでしょうか。とりあえずぶらぶら歩きながら会話を楽しみ、昼食をとり、店を眺めたり、欲しいものをねだってみたり、そんな金ね一よ、とかいいながらにやにや笑ったりしながら、夜はホテルに連れ込み、そのまま一夜限りの出会いを楽しむ。そんなライフスタイルが何千何万ボルトというエネルギーレベルで覆っている。それを止める手だてなどありません。どう説教したって、うるせーよ、の一言でぎらりと睨まれ、下手をすれば殺される。あるのは強者と弱者の構造そっくりです。欲望にただ従って生きていく。油ギタギタのハンバーグと有機栽培とかされた安全なレタスとパンに挟まれた食べ物を食べ散らし、永久機関のごとく無限に食べ尽くすことでしょうか。それが至極当たり前に考えていること、それは嘘です。やがてその劫に気づくでしょう。悲鳴を上げることでしょうか。ですがもう手遅れです。私は怖くなりました、神は人類をどこへ連れて行こうというのでしょうか。私にはおぞましい近未来を感じずにはいられませんでした。どこに行こうかいうのか。その先になにかがあるのか。分かりません。見えません。飢餓や戦争で死に行く人たちだけが苦しいのではない、と私はここで気づきました。私は走ります。黒豹に追い立て回るように逃げ続けます。

私は達観していました。それでも生きること躊躇しないだろう、と思ったのです。いずれみなカルシウムの塵に帰するのです。私は何をしていますのでしょうか。私は何を追い求めているのでしょうか。どうせ滅びる人類の写真を残すことに意味などあるのでしょうか。砂塵と化した地球の表面に私の撮った写真が風に吹かれて舞い上がっているなら、それもまた人間という生き物の残した一つの生きた証になるかも知れません。それがただただ生きることにつながっているならば、私は撮影というその無駄で無謀な行動を躊躇しないでしょう。

首を傾げました。首から提げたカメラは正面を向いています。その先には未だに訳の分からない声を張り上げている人々がいました。まさか今時民衆を扇動して革命でも起こすつもりでしょうか。マイクがハウリングして、キーキーと音を立てています。すると訳もなく周りの傍観者達はどっと笑っていました。私は無視してとぼとぼと道玄坂方面、109ビルに向かいました。人の群れはスクランブル交差点にどんどん溢れています。何かを訴えていました。「監督辞めろ！」誰かの声が耳に入りました。私は振り向いたら男が日章旗を掲げ、裸で怒鳴っています。図体のいいスキンヘッドのマッチョマンがマイクを握っている男を肩車して担いでいました。

それでやっと意味が分かりました。フランスワールドカップの予選で、日本が韓国に負けたことを怒っているのです。確か終了七分前に得点され、韓国が一位になってしまった試合です。日本は一連の試合でなかなか苦戦していました。それが不満の元凶だったわけです。その苦々しさが未だに続いているようです。私は思わず笑ってしまいました。何真面目に気難しいこと考えてるのよ、馬鹿みたい。道玄坂から渋谷駅前を臨むとそれはただ小さな群れにすぎませんでした、

やはりもめています。自然発生的な集まりのようで、警察も苦勞しているようでした。その様子にシャッターを切って、ファインダーから目を外してまた何ともいえない様子を眺めました。私はデモを見たことがあります。ユーゴの隣国でセルビア人勢力を批判しているデモでした。デモは反政府勢力とみなされているので、どうしても軍が強制的に排除しなければならない。そうするとまた非セルビア人の怒りが爆発するのです。死人もでます。それに比べればかわいいものかもしれません。

用を足そうと109ビルの化粧室に向かうと、一足進んでいくうちに妙な感情が訪れました。ここはなにか意味のある場所に見えました。ただの錯覚に過ぎないのかも知れませんが、用を足して手を洗おうとすると、鏡に映る私の眼の下辺りがくすんでいたので化粧で直しました。「もし」と誰かが語りました。はっと後ろを見ました。誰もいません。ここには私しかいません。妙な感じをしながら、また外に出ました。周りを見渡すと、今度は何だか妙な服装をしている男と女が詰めかけていました。女がスカートを開いてお尻をついて座りながらポケベルをいじくっています。肌を靴墨のように真っ黒にして唇はピンクで、服装は制服ですがたぶんどこか改造しているのでしょう。みな私を無視しています。それは当たり前ですが、何だかこの人盛りで私だけぼつんとたたずんでいる、そんな気がしました。私は何となくダサい恰好をしていると感じます。私は前に歩み出てカメラを構えました。109のビルの看板を中心に、その下の広場に座っているデコレーションした女子高生ファッションの対比を撮ろうとしたのです。すると、私に向かって少女たちが私に詰め寄りました。

「ねえ、あんたカメラマン？　どこの雑誌、何の雑誌なの、ねえねえ」

その二、三人の女は相変わらず顔の肌を酷く黒く塗りたくり、髪を真っ白に染めて、服に薄汚いシャツの胸元を開けて斜めに崩して着て、それにやたら短い丈のスカートあわせ、ほとんど下着が見えそうなほど斜めに崩してはいていました。そんな格好で恥ずかしくないのか、と思いながら、相変わらずかすれた声で話を続けます。

「あたしのファッションとってよ。渋谷一のこの斬新な、なんつーか、いい感じのいけてる先端いつている感じ？　そこんところ撮ってよ、ねえ、撮ってよ」

私はめちゃくちゃなその服装を見てまたがっかりしてしまいました。女子高生は掌を真横に向けてピースサインをしていました。

「また今度ね」というなり、私はもみくちゃになっている女の間を抜けて行きました。

「ちえ、ケチ。超MM～」そんな声も耳にしましたが流しました。

日本という先進国にはもちろんたくさんの方がいますが、何かパフォーマンスを見せられているような気がしました。私もいろいろとデモを写真に収めてきましたが、本当のデモは投石や迫撃砲が飛び交い、けが人や死者が出るほど壮絶なものです。まさにバルカン半島の混迷のことで単純に比較するのは人倫に不敬な考えかもしれません。ただ戦闘状態でぎりぎりの命を晒しているような国の人の方が、生きている実感があるのかもしれない。酷い権力者に戦いを挑んでいる目はきりっと輝いていて、頬が引き締まっていました。この雑踏にはただぼんやりと眺めているだけの人がかかなりいて、信号機に上って氣勢を上げている人に拍手を送るだけのような人もかなりいて、明らかに怒っているという度合いが違ってくるように見えます。まあワールドカップと革命を同

列に扱うのは、度合いが違うのは当たり前です。しかしどこか納得がいきません。平和な国での暴動と私が反体制デモとが頭の中で交錯し叫びたくなりました。私はその場を後にしました。私は逃げました。それはこれ以上いると、なにもかも全てを吹き飛ばしたくなる、そんな衝動に駆られたからです。

ゆっくりゆっくり坂を登ります。何か空気が変わっていく感じがします。道が狭まりカラスがカーカー鳴いています。角の交番についたあたりで、立ち止まってしまいました。

「丸山町」と標識が立っています。こんな街は知りません。日中の日が傾き、空が朱色に染まる頃合いでした。私はもう少し歩いてみようという気になりました。丸山町に一步はいると、そこは奇抜なラブホテルが建ち並んでいました。何だかそそられるものがあります。いきなり若い男女がホテルから現れました。一瞬ぎょっとしましたが平静を装いました。私はゆっくり跡をつけました。段々二人との距離が遠くなる。もう大丈夫だろうと思ったところで後ろ姿を一枚撮りました。

その他歩ける道は歩いてみましたが、例の方向音痴で同じ場所をぐるぐる回っているだけです。段々と日は落ちます。そろそろ混み合う時間帯です。夜のネオンが灯る街は意外に絵になる、と思い、またシャッターチャンスを待って何枚か撮りました。驚いたのは女の上半身をはだけさせ、右のブラジャーを外し垂れ下がった乳房を男が揉みながら「ホテルイリュージョン」と紫のネオンサインを灯したホテルへ入っていったカップルです。ぎょっとしてシャッターを切れませんでした。いい被写体だったのに残念です。そのカップルがホテルに呑みこまれたのを最後に、もう帰ろうかとした時に、ファインダーに妙に赤い小さな飲み屋がありました。ここは何回か通った道でしたがこんな店は見えていません。赤提灯に「焼き鳥」と黒い墨で書かれた文字がぼうっと浮かんでいます。私はそこへに足が伸びていきました。

「いらっしやい」

出てきたのは捻り鉢巻きに紺色のTシャツを着て、炭火の上の串焼きを手首をぐるぐるさせて回していました。年季の入った江戸っ子のように、何となく気に入った私は席につくとビールを注文しました。

「へい、生中ね」

店のオヤジはなにか踊るようにジョッキを手にとり、ビールサーバーになみなみと注いでいきました。「はい、はい、おととととと、とと」注ぎ終わると笑顔で、

「へい、生中」私の目の前にジョッキを置きました。

私はこのオヤジに何だか興味を持ちました。

「おじさん、元気ですね」

「へへっ、元気ばかりが取り柄でねえ」なんていいながら手羽先の皿を置きました。

「注文してないよ」私がいうと、

「お客さん、初めてでしょ、ここ？ ま、サービスってやつで」

また、へへっと笑った。今度は私も笑いました。

店の中は誰もいない、屋台ぐらいの広さでしたが、天井は真っ黒の炭だらけな所を見ると、結構繁盛しているのかも知れない。私はカメラを取り出し一枚撮ろうとすると、

「止めろ！」いきなりドスのきいた声で返した。

私はびっくりして何もいえなくなっていました。

「へへっ、これも本店のしきたりってやつで」

と、目線を下におろしてレバーを串に刺していました。私は怪訝な気持ちでビールを一口だけ飲みました。

「こいつもご勘弁の口直してことで」とレモンの香しい鶏軟骨の串焼きを出してくれました。

「お客さん、この辺うろうろしてたみたいだけど、何してたの？」今度は店のオヤジから問われました。

「まあ、何だかねえ、仕事ほされちゃってさ、何しようかなあって、ずっと歩いてたんだ」

「それでこんな所にまで？ お客さんこんな街に女一人で歩いてたら、やらせてあげるわよっていつてるのと同じですぜ」

「おじさん、やってみる？ 私と」酔いが回ってきたのか、私は胸を張ってみせました。

「それは、それは、ご勘弁を」串をぐるぐる回して焼きながらいった。

「やってやるから金よこせってなもんでずぜ」

「あら、失礼しちゃうわね。結構肉づきもいいのよ」オヤジはまたへへっと笑った。

「お客さん、本当ですよ。今時の高校生は援助交際ってのが流行っているそうで、女のほうからやってくれっていう話で、金を稼ぐ。まあ売春みたいなものでしょうが、高校生ですよ。だから年が上がりゃ男が逃げる……」私はぎらりと睨んで笑いました。

「へい、いいすぎでした。すみません。でもそんなもんですよ、あくまで、あくまで今時の若者ってやつは」

「へえ、そうなんだあ、女子高生が売春しちゃうんだあ……」私はちびちびとビールを啜りました。

「ありゃ、また雰囲気壊しちゃったかな」

「そんなことないわよ、結構私のタイプよ、あなた」いいながらハハハと私は笑い、オヤジさんは照れたようにへへっと笑っていました。

「お客さん、カメラマンなの？」

「まあ、一応。でもさ、何だかむなしくて、撮っても撮っても、落選続きなの。やっぱしあたしって才能ないのかなあ」

「いい学校、いい大学、いい会社、それが幸せっていいですがね、そいつは間違いです」オヤジは続けた。

「有名大学を出て、エリートサラリーマンになった女がいましてね。なあんの苦労もない人生だったはずなのに、殺されたんですよ。去年。客の男にね」オヤジはしみじみと焼き鳥を焼いている。私はビールを少し飲んだ。

「その女、男を惹いていたんですよ。この界限で」男は眠たそうにあくびした。本当に妙なオヤジだ。

「月給だっていいでしょう。でもそれでもなにか満たされなかったんでしょうねえ」

私は串をおいて神妙に聞き入っていました。

「何なんですかねえ、幸せって。戦後のあの荒廃した大地の人たちは、きっと何かを求めていた

んでしょうねえ、一生懸命働いて、豊かさを謳歌していたんですよ。白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫。その後にカー、クーラー、カラーテレビってね。それが豊かさだって思いこんだんですよ。でも望んでいた理想も空想も現実化した今の社会に何を求めればいいんでしょうねえ。みんなそれを模索している、新しい幸せを求めている、だけど満たされない。それで欲求不満の大爆発が起きてるんじゃないかってね、最近そう思うようになったんですよ。そのエリートサラリーマン、何か迷いを抱えていたと思うんです。勝手な推理ですがね。何か違うものを見つけられたら違う人生が見えたのになあ、なんてね」

私はその話をしみじみと聞いていました。私が思い描いている夢、それは何なのでしょう。何か感じる。なにかに束縛されている。波長のずれた政治とかには解決できない何か。私はカメラを掌で優しく撫でました。動機はよく分からないけど……私は残りのビールを一気に飲み干しました。

「どうせ一回しかない人生だもの、飛び込んで生きるのも悪くないんじゃないですかね」

オヤジさんはこちらを見ていい笑顔をのぞかせていました。

「一度きりの人生だもの！　いってみるかあ〜」

私は気合いを入れて大声を張り上げました。立ち上がった時、オヤジさんはいいました。

「そこのすぐの道を右へ行きなさいな、お地蔵さんがあるんですよ。まあ、さっきいった女の霊が宿っているってね。迷信かも知れないけど、一つ拝んだ方がいいでしょう。きっと迷いは晴れますよ」

勘定をカウンターに置くと、私は店を出ました。オヤジさんには内緒で店を少し離れた場所から一枚撮りました。

私はいわれたとおりに右に曲がりました。ここからやたら光りが暗くなり、道幅が狭い。アスファルトがごつごつしていてコツコツコツというヒールの音が響き、その音とともにヒールが右へ左へとよじられるとても歩きにくい道でした。道々同じ間隔で女が立っていました。まるで商売敵のような眼つきでキッと睨んでいるように見えました。こちらさんは普通の娼婦でしょう。なぜかほっとしました。年は……確かに年齢は高い気がしました。身をもって金を巻き上げる性風俗、女は何か不満を抱えているのでしょうか。それが愛の表現なののでしょうか。だったら昔の昼ドラと変わらない。例えば涸れた夫婦の情事みたいな。こんなはずじゃなかった。もっと燃えるような恋をしたい。快感を得たい。とかもっと違う男の肉を味わいたい。というような、世紀末的な衝動、少しアカデミックな言葉が横切りって笑いました。やはりちょっと酔っているのでしょう。

お地蔵さんはありました。風を防ぐように竹でできた屋根と柱が建っている。薄暗い蛍光灯が灯っていました。「道玄坂地蔵」と書かれていました。後ろに何かいわれが書かれていたようでしたが、難しい漢字なので読めません。

あのオヤジさんのいっていた話が本当なら、妙な話だ。そのエリートサラリーマンと私はどこかでつりあっているように感じたのです。私は頭を垂れながら考えました。

「生きがいがない」そんな気もしました。しかしその言葉は古臭い響きがあります。私は手を合わせて頭をたれ拝みました。何不自由ない生活をしていたのに、なぜ男を惹く必要があったのでしょうか？　お金でない何か。頭の中に言葉が駆け巡っていました。「情熱が冷めた」百パーセ

ントつぎこむ情熱が消えてしまった、とでもいうような。でもそんな人はいない。いくら面白い仕事なり趣味であっても疲れ果ててしまうだろう。「自分自身の空虚な部分を埋めるために」その空虚とは？ 自分はどうかろう。あちこち歩き回りながら戦争写真を撮っている。そこでの仕事は女としてのリスクはかなり高い。にもかかわらず誰かにつられていくように、世界を歩き回っています。それはなぜだろう？

「写真を撮るために食っているから」うん、なかなかいい趣をもった言葉だと自画自賛して悦に入りましたが、学のない私はそこから話が続きません。「男尊女卑」そんな言葉も浮かびましたが、もっと古臭く満足する理由が浮かびません。

「ストレス発散」ひょっとしたら案外簡単な理由だったのかもしれませんが。というよりも頭の働きは鈍くなって、面倒くなってきたのでしょう。私は笑いながら、その先に向かって足を向けました。その先には勾配が急な階段がありました。電車の音がしました。ちょうど駅前ようです。

「もし」

という女の声が来たのが最後でそこからの記憶がありません。ヒールに小石が挟まれ体をひねりながら勢いで倒れました。そのまま寝こんでしまったらしいのです。起こしてくれたのは人の良さそうな警察官でした。ここは井の頭線神泉駅前。警察官は呆れて、

「で、どこで飲んでたの？」

私は急な階段を駆け上がり、お地蔵さんの所まで戻りました。警察官は私の後ろをついてきます。どのへんだったかなあ、あのオヤジさんさえ見つければ分かると思うんだけど。

「あのね、お姉さん、こないやらしいラブホテル街で飲み屋なんかやっている店なんてないよ、場所悪すぎるよ……しょうがないなあ」

そんな馬鹿な、あのオヤジが私を励ましてくれたんだ、ちっちゃい、赤提灯を灯して。

「はいはい、もうそこから先はいいから、ちゃんと帰りなさい。後のことは適当に書いておくから。全く線路脇で寝ちまうなんて、風邪ひいちゃうよ、あんた。さあ、さ、ちゃんと帰って寝るんだよ。本当にもう」

「いえ、いや本当ですよ。本当にあのオヤジさんに諭されたんだ。お礼の一言もいいたいくらいなのに」

「あのね、僕は警察官だから、この辺の地理も君よりずっと詳しいの。その俺がいうんだからだから、間違いないの」

警察官は自転車にまたがり行ってしまいました。私はその界限をしばらく探しました。しかしまた迷ってしまっただうしても見つかりませんでした。

帰宅すると遮光カーテンをかけて赤色灯をつけました。絶対あったはずだ。あの妙に人懐っこい表情、どこか憎めないあの口調、意外に意味深な話の数々。

芳香族ジアミンという現像液をトレイにどぼどぼと入れフィルムを浸す。現像とはフィルムには臭化銀という物質を還元して銀を残す作業です。しばらく浸すことで同時に酸化させ、その際出来上がる化合物と反応し発色させる。一連の作業を終えると、私はぼんやり昨夜のことを思い出

していました。よくよく考えれば、あんな場所で飲み屋の雰囲気はない。あの警官のいう通りだ。ではあの店はここで寝ていた夢だったというのか。夢にしてはくっきりしすぎている。夢には自分が知っている人しか現れない、と聞いたことがある。あのオヤジは初めて会った人だった。そしてあの駅前から109ビルで、妙な女の撮影を無視して道玄坂を登って行った、あの肉体的な疲れ。会った人だけでなく夢にしてはここまでくっきりとした現実感が夢であるとは思えない。

はっとしてトレイを見遣ると、ヤバッ！ と声を上げました。時間をかけすぎてしまったのです。慌てて取り出し薬品を取り出し漂泊して水で洗います。その時呆然としてしまいました。そうしてできたそのフィルムがほとんど真っ白なのです。一応そのフィルムを印画紙に焼き付けます。

109ビルから撮った渋谷駅方面でわめいている様子の写真や、丸山町で撮ったホテル街の写真や、そしてあの肝心のあの写真も、すべて真っ黒でした。申し訳程度に「ホテルイリュージョン」の紫色のネオンだけしか確認できませんでした。赤い提灯の光は全く映っていませんでした。これまで何回となく現像に失敗してきたが、もう手際よくできるはずなのに大失敗です。

証拠がなくなってしまった。やはりいったように本当はないのかもしれない。いや確かにあったはずだ。あれが夢？ 絶対納得できません。

「……お地蔵さんがあるんですよ」

お地蔵さん、そうだ「道玄坂地蔵」だ。あのお地蔵さんを拝んだ。そこは私の知らない場所だった。あのオヤジさんが教えてくれたんだ。地図帳で道玄坂地蔵を調べ、私は急いで外に出て行って上野駅から渋谷駅まで行き、道玄坂を上がって丸山町のホテル街まで行きました。相変わらず方向音痴でとにかく路地裏ばかりで歩いても、歩いても、私はいつものように同じ場所に戻ってしまうのでした。何となく路地を右に曲がるとそのお地蔵さんが見つかりました。が、その場所あの時とは違うような気がします。何だか全てが嘘のようなように思えてきました。たくさんの花が手向けられていました。その花束の一つに、安らかにお眠りください、とか、あなたに同情しますどうぞ安らかに、とかいう言葉で埋め尽くされています。私はだんだん混乱してきました。山手線に乗っていた純朴な高校生。海外旅行帰りの家族、渋谷駅前の喧騒、写真を取ってくれといったダサい少女、そして確かにあったはずの焼鳥屋とその店主。

手をくるくる回しながら記憶を辿っていくと、一人の女性がやってきて花を手向けて拝んでいました。私は、ちょっと、とひとこと声を掛けたくまりました。あなたはなんで拝んでいるの、と。しかしそんな怪しい言葉を話しかけるわけにもいかず、その女は私に一瞥も見せず流れていきました。私はしばらくたたずんでいました。

急な勾配の階段。ここが私が足を踏み外して落ちてしまって、そのまま私が寝ていたところです。ここで寝ていました。いたはずです。あの店はありませんでした。何だか全てが間違っているような気がしました。私とあのオヤジもこの怪しげな路地のどこかにいたはずです。しかしこの迷宮からあのオヤジに会うことは永遠にないだろう、と悟りました。

私は神泉駅から渋谷に戻りました。相変わらず渋谷はいかにも渋谷らしいいやらしさを保っていました。夕刻近くだというのに長い髪の毛を茶色く染め、カーキ色のタンクトップでハーフパンツを落ちそうになるまで崩してはいてたむろしていました。女は二人で向き合いながら喋ってい

ました。知らない男が近づいてくるのを期待しながら。そして男は軽く女に話しかけ、これからの予定を立てている。道玄坂を下の方の店から始まって、飲んで騒いで坂を上りつつキスをしていた。どこか寂しげな女は強く体を密着させていました。私はいらついで貧乏ゆすりを始めました。いつまでたっても私に声はかからない。仕方なく一人さみしく辺りの写真を撮りながら、一人さみしくスポーツバーでサッカーを観戦しました。

その日の対カザフスタン戦は1－1のドローで、韓国対UAE戦は3－0で、韓国は脅威の全勝で折り返し、何とも不甲斐ない戦いに日本のサポーターは雑言を浴びせかけていました。なんとも収まりのつかない連中をよそに、私は明け方キオスクでスポーツ新聞を買い自宅の上野に帰りました。

部屋は真っ暗のままで私を迎えてくれました。妙に疲れた一日でした。渋谷のスポーツバーで飲んで騒ぎながら写真を撮っていた私はほとんどやけくそでした。ユーゴスラビアはプレーオフでハンガリーと対戦する、と書いてありました。電車の中でも、歩きながらも、そして家に帰ってからもその部分だけを何度も繰り返して読んでいました。

あの廃墟の国となったユーゴスラビアは内紛も落ちつき、私が日本に帰ってくるころにはボスニア紛争はスルプススカ共和国とボスニア・ヘルツェゴビナ連邦に分裂して一応の収束を見せようとしていました。どこか私は中にポーンと放り出されていく感覚を覚えました。体が何かを求めてました。また自分の掌で性器をいじりました。いろいろな光景が目に見えなくて気持ちが昂りましたが、性欲はは泡のように消えてしまいました。その連続写真。ぼこぼこにしてやったあの老兵、私を取り調べた男たち、飲み屋のオヤジ、姉……

全然関係のない人々が私の心をかきまわします。ずいぶん長い時間を感じました。過去から現在と指し示す方角を見ると、真っ暗で何が起こるか分からない未来しか見えません。

「姉さん」と呟いてみました。

目を閉じるとすると体がふっと軽くなりぐるぐると回転運動を始めました。私は卵のように体を丸めました。あの時幼い私がした時のように。家族の裂け目を見たあの時。

目を開きました。もうすぐお金もなくなる。しかし私は決心しました。私は誰かの導きを感じたのです。私はすぐ起きるとカメラを持って外へ飛び出しました。何がそうさせるのか分かりません。ただその時の私は何かに飢えていたのです。

この時から選手の間にもサポーターの間にも監督への不信感が絶頂に達していました。それからほどなく監督は更迭され、ヘッドコーチが代行するという異例の事態となりました。まだ試合が控えているのにもかかわらず、現地で解任されたのでした。六日ほど後に組まれていた対ウズベキスタン戦には一点のゴールを決められたものの、またドローで終わりました。決定力不足、とサッカー解説者がいい出したのもこのごろだったと思います。しかし締めが出てきたというか、今までになかった勢いのようなものが出てきたのを感じました。そして十一月、日本が敵地韓国で2点をあげ勝利するという快挙を得ます。勝機が出てきました。UAE対ウズベキスタン戦はスコアレスドロー。日本は対カザフスタンで勝てばBグループ二位獲得と第三代表決定戦に進めます。緊張と拍動が高まるなか、日本は5－1でカザフスタンを破ります。日本はAグループ

二位のイランとのワールドカップ地区予選最終決定戦に出場が確定しました。第三次代表決定戦の戦場はマレーシア、ジョ・ホールバル、ラーキン・スタジアム。私はマレーシアに向かいました。

マレーシアに到着して飛行機を出ると湿気と暑さが体にボディーブローのようにきいてきます。ほぼ赤道直下で一年中こんな感じだったら汗にまみれて道路上で死ぬかもしれない、そんな気さえました。ジョ・ホールバルはマレーシアの小都市だそうで、何となくこじんまりとした、落ちついた街並みでした。飛行機が到着したのは午後三時ごろで、まだ日も高く、試合前に街並みを見て歩くことにしました。

少しお腹が空いていたので、何か食べ物はないかと思いましたが、食中毒にはならないだろうな、と心配になりました。しかしなんとしても食べなければならない。私は市場の食べ物屋をのぞいて回ることにしました。飲み物屋にはココナッツにストローをさしてありました。その豪快さに私は一つ買い、両手で抱えながら歩きました。癖になりそうなほどよい甘さでした。焼肉のような料理もありました。これはなんだ？ と聞いてもよく分からない言葉が返ってくるので、私はしばらく黙って見ていました。香辛料の入っているたれをつけながら炭火で焼いていました。焼き鳥みたいなものです。そのいい香りに我慢ならずに一本買いました。肉の脂と様々なスパイスをブレンドして作ったたれに、炭火の焦げ目のパリパリした触感が舌に伝わり、同時にそのスパイスの香りが鼻を抜けていきます。私はもう一本買ってしまいました。何かお米かパンのようなものを食べたいと思い、ふらふら歩いていると、日本人が結構並んでいた店がありました。その日本人の一人に聞くと、「ナシ・レマ」という食べ物だそうです。そこらへんに座り、ご飯に赤く辛そうなソースをかけて、キュウリやゆで卵を付け合わせにして食べていました。私も同じものを頼みました。唐辛子にいろいろ混ぜたようなペースト状のソースがかかっています。私も椅子に座り混ぜながらガブリと一口。ひー！ やたら辛いですが、あとをひくほどおいしかったです。完食すると店の主人はVサインをしてくれました。

「頑張れよ」

そんな言葉をかけてくれたかのような表情でした。私は一枚写真を撮っていいかと、言葉も分からず全身で表わしました。すると笑顔でオーケーの表情を見せました。笑った時に出るしわが幾重にも重なっていました。もう老境にかかっているのかもしれませんが、どうやら日本戦の応援に来ているのを知っていたようです。この笑顔を早く写真にしてみたいと思いました。

腹の出っ張りが気になりましたが、スタジアムに向かいます。まあ本当はスルタン・アブ・バカルモスクとかにも行きたかったのですが、今日はおあずけです。スタジアムに詰めかけているのは日本人ばかりでした。

私はメインスタンドの少し日本寄りのところで観戦しました。私はここで「日本人」を撮ろうと思っていました。日本エンドからなら熱狂的に楽しめるでしょう。ですが私は日本が勝とうが負けようが、その時の日本人の表情を撮ろうと思ったのです。初めてのワールドカップに出場できるかどうか。サポーターの歓喜や失望、選手のプレッシャーを撮ろうと思ったのです。

最初のペースはゆっくりしていました。そして攻めあぐんでいるようにも見えました。そしてこの暑さ。選手はもっときついことでしょう。何度か来るシュートチャンス。なかなか決められ

ないでいると、サポーターは汗を拭いながらふてくされたように座りこみました。今度は日本のピンチに。ああ、ああ、ああ、という声や息継ぎが、目の前に、二次元の平面となってあらわれていました。

一進一退の攻め合いが繰り広げられていました。その直後、中田のパスから中山がゴール。ほんの、本当にほんのわずかの緊張の線が緩み、虚を突かれたイラン側はフォーメーションを作り直す暇ありませんでした。日章旗がジョ・ホールバルで翻りました。

前半終了。私はつけたままの望遠レンズで、ピッチを見ました。やはり悪い芝目でした。どちらも同じ条件だとはいうものの、ちょっとしたイレギュラーしたボールが即ゴールになるかもしれない。妙な予感はピタリと当たりました。後半のほんの数十秒間、イランの選手たちは一気に攻め上げる作戦を撮りました。まさか、と日本はゆっくりと自陣を固めようとすると思います。そうするとその動きを縫うようにして駆け上がります。誰も彼を止めようとはしませんでした。

あ、あ、ああ、ああああ！

ゴールを決められてしまいました。

日本陣営はその瞬間、サポーターも選手も、そしてテレビで観戦している日本国民も嫌な予感がよぎったはずです。みな首を落とし、誰も立て直しの戦術を話しあう様子ありませんでした。その表情は鬱陶しい汗ばかりが滴り、うつむき両手をユニフォームで拭き、そしてその両手で顔や頭をかきむしっていました。もう士気を失ったかに見えました。監督の選手へのどやし声ばかりが空しく耳に入ってきました。すると十数分後に逆転のゴールを奪われてしまいます。

男がふたり現れ赤い数字の入った掲示板をあげました。選手交代のようでした。

監督は中山と三浦知良をさげ、城影二と呂比須ワグナーを投入しました。キング・カズをさげるという采配は驚きでした。監督は選手がみなカズに遠慮していると判断したのかもしれませんが。功を奏して中田のクロスに城がヘディングして同点としました。

もはや体力勝負のような様相を呈してきました。どんな作戦もどんな戦術を考えようとももはや選手たちの体力は限界に達していました。監督は岡野を投入します。とにかく走る。走らせてチャンスを狙うしかない、という判断でしょう。岡野はどう思ったのでしょうか。多分嫌だったろうなあ、と思います。

「自分のせいで負けになる」いや、「なってしまった」らどうでしょう。日本中からブーイングのあらしになるのは分かっていたはずですが。でもやらなければならない。いやこれ以上のプレッシャーはないだろうなと思いました。

日本の絶叫は何回あったのでしょうか。岡野は走る走る走る。ほとんどやけくそのように走ります。ゴール前の球を何度もミスしました。それでも走る。イランも反撃に出るそのたびに日本人サポーターは絶叫。しかしひょんとしたところからボールを奪い、中田のシュートにキーパーがボールをはじく。そこに岡野が待っていた。スライディングして……

「おやおやどうしたことだい、君のほうから来るなんて。しばらく会いたくないといったろう？
勝手に来られても困るんだがねえ」

「写真撮ってきました」私は胃液を吐きそうな緊張した声でいいました。

茶封筒から何百枚もある写真を取り出し、牛吉はしぶしぶめくっていました。私はそれを横目にして牛吉の表情を見ていました。数回ぴくっぴくっとする眼の下あたりを見ているといい感触があるな、と私は思いました。

「めずらしいね、君がこんな大衆的な写真を撮るなんて」

「仕方なかったんです。……でも話を聞いてください」

この出版会社は傾き続けていて、何か一発ぶつけないとつぶれてしまうことを、私は知っていました。しかしワールドカップには肖像権があります。そこでマレーシアの観光ブックのようなものを出版するのを企画したのです。

『ジョ・ホールバルの歓喜・マレーシアガイド』

そう書かれたA4サイズのゲラを見せました。牛吉はの表情は変わりました。

「最初のページには岡野のゴールシーンを入れたいけど、肖像権が問題よね……だから奇跡のワールドカップフランス大会出場とか、おめでとうとか、そんな表紙にして、ジャパンプルーのユニフォームを着て叫んでいる人の写真を載せるの」

「ん。日本の観戦バーの写真もあるのか。いいな。俺も見てた。点入った時かなり盛り上がってたな」牛吉は俄然乗り気になってきました。自棄で撮った写真が役に立ちました。

「……それもいいわね、とにかくできるだけ選手の写真は載せない。点を入れられた時の怒号とかがっかりしているサポーターの写真をちらほら埋めていくの。向こうでもテレビ観戦していた人日本人もいたのよ。チケットとれなくても応援に来た日本人、現地でテレビ観戦して大声張り上げてさ。あっちこっちで飛び交って」といいながら写真を出した。

「ああ、これもいいわね」私はもう一枚取り出した。

「ふ～らんすへいこ～う、ふ～らんすへいこ～う」などと連呼していたジャパンプルーのユニフォームを着ている酔っ払いサポーターの写真です。

「なるほど」

私は牛吉の言葉に感触を覚えました。

「試合後の静けさも入れたいわね。ここで監督が指揮していたっていうイメージを入れて、コメント入れてみても面白いと思うの、こういうのもガイドブックならアリでしょ」

だんだん手繰り寄せていると感じた私は少し笑みながら続けた。

「近くのおすすめ観光地やおすすめ料理、夜店の様子とか、スルタン・アブ・バカルモスクなどの観光用の写真も結構あるし、これにコメントをつけても……当日の試合の始まるまえのスタジアムの緊張している表情の写真など、目の前に広がる生の、生き迫る表情を盛りこんだ写真をどんどん掲載していくの」

「今までこんなことしてたのか」牛吉の表情は落ち着いた面持ちで聞きました。

私は一息つくと、「はい」と小さな声でいい、
「……あとこれ、SDカードです。デジカメなら編集も楽でしょう」
「あれほど嫌いだったデジカメで撮ってきた訳か」牛吉は腕を組んで私を見つめ、
「いいアイディアだ、だが……」牛吉は一息ついて、
「お前にこの仕事任せてください、というのとは違うよな」牛吉は続けました。
「何だ、何が目的なんだ」

意味深な沈黙が流れました。私はたくらんでいました。これまでのいきさつがひゅんひゅんと流れていきました。それは全てあの「丸山地蔵」に集結していました。あのお地蔵さんや、あの小さな居酒屋のオヤジさんはどうしているだろう。今思うと夢を見ていただけのような、遠い追想のように感じました。ここまで私をくねくねと進んでここにたどりついた。私は自分でも不思議に思いました。何らかの意味が私の心に訴えていました。

「もう一度ユーゴに行かせてください」

牛吉はしばらく黙っていました。そして歩きだしてコツコツという牛吉の靴音を、私の鋭敏な耳がとらえました。私はややうつむいて目をつむりました。あの独房生活の中、私と姉との確執を思う存分吐き出して、私の心ががらがらと崩れおちていきました。そして平坦な更地になった私の心に一つの芽が生まれました。ユーゴ。そこに私の何かが埋もれているような気がしました。それは確信ではないけれど、ぼんやりと姉が蠟燭で灯して私を待っているような、そんな気持ちが芽生え、それは日に日に成長して私の体を包んでくれました。なぜという疑問は似合わない、ただ私はあの漆黒の世界に再び飛びこもうとしました。何かを感じるのです。辺りの空気がきりりと強ばり、呼吸が止まります。私の心臓はドクドクとした大きな鼓動をうっていました。なにも考えまいと思っても、緊張と殺気に澁みながら倒れてしまいそうでした。私はただ牛吉の返答を待ちました。

「考えとこう」牛吉はいいました。

牛吉は私の企画を黙って受け取りました。冷淡でも親切でもない風でした。私が部屋を出た時、まわりつく締め付けがほどけ、ようやく心のつかえがとれた気がしました。

ジョ・ホールバルで日本代表が出場を決めた時、スタジアムで観戦していたのにもかかわらずさほど興にいらいりませんでした。その前日ユーゴスラビアは欧州地区予選を突破したという新聞記事には微笑ましく感じました。予選通過した国が出そろいワールドカップが厳かに始まりました。

日本対アルゼンチン戦をテレビで観戦しながら、カメラの掃除をしていました。まだ牛吉の返事もらっていません。牛吉は断るかもしれません。もっとも牛吉に断れても私は行くことだったと思います。その時は自分で金を稼がねばなりません。風俗でもキャバ嬢でもなんでもして金を貯めようと覚悟は決めていました。あの渋谷界隈で。

シャッターの部分調べます。シャッターテスターの数値で油をさし幕速を調整します。そしてボディー下のカバーを開け、ギアや連接レバーを確認します。時々引っかかる時があるのですが、今回は正常でした。

カメラという機械は精緻に満ちて、全てが連動しなければならない。それを掃除しながら百種類も二百種類もあるばらばらになったねじやギアを頭の中に思い描き、そして被写体を想像することで、どのようにも最適な設定にすることもできます。そこに銀塩カメラのいいところなのですが、それゆえにこのような精密機械になってしまい設定が難しくなってしまうのです。これだけでもプロ並みの知恵やテクニックが必要になります。デジタルならこうはなりません。すべて光量やバランス、シャッタースピードも設定も最初から設定されています。新機種が出るたびにきれいな設定になる、つまり買い替えなければいい写真が撮れない、とそういう事になります。デジタルカメラは楽にきれいな写真が撮れますがそれは画一的で、銀塩マニュアルのように個性的な写真を撮ることはできません。姉はそんなカメラを扱っていました。姉は何か訴えたかったような気がしてなりません。

巻き戻しノブ、シャッタースピードダイヤルや巻き取りレバーを外してトップカバーを外し、スクリーンとプリズムを清掃します。埃がついていたのでブロアブラシでかきだしてレンズクリーナーで拭きました。ねじや外装部品を中性洗剤で洗い、乾かし、組み立てて元に戻しました。その時「ゴール！」という雄叫びがありました。バティストウータがボールをキーパーの上にふわりと蹴りあげ、ボールはトントントンと転がりながらゴールにするすると呑みこまれました。ああ、と私は思いました。何の感慨もなく、冷めた声をあげました。

私は組みあがったカメラを持ち抱えました。しっかりと脇を閉め、レンズ部分を右手でしっかりと支え巻き上げレバーを引き、シャッターを切りました。カシャッ、という軽妙な音にしばしうっとりしました。今までは耳障りだったこの音が心地よく感じられました。レンズを表にして左手でシャッターを切りました。同じ音を立てて、一瞬幕が開きすぐに閉じました。問題ありません。宇宙は一瞬一瞬の連続でできています。動きのある世界からその一瞬を切り取るその「静止した世界」に永遠が宿ります。私はカメラのボディーをさらに磨きをかけました。黒黄色の輝きに何ともいえない高揚感がありました。またあそこに行くのだという思いが駆け抜けていきました。

それは姉が招いている怨念でしょうか。

私は姉への思慕と怨念のはざまを往復していました。憎悪していましたが、憧れてもいました。ぎくしゃくとした生活は確かにありました。ただここにあるカメラの黒いレンズ窓を眺めていると、未だに喪失感を強く感じます。ですがそれは真逆の感情のふらふらとした不安定な綱渡りなどではなく、競争心が勝っていました。肉体関係に走った姉への憎悪と私独りで生き抜いていくというきつい現実を考えざるをえません。姉が自殺してから、自由になったわくわく感以上に、厳しさは頭にこびりついています。ここで姉は首を吊っていました。気味の悪さもありました。しかしいい意味でも悪い意味でもライバルだった姉とこの部屋で格闘していたのかもしれない。ただそれだけでは言葉足らずのような気がしてならないのです。あの自殺した現場のちゃぶ台の上にのせられていたカメラ。警察や軍の搜索で持ち出されたものが、こうしてまた同じところに鎮座しています。人差し指でつついてみる、指で触れてみる、そして取りあげて構えてみる。その質感は凹凸のボディーのある質感が妙に手になじんでいました。姉と同じ感触を得ました。姉のただ一つの遺産で大事に保管する義務のような冷たい拘束感が、温かみのある趣味へ、そしてやがてそれが本職になろうとしているのです。明らかな変化です。この変化は私を飛翔させ

、自由にさせてくれました。

「自由？」実は姉の呪縛かもしれない。薄暗い居間で私は笑いました。カメラのボディーを人差し指でなでながら。そして軽くキスしました。写真とはなんでしょう。写真週刊誌の写真、それは単なる嫌がらせです。しかしそのみだらさ加減が芸術ともなりうるのです。その境界線は？ 私はカメラに問いかけます。くすくす笑っています。姉の笑い声でした。

撮レ！ 撮レ！ 撮レ！

突然声が聞こえました。微かな声でした。姉の声ではありません。以前聞いた加工された低い声でした。周りの空間は歪み私の体は震え始めました。がたがたさせながら徐々に笑んでいる自分に気づきました。人間の持つ汚らわしさに興奮を覚えました。

六月二十五日ユーゴスラビアは決勝トーナメント進出を果たすも、二十九日オランダに負けてしまい、新生ユーゴのワールドカップは終わってしまいました。

連日日本代表の出場メンバー予想だの、戦術だのと放送されましたが、私はあまり感慨を覚えませんでした。火薬の臭いで目が覚める国にいて、子は殺され、母親を嬲られ、父親は体中に蜂巢のような弾丸をぶちこまれたりされながら、生き残った奇跡を懸命に生き抜こうとしている彼らの気持ちを思うと、眠気に襲われて翌日の出勤が大変だ、などというインタビューを聞くにつれ、ここに生きている自分の空しさに覆われたものです。

何とかして彼らの生活を写真にとどめたいと思っていました。この日本にいて、生きていること自体が曖昧なこの国を逃げ出したいと思っていました。しかし行きたいといってもどこかに甘ったるい気持ちが潜んでいて、うわべだけでその実いかにも善人らしくふるまっているのです。それを私は自分自身に「この人でなしが！」と独りで呟きながら、カメラのボディーを念入りに磨いていました。

牛吉からの手紙が届いたのは、年も越えたある晴れた日でした。

前略

ぐたぐたいうような話はしない。要するにもう一度お前をユーゴに派遣することに決めた。理由はいわない。ただし今回は自分の力で行け。前に行った時は安全性がどうのこうのといい立て迷惑をかけてくれたが、今度は全責任はお前がとれ。それがもとで死んだとしても、俺は一切関知しない。骨ぐらいは拾ってやるかも知れんが。金はこの口座に入っている。餞別みたいなもんだ。このチケットは本当の片道切符だ。怖いならさっさとカメラマンの仕事はあきらめろ。一人でカメラを持って戦争写真を撮るなんていう呑気さの危険がお前にはまだ分かっていない。それだけだ。健闘を祈る。

草々

牛吉の乱雑な筆致にしばらく言葉が出ませんでした。本当に、本当に？

そして私は光降り注ぐ青い天を眺めました。まず冗談のような気がしました。そして恐怖がありました。そしてまた、臆病者の言い訳が始まりました。

ここまできたら行くしかないだろ、女が行くには危険が多いじゃない、そんなことを今更いつてどうするんだ、だっていきなりいわれたら、この意気地なしが！

いいえ、本当は行きたいのよ、あの無残な地には生を全うしている、本当に生きている感じがするのよ。

だったら行けばいいじゃない。

「ああ、いいわよ！ 行くわよ！」

荷造りを終えたのは午前一時を回っていました。少ししか眠れないな、出発は次の日でもいいよね？

また始まった。そんなこと言い訳にするな！

布団の中で活を入れるとせきこみました。一回せき込むと止まらず、二回三回と続いて体を起こして、水差しの水をがぶ飲みしてやっと落ちつきしました。

私は仰向けになって大の字になりました。首を右に向け窓から星を見ていました。大した星は見えません。東京の空気は澱んでいるのです。ああ、と呟きました。

死ぬかも知れないぞ。

私は自分にいいました。答えは返ってきませんでした。自然と姉が暗がりの中を見守ってくれているような気がしました。そう思っているうち自然と瞼がおりました。

ユーゴスラビア連邦共和国はチトーというカリスマ的政治家の下に出来上がった。そのカリスマが後継者を決めぬまま死去すると、共和国の一部、クロアチア共和国に独立暴動がおこった。当然ユーゴスラビア連邦軍を派遣し戦闘状態となったが、それは政治的意図と取られかねない選択だった。当時のユーゴスラビア連邦の大統領はミロシェビッチというセルビア人であった。クロアチア共和国にはセルビア人がいる。ミロシェビッチの意図は連邦の安定を保つためという意味よりも、軍を派遣しセルビア人の勢力を拡大させるためなのだ、というふうに受け取られてしまった。同様にスロベニア共和国が、モンテネグロ共和国が、そしてコソボ共和国が戦闘状態となる。

混乱が続くにつれ、ますます民族対立が強まった。ユーゴスラビアの構成民族はセルビア人が一番多い。この混乱はセルビア人が引き起こした、と世界に喧伝された。それが先進ヨーロッパ諸国にそのまま伝わってしまう。ドイツが、フランスが、これら一部の独立を承認してしまう。いつの間にか「セルビア＝悪者」というパターンにすり替わる……血塗られたバルカン半島の歴史はいつも同じような経過をたどることになります。

読書に疲れた私はチェアをさげてキャビンアテンダントに毛布をもらい、顔をうずめました。

「コソボ」

この地が世界の暴動の中心になりつつある。そういえばストイコヴィッチもコソボの出身だったはずだ。記憶が定かなら連邦制が維持できていたころユーゴスラビアカップで二度優勝していたはずだ。彼は故郷の惨状をどう思っているのだろう。

セルビアの首都ベオグラードから入国して、コソボへは長距離バスで六時間かかります。正午にバスは出発し深い緑に覆われた道を南へ南へ進みます。夕方に州都プリシュティナに到着しま

した。きれいに晴れた日でしたがいわゆる大陸の気候で大変寒かったです。

場所は違いますが、明らかに酷くなっています。駅前の商店、喫茶店などの家々が攻撃的になり、原形は分かりません。しかし人通りもあり、ここで戦闘があったのかと思うほどです。日本の報道を訝しく思いました。まだ二月でしたのでその寒さは日本の比ではありません。大陸特有の寒さにわけの分らぬいらだちが募り私を狂おしくさせました。それはこの地の気候とか民族対立があるので怖いとか、マフィア化している社会だとか、文化の違いだとか、学校で習う知識でなく、自分自身の精神の髓から肉体の表面に至るまでの発露、いや精神のよりどころを渴望してやまない自己嫌悪のようなものに思います。

コソボにはペーチというセルビア正教の聖地もありますが、ここにいる人々はほとんどイスラム教徒のアルバニア人です。コソボの人口比率はアルバニア人九割、セルビア人一割くらいの割合でしょうか。セルビア正教徒のセルビア人が領土の問題で礼拝できないというのはかわいそうな気もしましたが、ミロシェビッチが大統領に就任後、アルバニア人の公職追放に発してから、さらに自治権を剥奪して、セルビア語のみを公用語にし、従わないと軍を投入するという徹底的にセルビア人式に改める政策がどっと入ってきたのです。そういういきさつを考えると、アルバニア人に同情してしまいます。

若い女が私の前を速足で逃げていました。男も引き留めようと小走りで自分の前を横切りました。

「ねえ、待ってよ。どうして僕から逃げるんだい」

「あなたがセルビア人だからよ」

「そんな、そんな理由ってあるかい。僕は……僕は君を愛している」

「あなたと私はもう絶交よ！ 近寄らないで！ 私が殺される！」

ぼろぼろの壁にはそんな下手な絵とスペルの違う英語の文章が描かれた紙が貼ってありました。つまらない小説の一編のようですが、殺伐とした雰囲気醸し出していました。

私は長くバスに乗っていたので疲れしました。その場で座りこんでしまいました。その時数発の発砲音がして、その音で身がひっくり返りました。ゆっくりと頭を上げると、何の変化もありません。「ここは危険だ」と咄嗟に判断した私は、重い荷物を抱えながら走りました。その時後ろから肩を掴まれました。驚いて声を上げようとすると口をふさがれ体の向きを反転させられました。

「ようこそ、地獄のコソボへ」流暢な英語であいさつされました。私は腰を抜かして、ようやく一息つきました。

「今のはかんしゃく玉。でも急いで」

誰だこの人は。一瞬戸惑いましたが、危険に直面していて、すぐ恐怖に切り替わりました。常識が粉碎されるのを目の当たりにしました。チトーとかいう人が唱えた、違う人種、違う民族同士の男女が苦難を乗り越え真の友愛に近づくような話は、全くのおとぎ話でしかありませんでした。ユーゴスラビア人という人類普遍の原理に基づく人間共通の遺産は、古代遺跡のように風化してしまいました。ぱーんという軽くはじけた音がまたしました。

私は抱きかかえられ両方の足で何とか立ち上がりました。重い荷物を持ってもらって手をひ

かれ、私は息も絶え絶えにとにかく走りました。本当の弾が当たらないことを祈りながら、石造りで四方を囲まれたところに逃げ込み、ようやく一息つきました。

「俺の名前は、クリスティアン・アダムだ、よろしく」

私は荷物をどけて、怒りを閉じ込めながら振り向いた。やたら背が高く髪はブロンドで碧眼、細い黒ぶち眼鏡をかけ、ノーネクタイの茶色シャツに緑色のセーター、首には赤いマフラーを巻きダークグレーのジャケット、黒いPコート、ジーンズに小さな旅行鞆という身なりでした。アダムは手の皮が厚くて私の手の二倍はあるかと思うほど大きな手を差し出すと、私もおそろおそろ手を差し出す。

「私は、木原悠。フリーカメラマンよ。ありがとう」

すると、潰れそうなくらいぎゅっと握られ、痛っ、と手を抜くこうとすると、はははは、と笑いながら力を緩めた。

「君はひとり？」ジャーマン・イングリッシュでアダムは尋ねました。私は頷くと、これまでであった男たちと同じ表情で、

「こんな危険なところ、女一人で来るなんて……」

「ヤッテクれっていつているようなもんだぞ？」

私は言葉を先取りしていうと、アダムは肩をすくめました。

「僕も一人で来たんだ。だけどやはり一人は危ない。どこから弾丸が飛んでくるかわからないからね。僕は欧州の言語はだいたい喋られるから、写真を君に任せたいな。一緒にチームを組まないかい？」

アダムは丁寧な英語で私を誘った。確かに一人は危ないかもしれない。男とチームを組むのもハイリスクなんだが。

「ええ、いいわ。よろしく」

あまり考えずに同意しました。そしてもう一度握手した時の力は幾分緩んでいました。

ホテルにチェックインし、部屋に入るとその場でベッドに倒れこみました。体が重く、妙に心がくすみしました。それはやがて丸い球体となって心臓辺りにもやもやとわだかまっている落ち着きのなさを感じます。

頭に荷物を放り込まれた。痛っ！ 怒ろうとするとアダムは、まず部屋の窓にかかっているカーテンを閉めました。私はまず、ぞくっとしましたが、そういう意味ではないらしい。カーテンを少し開けて外を確認していました。

「ここもあまり安全じゃなさそうだ、明日はもうここを出よう」とアダムは私にいいました。私は促されてカーテンの隙間から外を眺めました。

そこは大きな空き地があり、子供が遊んでいました。サッカーのようでした。都市だけあって商店街のようなところもあり、中年の婦人がボールをかぶって食料を売り買いしていました。

「あまり危険は感じないけど……」

「いいかい、さっき君がバスから降りたことから分かるようにここは交通の要衝なんだ。人も集まる。国中が逼迫しているのに婦人が外に出て子供は遊んでいる。だから悪戯まがいのかんしゃく玉で驚かしたりする。あまりにも無防備だ。僕ならまずここを攻撃するね」

アダムの話に頷きながらも、考え過ぎじゃないかという私の考えの方が勝ってしまい、

「ねえ、ここを歩いてみない。この様子だってコソボの現実でもあるんでしょう？」

ユウ、危ないよ、というアダムを後ろに聞いて、私はカメラ鞆を持ち外に出歩くことにしました。

結局アダムも付いてくることになりました。アダムは持っていた鞆ひとつだけ、全部の荷物を持って出てきた格好でした。何だか妙です。

「一応これをかぶった方がいい」アダムはイスラム教徒の女が被るベールをくれました。私は何かいかさまをしているようで、不敬な気がしましたが危険を避けるためにと思いかぶることにしました。

道は舗装されていますが石が多く転がって、所々舗装がはげていました。広場の子供は本当に無邪気に遊んでいました。もちろん芝生ではありませんが、土を踏み固めた立派な遊び場でした。子供はみなサッカーに興じています。私はほっと一息つきました。そして私は座ってカメラを構え一枚撮りました。凍った水たまりにボールが入ると、ガラスのような陽光が反射してきらきらと輝いていました。ボールの動きがイレギュラーして止まり足をとられながらもそんなことに関係なく、服に泥がつき靴が汚し泥んこまみれになりながらもボールを追っていました。

「必死なんだな」アダムはいいました。えっと私は見上げました。

「子供が一番恐怖を抱いている。将来はサッカー選手になって家族みんなで安全な場所に住んで、おいしいものを腹いっぱい食べたいと思っているのさ」

子供の夢を壊すようなアダムの言動に私は頭を引っ叩いてやろうかと思いましたが、金切り声で呼び合っているのを見ると、何となくその必死さのようなものは感じられます。ある体格のいい子が明らかに大きな体をぶつけて、その十歳くらいの子供にチャージしました。その男の子は簡単に倒れました。ゆっくりと立ち上がろうとすると、今度は大きい方が腹に蹴りが入りました。そこでゲームは一時中断され、そのチームの子が取り囲みました。小さい子の味方の選手はみな逃げてしまいました。

「なんだよ文句あんのか」

そういつているような気がしました。その体格のいい子が左肩をつつくと、また誰かが右肩をつつき、後ろへ倒れそうになるとまた転んでしまいました。小突き合いが始まりました。小さな子どもは両腕で頭を守り地面に転がるばかりでした。踏みつける子もいます。するとそれは周りにどんどん感染していき、1対1の壮絶なるリンチになりました。

「行こう」アダムはいいました。

「放っておいていいの？」アダムは笑いました。

「しよせん子供同士のケンカだよ、気にすることないさ」

でも、と私はいおうとしましたが、

「止めに入ると、ちょっとした民族問題に発展するからな」背中を見せていいました。

アダムは商店街の方に向かっていきました。

ん？ と私は首を傾げました。

そこはベールをかぶった婦人がひしめき合っていました。みなかごを持ち歩き、食材などを買い求めていました。

「……！ ……」奥の方でなにやら声が聞こえます。ケンカのような口ぶりです。

「なんていっているの？」

「まあ、何というか……昨日よりも値段が高すぎるっていっているようだよ」

その婦人に呼応する婦人が集まりました。ここでもだんだん怒号が酷くなって店員の手や首を引っ張っていました。店員の女は力を振り絞って首の手をひきはがしますが、多勢に無勢で引き倒されました。店頭の果物はばらばらとこぼれ落ち、隣の店のものが止めに入るも無視され、奇声を発しながら通路に倒れました。店の女の頭を足で踏みつけ、どさくさまぎれに果物を盗んでいきました。

「行こう」アダムはいいました。

「見て見ぬふりをしろっていうの！ あなたも男なら止めに入りなさいよ」

「無駄だ」というなり先へ先へと行ってしまいました。私は追いかけます。

「なんなのあんた！」私は激昂すると、

「たぶんあの店の女、セルビアの血が入っているんだろう」

アダムは背中を向けたまま足も止めずいいました。

私は啞然としました。そして自分の無知ぶりに恥ずかしくなりました。あの子供たちも……みな生きるために精一杯なのだ。私は冷や水をかけられたような気がして、しょんぼりと首からさげたカメラをいじくりながらアダムの後ろをとぼとぼ歩きました。

市場を抜け数十分、ずっとそのまま歩きました。もうここは田舎道です。辺りは荒野で地平線の向こうまで何も見えません。夕刻でしたが太陽がとても高く感じました。もうホテルに戻ろう、と私はアダムにいおうとすると、背の高い建物が現れました。寺院だ、とアダムは教えてくれました。その前の道で困った顔をした痩せた老人がうなりながら狭い道の間を往復していました。

「どうしたんです」アダムは尋ねました。

しかしその老人は答えません。多少英語は分かるようでした。

「困っておられるように思いますが」

アダムは何とかして話を聞こうと、喋る言葉を換えたりして何度も続けていました。

強い風が吹きました。その風に乗って、体を震わせると何か妙なあの感じを受けました。

風が声に聞こえました。「姉さん」と私は軽く呼びかけてみました。返答などありません。

アダムは得意の言語能力をくししてIDカードを見せるとやっと安心したらしく、老人はテーブルレコーダーを介して話をしていました。酷く寒い日でしたが、空気が乾燥しているせいでのが渴きました。こんなに寒いのにアイスクリームが欲しくなりました。

「アダム、水ない？」というアダムはちょっと待って、といいながら無視し、得意の難しそうな言語を駆使して話を交わしているようです。

一体どこまで来たのだろう。後ろを見ると、さっきまで活況のあった市場は遠く見えなくなっていました。「帰れるのかな」ちょっと不安になりましたが、とりあえず信頼できる男がいるので何となく安心でした。

「カメラの用意できている？」アダムはいいました。何を撮る気なのかわかりませんでしたが、

「大丈夫よ」と返しました。

「オーケー、じゃあいっしょに行こう」

何も分からず私は後をついて行きました。白い円形の背の高い建物で、私は、ん、と鼻につく臭いを感じました。

初老の男は立てつけの悪そうなドアを開けました。キィという音がたちました。

むっとする臭い、なんだこの臭いは？ それにハエがいやに飛んでいるのが気になります。私はアダムの跡をついて行きました。生暖かい空気が漂い、その臭いがますます濃厚になっていきます。

薄暗く広い部屋に入りました。薄暗く何も見えませんが、自分の影がずっと遠くへ延びていたので、広い部屋なのでしょう。もちろん何があるのかしばらくわかりませんでした。

人の山でした。死んでいます。

私は迫りくる臭いと光景に声の出し方も忘れました。血が固まった濃い赤にまみれており、足が根本からないもの、腕がもげているものなどはざらにいて、胸がはだけている裸の女性、凜として静かに死を迎えたようなもの、迫りくる死に決死の形相で睨むような、怯えているような、泣いているような、とても言葉でいい切れない死体の山がこの部屋に集まっていました。

アダムは「酷い」と顔を歪ませていました。

私にはそれが冒涇のように感じました。私は「死んで下さっている」と敬語でいうべきではないかと心の内でいいました。心の中で真っ赤な花が咲きました。

私はすでにとシャッターを切っていました。全く無意識に撮っていたのです。それは死を悼むという感覚ではないような気がしました。

「ありがたい被写体」

なんだ、この高揚感。いつの間にか清新な心が遠くに行ってしまうと、自己満足に没頭する自分がいました。

「何という卑しさか」

と私はシャッターを切っている自分を叱ります。しかし内側から熱い血液が流れ出すのを拒むことはできませんでした。ああ、ここにもいる、そこにもいる、ああ！ あんなどころにまで。

唾を飲み込みました。その激しさは人倫を軽々と超えていき、生と死の狭間をさまよっていた私はくっきりとした人格に覚醒しました。魔女か、女帝か、誰も私を止めることはできない。私は「生」を放出していました。その裏側にある「死」。死は生の延長上にあるのではありません。「死」があるから「生」がある、私はこの「生」を、「生きる」ということを、今はっきりと引き寄せたのです。怖いものなどありません。死の淵から見える生は讃美歌のような神々しい波長を持っています。そして人倫に対する暴力は、芸術にさえ見えました。これが世界か！ 人と人とが殺し合う不条理。それは人間が人間であるが故に生ずる、宿命。私は飛び跳ねながら歓喜に酔っていました。遠い意識の彼方にある、桃源郷を。そしてそれは霊長類の奢りに他ならないことを。もう一度見ました。ああ、死んでいる、ここにも、ここにも、目玉をくりぬかれた顔、顎が吹っ飛んで顔中血糊で固まっている男。腹を引き裂かれて内臓が飛び出ているもの、顔面の皮膚を剥がされた子供の死体あります。皮膚を覆っている真っ赤な粘液がかさかさになって、悲鳴を上げたのか、口を大きくさせて硬直していました。私はここにある死体の山をかきわけかき

わけ、うっそうとした芳醇な臭いを思い切り吸い込みました。黒ずんだ死肉をぺろりと舐めました。触れた舌の感触はジャーキーのようにカサカサとして、その冷たい体温に私は舌の根元にある唾液腺から唾があふれ、ピリピリした痛みを感じました。血は赤黒く錆びた金属片のような味でした。

もっと味わいたい。どうしても死体を味わいたくなりました。

死体を抱くことができたなら、どんな絶頂があるのだろう。興奮が肉から絞り上げた油のように滴る様子を感じた瞬間、私は服を脱ぎたい衝動に駆られました。後ろの方でアダムと老人が気になりました。私の陰部は濡れてきました。彼らがどこかへ行ってくれたなら、確実にその欲望を成し遂げていたでしょう。

「ユウ、もういい。早くここを出よう」

「いやよ、もう少しだけ撮らせて」私は無視してシャッターを切り続けました。私はこの死体を犯したくてなりませんでした。無精ひげを生やした中年の男にぞっこんになり、ズボンを脱がして陰茎を舐めました。

「ユウ、しっかりしろ何をしている、もう行くんだ」

アダムは腕をしっかり握って、引きずりながらその場から出ました。外に出ると、日が暮れていました。

「いやよ、なんで？ 私はここにいたい」

その瞬間、花火のような大きい爆発音がして、体を伏せました。

「始まった」アダムは私の腕を握っているのに気がつきました。カメラは手元にしかしレンズカメラは置き去りでした。「レンズ、レンズ」いいながらアダムの手を払って戻ります。「ああ、馬鹿。ユウ」

ドアを開けると目の前に鞆がありました。と同時に大砲の砲丸が天辺に命中しました。

「早く」とまたアダムは私の脇の下を持って引きずりました。真っ暗な夜に炎の上がった屋根が落ちてきました。大きく遠まわりをして寺院の裏手に回りました。

「あの老人は？」

「多分大丈夫だろう」曖昧なあしらい方に憤りましたが、

「お前だって俺のいうこときかないで戻ったじゃないか、そのおかげで俺の腕はこれさ」

アダムの腕に鋭い切り傷が走っていました。はっ、として私はここがどこなのか思い出しました。砲撃は終わったようです。意外とあっさり終わったので安堵していると、これはボクシングで言うジャブみたいなもので、相手の出方をうかがっているのだ、とかアダムは解説しました。とりあえずホテルに戻ろうとしましたが、夜道は危険だということで木陰に隠れて寝袋の用意をしました。アダムの鞆には寝袋だけ入っていたのです。一人分しかありません。

「私はいいわよ、アダムが使って」アダムは一言、「俺は紳士だから」

アダムは笑いました。言葉に甘えて私が寝袋を使いました。

「明日ホテルに戻るんでしょう」と尋ねるとアダムは「たぶん手遅れだ」といいました。

「え？」と私は眼をぱちくりさせると、

「あの界限はもう攻撃されているさ」私は唾然としました。続けて「僕らは運がいい」

アダムは寝転びながらジッポのライターに火をつけ、ボロボロになった新聞の切り抜きを開いて

いました。私は寝袋から体を伸ばして身を乗り出した。アルファベットは何とかなるがこの文字は読めない。しかし……

「読めないだろう、これはアルバニア語の新聞だが、何の記事かは分かるだろう」

その上に大きく載せられた写真がずばりと目に入る。男、女、子供が折り重なって放りこまれている。「これって……」

「『プリシュティナ郊外でセルビア兵によるアルバニア住民大量虐殺発生』と書いてある」

「虐殺！」私ははっと息を止めました。ここも殺し合う戦場だ、さっきのあの死体の山も虐殺されたものなのだろうか。

「コソボでは一割のセルビア人が九割のアルバニア人を支配している。だがこの事件が本当にセルビア人によるものなのかは分からない」 アダムは続けて、

「欧州諸国が共同で調査団を派遣することが決まっているが、結果は見えている」

「どうなるの？」

「戦争さ。この事件で隣国のアルバニアやセルビア本国がここに派兵するだろう。そうしたら特に欧州にいるアルバニア人やセルビア人が騒ぎ出して、それに敵対する民族が抵抗して難民が出て……まあとにかく大騒ぎになる。欧州諸国は黙っちゃいないさ」 続けて、

「だが違うと思うね。とにかくコソボのアルバニア人テロリストはさっきいった大騒ぎを引き起こすのを狙っている。コソボ解放軍つまりアルバニア系テロリストによる内ゲバじゃないかと俺は見ているんだ、セルビア人勢力の犯行であると見せかけるためにね」

「じゃあなに、これは同じ民族が殺し合ったっていうの？」

「それが戦争だ、口実が全てだ」

「でもそれじゃ世界は納得しないんじゃない？ 悪いのはセルビアだって海外でいっているようだけど？」 私が問いかけると、アダムは、

「そこに俺の存在意義があるんだ」 アダムは続けました。

「本当は分からない、でもこんなの競り合いみたいなものさ。こんなことを何百年も、何千年も……前から繰り返し……ていたんだ」「誰と誰が戦っているのかなんてわか……らない。嘘でもなんでも僕は……記事にして世界に……発信する。そうすれば……」

アダムは知らず知らずのうち眠っていました。夜は冷えます、私は自分の羽織っていたコートをかけてあげました。

翌日もよく晴れていました。私は心が朗らかになったような気がします。アダムは行きたいところがあるというので移動しようといいました。そこへ行くための足、車がなければいけません。あの爺さんに車を借りようとアダムいいました。私は途中まで付いて行きましたが、ここからは女は無理だから外で待っていて、といい、心配してうろうろしていると、後ろからクラクションが鳴りました。アダムはちゃんと車に乗って帰ってきました。

アダムが運転しています。車はマニュアルの車で、年式の古いパジェロでした。私はオートマチック車の免許しか持っていなかったのです。

「本当は装甲車を借りようと思ったんだけど、さすがに持ってなかった」

笑っていました。装甲車の運転免許を持っていることに驚きましたが、アダムは、「ドイツには徴兵制度があるからね、運転できる人も結構多いんだ」なるほど、と私は腕組みをしながら頷き、車に乗りました。車を走らせると、アダムは、「俺は一応ドイツの国際ジャーナリストということになっているけど、俺よりもむしろ君の方が安心なんだ」アダムはいいました。「なんで？」と私が問いかけると、「バルカン半島はヨーロッパの火薬庫って昔からいわれていてね」

私は社会科の授業を思い出しました。第一次大戦は青年の弾丸から始まった、とかいう話しか知りませんでした。

「とにかく複雑なんだ。このバルカン半島はどこも問題だらけさ。セルビア人とアルバニア人から生まれた子供もたくさんいる。そういうのも一緒くたに殺されたりするのが現状なんだ。人権はどうするのか、民族のエゴをどう抑えるか、領土の奪い合いをどうするか、誰にも止められない。とにかくみんなお手上げ状態なんだ」

「こっちが中立の立場なんだって説得しても駄目なものは駄目で解決にならないんだ。欧州は戦争に次ぐ戦争で恨み辛みがどうしても残る。偏見や差別意識がどうしても残るんだ。俺だって無意識に歴史を背負っているから本当に中立かどうか怪しいもんだ」その時車が飛び跳ねました。一瞬呼吸が止まって、咳こみました。道に窪みがあったのでしょう。ダイジョウブ？ とアダムはいきなりドイツなまりの日本語で尋ねました、私は大丈夫だと手を振りました。

「その点日本は欧州から遠いし、直接戦った歴史がない。結構どの国からも好感触なんだよ、日本って。だからもう少し積極的に諍いをなだめてくれると助かるんだけど」

また車は飛び跳ねました。道はでこぼこしていて舗装も不十分です。私はそれに大きく揺られながら、日本のことを考えました。あの舗装が行き届いている日本を思いました。あの時の車の乗り心地を思い出しながら。

「駄目よ」

アダムは幾分緊張した表情で私を見ていました。私はすぐ前を向くように前方を見るよう促して、私なりに日本のことを考えました。

「無駄よ、日本なんて」

「どうして？」

私がサラエボから帰ってきた時の、あの官僚達のおどおどした目を思い出しました。国益を守ることといいながら、こと外交交渉となると、ろくに反対できないでいる奴ら。とにかく彼らにとって重要なことは、一民間人を助けることより、自分が責任をかぶるのを避けて、地位を守ることの方が重要なのです。あの部屋にいた全てのものは、自分に責任がおよぶのを恐れている。こんな国がこの戦闘地帯に恒久的平和を築こうなんて……ふっ馬鹿馬鹿しい。

「ねえ、どうして？」アダムは前を向きながら妙に食い下がります。

私は外を向いて無視しました。車は荒涼とした大地の上に一本定規で引っぱったような直線の道路を北へ進んでいきます。風が酷く、冷氣で固まった砂埃がフロントガラスに溜まって、ワイパーをかけながら進みました。所々で小さい粗末な小屋から人が出てくる様子によく出会いま

した。それは道々増えていくようでした。ほとんどが中年の女や老婆で子か孫であろう手を引しながら歩いていました。彼らもまた我々と同じように北へ向かっていました。ここから長い道のりを歩いて逃げるのでしょうか。通り過ぎるたび私は何か罪悪感を覚えました。向かうにつれ人の数がずいぶん増えています。人で道が狭くなってきました。そしてずっと遠くに黒い点が現れました。あの爺さんのものと同じくらいの背の高い建物で、そこに黄色い石を積み重ねた家々が見えます。激しく揺れている屋根はヨットの帆のような丈夫そうな布に覆われていて、それはプリシュティナほどの規模ではないにせよ、この町の市場のようでした。しかし市場には人っ子一人おらず、大勢の人が車一台通れるかという細い道に人は溢れていて、やはり北へ向かっていました。

「ところでどこ行こうとしてんの？」私は語気を変えアダムに聞きました。

「逃げているんだ、とりあえずベオグラードへ行って、ハンガリーあたりに逃げる」

「え？」

急にアダムの顔が厳しくなりました。全く別人のような表情です。

「逃げているんだよ、もうここも危ない。あの爺さん、軍の動きを知っていたんだ、畑をつぶされたって辟易していたんだけど、このごろは陸上部隊の動きがないっていったんだ。ラジオニュースではアメリカと欧州の空爆が始まる、と放送していたし。だから間違いなく空爆は始まる。こんな所で油を売っていたら、こっちがやられちゃう」

「昨日の攻撃がまたここに来るっていうの？」私は急に喉が渇き咳き込みながら、

「ちょっと、私たちこの現場の取材できないわよ」

「取材なんてさっきの死体の写真と、あの爺さんのコメントで十分だ。無差別爆撃だぞ、俺らなんか無視して勝手に爆弾落とす気なんだぞ」

私はよく分からずにラジオをつけました。イスラムの歌が流れています。チャンネルを変えて、英語のニュースを流している局を探しました。アメリカの大統領の声明が流れてきました。

「……コソボの罪なき人々を殺人鬼ミロシェビッチの手から守るため、我々は躊躇することは許されない。悲劇を終わらせるための道義的義務だ」

アダムのいうとおりでした。ここに爆弾が降る。この葬送の行進のようなゆっくりとした歩みの意味を理解しました。ゆっくりしていますが、みな慌てふためいているのです。

「それならなおさら取材するべきじゃない、無差別爆撃よ、この人達が犠牲者になるかも知れない、逃げるなんてどういうことよ！」

「あの爺さんは死んでた。体中血の赤と火で真っ黒に焦げて死んでたよ。爺さんの車にキーが差さっていたのでこの車を頂いたんだ。俺たちは運がいい、早くこの情報を世界に流しなさいっていう、神の思し召しじゃないか、そうとは思わないか」

「車まで盗んだの！」私は叫びましたが、その先に言葉が続きませんでした。保身をはかっている自分。愚痴を吐く自分。つまりは利己主義の自分。姉を思いました。それとあのサラエボにいた少尉、私の体をまさぐっていた老兵、一ヶ月間私を拘束したあの太佐、私を日本に追放した准将、タイヨウグラフの牛吉、ラブホテル街で店を開いていたあの妙なオヤジ……当てが外れた気持ちになりました。ここに来れば何か見つかるような気がしたのです。懸賞に入るような写真

がとれるような気がしたのです。なんで私はこんなに卑しいのでしょうか？ 全く自分の甘さを実感して、ここまで来た自分に呆れました。欧米軍はこの人の歩みを攻撃するだろう、私はそれに巻き込まれてでも残るべきなのではないでしょうか？ 早く欧米のマスメディアに速報を伝えることで、欧米諸国の誹謗さを訴えるべきなのではないか。そんな理屈を感じるとじわりと脳の血がひんやりと冷めていくのを感じました。正義とはなんでしょう。それを伝える義務とこの田舎道で死に行く市民を天秤にかけました。どうすればいいのでしょうか。確かにこのニュースを伝えなければ、ここに来て、ここにいる意味がない、とも考えました。窓から空を見上げました。うっそうと厚くなっている雲をぼんやりと見ました。この空の上をステルスとかいう爆撃機でやがて攻撃されるのだ。何百人、何千人というレベルで殺されます。この車だってその運命を受けることでしょう。アダムは決死の形相で車を走らせます。この時の私は実感がありませんでした。倦怠感というのか、全てが相対化されていて、自分自身に降りかかる実感がありませんでした。まるで雲の上にいる私が、地上にいる私を見おしているようでした。なぜ人は生きねばならないのでしょうか。私にはことの重大性と道徳心とか倫理とかいう言葉でくくられている論理的思考が理解できませんでした。このまま車を走らせて数百キロの先の都市にたどり着くことなんてできるのでしょうか。どうせ間に合わないわ、どうせ最後には死ぬんだからそんなに急がなくてもいいじゃない。

「まあ、こういう死に方もありかしら」私はぼさっといいました。

「何いってんだ。死ぬんだぞ、俺たち。怖くないのかよ」アダムは続けました。

「この惨状を世界中にばらまくのさ、そうして俺は名声を得るんだ、その前に死ぬことなんてできない。絶対にいやだ」

(なんだ)

私は心の中でもう一言いいました。(つまらない男ね)

「昨日いったろ、実はアルバニアが悪なんだっていう、ニュースを世界中に放送すれば、世界は俺に注目する。俺は、俺は、この戦場取材で最高の人間になれるんだ！」

(こんな男のために私に写真を撮らせていたわけ？)

車は街の中に入りました。狭い道でアダムは気違いのようにクラクションを何度も鳴らします。人の波をよけながらゆっくりと進みました。私は直感して体でカメラを覆うようにしっかりとかがめました。アダムがこの事態をどうするつもりなのか、知っていたのかも知りません。攻撃の爪痕なのか道路が酷くぼろぼろでした。車はますますスピードを上げ右へ左へと蛇行を繰り返し、タイヤが窪みにはまりまた大きく飛び跳ねました。暴走を止めようと私は、止めて、止めて、と何回叫んだかわかりません。

「どけ！ どけ！ お前ら、邪魔するな！ どけっつーの！」

クラクションを鳴らしアダムの叫び声は一層大きくなりました。人は増えるばかりです。

「くそっ、セルビアの難民め」アダムは拳をつくってハンドルを叩きました。

道に溢れている人達は、おそらく私たちと同じく北のセルビアに逃げようとしているのでしょう。アルバニア人の攻撃を受けたコソボのセルビア人が、捕囚の列のように果てしなく続いています。目的は同じなのに、先を争っていました。寒さに怯える子供達。その両親が子供の手を握りしめ、私たちを睨んでいました。

「駄目だ！　なんだよこいつら、お前達の犠牲があっても、国際世論に訴えれば、大勢の人が救われる。さっさとどきやがれ！」アダムは舌打ちをして、「邪魔だな」アダムは小さく囁きました。

どうせ世界は変わらない。飽き飽きしている私がいました。正義だの悪魔だのと罵りながら正当性を主張する、「世界」

アダムはまだクラクションを狂ったように鳴らしています。しかし、この道いっぱいに溢れている難民は急ぐ私たちを無視して葬列に連なっているような、牛の歩みのような速さでしか進めません。アダムはに怒りをぶつけていました。私の耳には空回りする言葉のつらなりにしか聞こえませんでした。

こんな危険なところに出てきて、なに頑張っているんだろう。だんだん自分が分からなくなる。もう一度口にしました。「なんでここに来たんだっけ？」

「もし」

寒気のする声を聞きました。お姉ちゃん？

声は消えました。もう聞こえなくなりました。

「お姉ちゃん」と私は呟きました。結局何も起きませんでした。

外を見ました。とにかく瓦礫やら空き缶やらテレビなどの電気製品から女性下着に至るまでガラクタをひっくり返したように散乱していました。子供は泣きました。それを母親はなだめていました。

アダムはクラクションを鳴らすのを止めました。

(これはヤル気だ) 咄嗟に私は思いました。アダムはエンジンを吹かし、

「ハア、ハア、ハア」

と大きく呼吸すると狂った笑顔を見せて急発進しました。淑女をはね、子供をはね、とにかく行列となっている人の道を無理矢理こじ開けました。車は進みます。「これはスクープだ、これはスクープだ」何度も呪文のように唱えていました。車は上下に飛び跳ね、めりめりと人を潰していく音が尻の骨に響きます。

その時ごそっとカメラが手から落ちました。瞬間私は体がかがめ、カメラを胸の中でしっかりと守りました。黒光りするレンズが私を睨んでいました。私は自分を発見しました。私はカメラマンなのだ、と。

すぐにカメラを構えました。空に向かって何か異常はないか。そして正面を見ます。私たちの車は人をはねています。右に左に車は揺れます。逃げつつも無差別に潰れていく罪無き人を、私は何枚も撮りました。子供がいました。妊婦がいました。お爺さんやお婆さんがいました。みな同じように殺気だっています。弱者が戦争の犠牲になるのです。弱者は彼らです。では私たちはどうなのでしょう？

「あなた、止めなさい！」私は叫びました。

アダムは人を踏みつける罪悪感もない。「俺は最高だ、俺は最高だ」額に脂汗を掻き、てかてかに光っていました。

「早くいかないと間に合わない。ベオグラードにつけば速報で伝えることができる」

車は人をはね続けています。横にそれるもの、子供が跳ねられて介抱する母親。睨んでいました。みな睨んでいました。アダム表情はますます奇怪に歪んでいます。

独裁者に罰を加えるといいますが、軍はもちろんアダムや私でさえ犯罪者です。人をはねるのは口実でしかありません。中年の女が私たちの車に目の前で蹴りを入れ、体を這わせてボンネットから何度もフロントガラスを叩いていました。アダムは、どけ！ と自分の拳でガラスを殴っています。私はその様子をカメラに収めました。なぜ同業者の悪態を撮ったのか、意味は分かりません。ただアダムは欺瞞を振りかざしているのに気づいていません。スクープなど住民にとって見れば余計なお世話です。お婆さんは鬼の形相でなお強く叩いていました。死ぬんです。このお婆さんが死ぬ。そしてこのお婆さんの子供も死ぬ。プリシュティナにいた、あのサッカーに興じていた子供達、市場で引き倒された店主、アダムも私も。軍が殺すこと、そしてアダムがこうしていることにどれほどの違いがあるでしょう。無差別に殺す気です。理不尽です。生きるか、死ぬか。私にできること、それは無意味なことかも知れません。私は車を飛びおりました。

「おいユウどこ行くつもりだ、お前の写真がなけりや……」

私は撮るために生きる。なぜ？

「生きること」私はその答えを確信した。そんな設問自体に意味がない。人生に苦しんでいるとかいう金持ちとか裕福なお坊ちゃんが陥る罠だ。生きる、とはこういうことだ。

「必死になることだ」

私は意を決してここに来た。鮮明な確信があったではないか。自分を解放する確信が。戯言は卑怯だ。だったら行動して見せろ？ おうとも、私はここに残るわよ。速報で伝える？ 世界に真実を伝える？ 権力者の悪行を暴露する？ ただテレビの前でぼんやりと眺めていても「生きる」ことの肉迫は伝わらない。私は祈る。誰でもいい。大勢の不幸な表情の入ったこのフィルムを伝えてくれ。そして感じろ。私はここの人々と一緒に空爆のさらしものになろう。

「来るなら来いよ、殺してみやがれ！」

私は日本語でいいました。私は大空に向かって両腕を上を上げ、背をそらし大声をあげました。よく通った声らしく周りの人が一目置きました。日本語だから分かるまい。しかしなぜかその場が静寂になりました。

「こんな理不尽はありえない。セルビア人だろうが、アルバニア人だろうが、クロアチア人だろうが、被害を受けるのは私たちだ。無差別に。こんな正義がどこにある！」私は続けました。

「一人の権力者を殺せば幸せな社会ができるというのか。だったらやらせろよ！ 本当に悪徳の人間なのかどうか、決めるのはこの住民たちだ。本当に凶暴な人間ならこの国の民衆が蜂起するはずだ！ 異国のそして宣戦布告もないこの攻撃に私は反対する！」

「さあ殺せ、さあ殺せ！」

アダムは私を諦めて連なる潰れた人々の道をいつてしまいました。私を置き去りにして行ってしまいました。私の反戦宣言が終わると、また喧騒が始まりました。

「……！ ……！」

何を喋っているのか分かりません。私は女の睨みを受けました。そして私の頬を叩いたのです。しばらくしてもう一度叩きました。その女の足元には幼子がいまいました。そしてその女が飛びかかった後、そのへんの女たちが狂ったように突進し私を倒しました。蹴る、蹴る、蹴る、殴る

、殴る、殴る、そして硬い石を私にぶつけました。ここは彼らの国です。私のような異国の、しかも先進国でこの攻撃を支持した地味な国の人間です。私は抵抗しませんでした。ただ殴られ、ただ蹴られ、押しつぶされました。私は丸くなりカメラだけを守りました。これさえあれば何をしてもかまわない。頼みますこのカメラにだけは手を加えないでください。頭から血が流れているのが分かります。首を上げると鼻血がどぼっと出ました。そこに砂を浴びせかける。咳こむと私の頭を踏みつけてサッカーボールのように蹴り始めました。私はカメラだけは必死に守り、抵抗せず辺りを転がりました。

相手が私のカメラバックをひったくりました。「だめ、それだけはだめ！」

私は飛びかかってカメラ鞆を取り戻しました。奪い返そうとすると、男は金目のものだと思ったのか、いやらしい眼つきになって鞆を上にあげて私を制すると、何か喋っていました。そうするとみんなで私を笑いました。

お姉ちゃん！ お姉ちゃん！

気づくと誰もいなくなっていました。カメラはすぐそこにありました。

お姉ちゃん！ 私は飛びかかって腹に隠しました。誰もいません。爆音が聞こえたのはその時でした。

「爆撃機！」

私ははっとしました。私は隠れられるところを探しました。右や左を向いて家や岩場を探しました。どこにもありません。私は立ち上がり走りました。走って、走って、走って、後ろの方から破裂する機関銃の音が段々と近づいてきます。私は足を踏み外し穴に落ちました。戦争でできた穴なのでしょう。そのすぐ近くで直角的に爆音が落ちてきました。本能的に私はカメラを下に体を伏せました。その爆風で私は砂埃を吸い込み咳こみました。

カメラは傷ひとつついていません。姉は助かりました。良かった、本当に良かった。

また鼓膜をつんざくような爆音がして地響きとともに砂が私の頭に降りかかり、熱風が肌を撫でていきました。お姉ちゃん、お姉ちゃん、と私はカメラに肌をすりつけ、穴を出て私はシャッターを切りながら走りました。あちこちから聞こえる銃声。死ぬ瞬間の叫声。機関銃で壁が蜂巢になっている様子。反撃の対空砲撃の地響き。遠くのアパートから泣き叫んでいる子供が助けを求めています。私はただシャッターを切りました。そこへ大砲の弾が直撃しその子供を吹き飛ばした。黒煙が上がっています。その瞬間さえ私は情け容赦なく収めました。私のモラルなどどうでもいい。地獄で懲役刑を喰らうだけのことだろう。

しばらく走ってもぬけの殻になっている家に突っ込みました。私は急いでフィルムを入れ替えました。その目の前には部屋のドアノブにロープを引っ掛け、もう片方に自分の首をくくり横たわってこと尽きていました。まだ若い未来のある青年に見えます。逃げ回ること絶望したのでしょうか。手首も切ったらしく、流れる血で木っ端にキリル文字というのでしょうか、変色した血の赤い文字が書き記してありました。意味は分かりません、分かりませんがそれにもシャッターを切ります。すぐに外に飛び出て走りました。右から左へ首を回して、何かを探しました。見たらすぐに吐き気を催すような、文明人のテクノクラートが一般市民には決して見せず、覆

い隠す戦場の醜い実態を徹底的に撮りまくりました。死んでもいいじゃないか、写真さえ残ればなにがしかの意味を感じてくれるだろう。

雨粒を感じて私は目を開けました。空は青みがかっており、明け方のような感じでした。体を起こすと骨のあちこちが軋んで痛みました。いつの間に眠ったのか分からず、寝ていた気がしません。かといって起きていたわけでもありません。私はその辺りをよろよろとうろつきまわりました。雨脚はやや強くなりました。家の壁という壁が破壊され、その下に夥しい死体が埋まっていた。所々隙間から見えるその死体は、千切れた首や爆弾の腕があちこちに転がっていました。体から引き裂かれ、内臓が飛び出ているもの、足の関節が逆を向いていたりするものもありました。顔面が潰れ、脳や目玉やらが道ばたにねばねばとしてひっついていて、私は眼をしかめてを踏みつぶさないよう注意深く歩きました。気をつけていてもどうしても隙間に足をとられます。

私は瓦礫の合間の死体を踏まないよう人と人の間に足を入れようとふらふらになりながら歩きましたが、足をとられ右足が滑り、ぐにやりとした感触を得ました。あの時の感触です。おそらく妊婦の腹でしょう。弾みをつけて足を抜くと硬い感触を得て足が戻りました。骨が、それとも嬰兒の感触なのか分かりませんが、血が付いていました。ここは戦場だと一喝されたように情けなく甘い自分を自分でなじりました。私はどうしても実感するのに時間がかかる性質のようで、私にこんな重大な取材に、何を寝ぼけてるんだ、と頭を左右に振りながら邪念を振り切りました。

雨脚が強くなりました。しばらく進むと一台の車が道を外れて家に突っ込んで止まっていた。前輪に老婆の頭が挟まっていた。何人もの人を巻き込んでハンドルととられてぶつかったようです。車は完全に止まっていた。パジェロでした。あのパジェロでしょう。私は瓦礫から立つ足音を忍び足で近づきます。エンジンからでしょうか、焦げ臭く匂っていました。爆弾が直撃したのか、はずれたのか、火をつけられたようで白いボディーはそこかしこが真っ黒く焦げていました。そして大きなハンマーのようなもので叩かれたのか、大きな瓦礫に潰されたのか、屋根やフロントガラスやホイールなど原形を留めないほど壊れていました。アダムはボンネットの上に仰向けになって倒れていました。アダムの狂った運転で何人もの人を車でひいたことで住民の怒りを買って運転席から引きずり出されたのでしょう。そこに暴行と空爆が加わった。「俺たちは運がいい」といていたあのアダムですが、鼻は潰され、歯も完全に折れ、頭は陥没し、面は原形を留めぬほどまるで押し潰して変形していました。そして何よりも凄惨なのは眼に鉄パイプが突き刺さり、それが後頭部まで貫かれ、フロントガラスに突きさされて腰から上が反り上がっている姿で硬直していたことです。アダムの手はその鉄パイプを握っていました。無謀にも引き抜こうとしたのでしょうか。車には爆弾の火で煤がこびりついており、アダムの衣服は焼けて肌は赤黒くただれていました。それは相当な恨みを晴らそうという住民の我慢が一気に噴き出した暴行だったのでしょう。アダムは中立的な立場から取材をしたかった、といていたのを思い出しました。どうしても欧州の戦争で中立的な報道ができない、と嘆いていたあの言葉の重さをかみしめました。日本が仲裁してほしいという、アダムの言葉が重い日本人の罪の意識となって今さら頭の中に浮かんできて膝をつきました。

私はボンネットに飛び乗りアダムに近づきました。両手で鉄パイプを握っていました。アダム

はスcoopに取憑かれていました。馬鹿なんだから、と私は小声で言いながら、目をそむけたくなるようなその姿を見ました。雨は私の頭から降り注ぎ、涙は雨に溶けていきました。私はその鉄パイプを握り、そして力一杯こめて引き抜こうとしました。パイプは冷たく錆びており、引き抜く時錆びと骨がこすれて、ごそごそ、と音を立てます。右へ左へ回転させてみました。少しずつですがパイプは動きだしました。こびりついたパイプの錆びが手にとげを刺すように痛みます。アダムの硬直した体は右へ左へごろごろと揺れます。それでも私はやめませんでした。仲間の死をなぐさめていたというわけではないと思います。ただ私は繰り返し、繰り返しパイプを動かし引っぱりました。小一時間はかかっていたでしょうか、やっと引き抜き改めてその顔を眺めました。

くりぬかれた眼窩が黒く潰れていて頬骨が折れていました。黒い血糊にまみれたパイプをしばし眺めました。パイプが私を睨んでいました。粘液が垂れました。アダムは背筋を反りかえし両手は鉄パイプを握った状態で硬直していました。私は怯えることなくしっかりと見つめながら、そのパイプを放りました。そしてまた私は当たり前のようにその顔を写真に収めたのです。

それから何時間たったでしょうか、私は死んでいるアダムの側で足をだらりと垂らし、うつむいて座り込んでいました。重量車両のエンジン音が聞こえてきました。それは装甲車でした。兵士が現れると、私は降伏して両手を上げました。なにやら話していましたが何をいつているのか分かりません。とにかくゆっくりと服を開きました。何もありません、抵抗なんてしません、と分かってもらうためにです。一人の兵士が銃を構えゆっくりと近づいてきます。

兵士は鞆を引っ張り出しました。特に危険物がないと分かると、銃口を上げ後ろの方に揺すりしました。ついてこいということだと判断した私は、手を挙げたままその兵士について行きました。

装甲車は揺れましたが、普通車なら動かなくなる瓦礫の上でも軽々と進んでいきます。こうして走っている間にも何人もの死体も踏みつけているのだろうな、と想像しながら。

基地のような場所に連れて行かれました。テントが立てられているだけの粗末な基地で風が吹くと音を立てて抜けていきました。英語のできる兵士が取り調べました。

私は単なるプレスの人間だと訴えました。その裏の頭では大事なカメラとしまつてある写真が心配でなりません。兵士はカメラを調べたり、写真を見たりしながら、私の訴えに頷いていました。

「お前は日本人か」と問われました。私は、イエスと応じました。

「そうか、我々は日本に感謝している。アメリカや欧州の連中は『セルビア人＝悪』の論調で世界に喧伝している。我々はその論調を、いいがかりだと主張しているのだが」

本当は日本も欧米諸国の攻撃を支持しているのを知っていましたが、私は黙っていました。そしてまた数回かの質問があり、なおも私は丁寧に説明しました。兵士は笑みを浮かべていました。段々私の緊張もほぐれてきました。

「これからどうするんだ」

「できればご一緒して、撮影したい」 そういいきりました。

「帰国したくないのか？」 「イエス」

兵士は困惑した顔で、

「我々はセルビア人の救助を目的にしている。当然戦闘もある。殺されることもありうる。それでもかまわないのか？」

「イエス」

私はそれから約一年間ここコソボにとどまりました。フィルムは軍が支給してくれました。悲しい日もありました。愉快的時もありました。兵士からレイプされそうな時に、身を守る柔術を教えてもらったりしました。まずい、といったら腐ったコーンビーフだった、というイタズラもされました。そんな軍人の日常も撮影しました。目の敵にされているセルビアですが、あくまで私個人の印象でいうと、セルビア人は意外と気さくに接してくれたように思います。しかし逆もまた真なりで、親切なアルバニア人もいるに違いありません。それだけは戦場カメラマンとして失ってはならない視点です。

従軍中、私は体調を崩しました。何度も下痢をし、何度も吐きました。ここでは医療機関がありません。ある兵士が、

「もう日本へ帰った方がいい」と諭してくれ、私もそろそろ潮時だと考えて同意しました。

ベオグラードまでは軍用車で快適に送ってもらいました。空港に着くと、命からがらもう何年分も生きてきたような気がしました。しかし何か足りないものが感じられ、その思いは風船が膨らむように段々頭の中を支配していきました。姉はカメラを私に託しました。姉が十分にやりきれなかったことを、私に託したのだ、と。しかしそれは私の勝手な解釈です。本当はどのようなのでしょうか。首を吊ったその手前にカメラを置いて姉は死んだのです。男嫌いの姉におそらくは強引な性交で身籠もってしまった。それが自殺の原因だった。私はそう思いこんでいました。しかし墮胎という方法もあったはずです。しかも過失は相手の男にあるのであって姉は被害者です。なぜ自殺という道を辿ったのでしょうか。姉は海外を飛び回りながら働いていました。姉はやりがいのある仕事だったとはいっても、一年の約半分を海外で生活をしています。両親のいない不安定な家庭環境なら、海外での仕事など諦めて一つ屋根の下で暮らしてくれてもいいんじゃないか、そんな風にも思えます。

私は帰りの飛行機の中で興奮と失望が、悲劇と歓喜が、そして姉への愛と憎しみが同居しているのを感じました。専門学校へ進んで技術を学び、姉の代わりに私がユーゴへ飛んだのかも知れません。姉は死んでしまいました。それも自殺というやり方で。私はぽんと放り投げたのです。優しく接してくれたおかげで、私は姉の仕事を受け継ぐという形で生きる糧を得てしまいました。今さら考えたところでどうなるものではありませんが。私の肉体を差し出すように強要した姉へは今でも深い傷となって残っています。姉への憎悪と慈愛。正反対の感情が私の心を占めていました。カメラを撫でました。次第にズームアップしていく感じで、カメラが私の眼球に迫ってきます。

「撮レ！ 撮レ！ 撮レ！」あの声が聞こえます。よくよく聞いてみると、それは私の声を喉で詰まらせた声でした。全く無意識で発していたのです。

帰国したのは八月半ば、その日にタイヨウグラフ編集部を経過の報告をしました。牛吉編集長の目の前にどしん、と撮影した写真のすべてを見せました。約一年間。数千枚以上撮影しました。一日五六十枚は撮っていました。さっさとカメラマンの仕事はあきらめろ、と私を放り出した

牛吉はぎょっとした目つきになって、口を半開きにして背もたれに体を預けました。あまりにもばかにしていたので、ちょっとした復讐劇です。

「これだけあればコソボ紛争の悲惨さが伝わるはずです」

牛吉はこっくりと頷きました。写真の数より、私の勢いに押されていたようです。

「……まあ、よくもまあこんなに撮ってきたもんだ。大変だっただろ」

牛吉の褒め言葉に私は優越感に浸りました。

「……まあ、写真集の出版については後でゆっくりと考えると……」

「今夜！」

「……あ、いや近く選考作業することにしよう」

「ちゃんと私も同席させてくださいよ」牛吉はぴくぴくしながら頷きました。

私は笑みながら会社をあとにしました。そのまま家路につきました。一年以上も放っていたので部屋の臭いがカビくさくなくなっていました。窓を大きく開けて空気を入れ換えました。コンコンとドアをノックする音がしました。ドアを開けると、あの何となく怖い大家さんでした。

「……あの、家賃とかは……もう少し立てばお金が入ります、ので、……その、その時に一括して払いますから……ということ……」大家さんはまだ睨んでいます。

「何だかこのごろ近所でおかしなことがあってね」大家さんは続けました。

「車にはねられたとか、猫の死骸が丁度このあたりにいたりしてさ」

「はあ」

「何だか妙なことが起こってるんだよ」大家は一息つきました。

「まあ、あんたとは関係ないけどね、ここには負のパワーが充満している、なんていう怪しい男が来たりしてさ。全く何なんだろうねえ、この鬱陶しさは」

私は何か責められているようで思わず頭を下げてしまいました。大家はそのままいってしまいました。結局何が良かったのでしょうか？

私は風呂を沸かそうと思いました。

時間を計るため、私は砂時計をひっくり返しました。

その間二枚の写真を見つめました。牛吉には渡さなかった二つの写真です。一つはサラエボで撮り逃げながら現像したサンダース軍曹の写真。もう一枚はコソボで市民に暴行されたアダムの写真です。サンダース軍曹はわたしに嫌がらせをして殺した男で、そしてアダムはスクープにむきになって報道しようとして無茶して死んでしまった男です。戦争写真で泣いたことなどないのに、私はこの写真を撮って泣いてしまいました。なぜこんなグロテスクな写真を撮ったのでしょうか。そしてなぜ私は涙を流したのでしょうか。私はおかしい人間であるのかもしれない。こんな肌を剥がれたような、血の雨のような写真が私にとって快感でした。しかしこの二人はそうではない。この二人には自分に失われたものを感じたのです。

老兵は言いました。「生身の戦闘は違う……戦友たちが散っていく悲しみ、とかな。ジャーナリズムはこんな視点には立たないだろ？」

アダムは言いました。「どの国からも好感触なんだよ、日本って。だからもう少し積極的に諍いをなだめてくれると助かるんだけど」

私は老兵に銃口を向けるべきではなかったのではないか。私は身を乗り出してでもアダムの運転を止めるべきではなかったか。幼い子を抱きかかえつり革をつかませてくれるような愛情。その自分かはるか遠くから求めていたものを消してしまった気がするのです。それはもしかしたら私の求めていた無償の愛そのものなのかもしれない。……しかし戦争は生死をかけた争いです。二人が死んだのは運命でした。

「運命なんだ。運命なんだ。運命なんだ！」

私は怒鳴りました。そうして罪を忘れようと思いました。私は天井を見あげました。戦争は恐ろしい。しかし戦場はもう一つの人間の真実を晒します。戦争はなくなるかもしれませんが。しかし戦争写真は失ってはなりません。本当の平和な世界、溢れる愛のようなものを感じたいなら、戦争の悲劇を知るべきではないでしょうか。

砂がもう一雫でこぼれつきようとしていました。

私は風呂がもうすぐ沸くのだと思い、風呂の火を止めに行きました。

ふふふ、と姉は笑います。不敵な笑みでした。

「悠ちゃん、あなたはそんなに善良な平和主義者じゃないわ。あなたは幼いころからずっと日陰で育ってきた。寂しかったのは確かよ、でもそんなに人をあなたは愛することができて？ あなたが愛した男どもは、あなたにどういう仕打ちをした？ 人を盲目的に甘えちゃいけない。悠をいじり続けた奴らに復讐してやりなさいな。そうよ、戦うのよ。もっとビックになって、あいつらを見返してやるのよ。それが悠の唯一の生き方よ」

私は服を脱ぎ湯船につかりました。まだ写真を見ていました。体を伸ばして湯船に顔をつけ潜りました。写真だけ上に残して。頭を湯船から出すと、浸かっている湯が酷く冷たく感じました。再び写真を見ました。すると全く別の写真を見ているような気がします。悪魔的な自分が徐々に浮かびあがってくるのでした。それが精神の本性でした。私は写真を中指でつつきました。

「ばーん」

写真の選考は長く続きました。戦争の悲惨さとはいっても、ここまで生々しいと倫理審査会に出版差し止めを喰らうかも知れません。私は子供が手を振って助けを求めている写真がとても気に入っています。モラル無き極限状態こそが、生きるという意味に繋がっていると考えたからです。牛吉は却下しました。問いつめると、

「これはだめだ。お前にとってはいいのかもしれないが、子供がこれを見てしまった場合を考えてみろ、教育上よくない」

相変わらずの紋切り型の意見でした。私はこれが先進国の変わらぬ姿勢なのだと飽き飽きしました。こんな悠長な会議の間にも何万人もの人が亡くなっているのが現実なのだ。教育上よくないなんていうこと自体が馬鹿馬鹿しい。そこここにいる若者のモラルこそ直せないでいるくせに。

一年たっても相変わらず会議は続けられていました。私の企画で会社の一命を取り留めたくせに、私の意見が通らない。編集長が乗り気でないのが元凶です。

私は写真をまとめ単身アメリカへ行きました。ニューヨークで個展を開くためです。資金があまり無いので、潰れた店の一間を借りてそこに写真を並べました。いくらでも写真はあるので何回も張り直したりして、多くの人たちに見てもらおうとしたのです。

コソボ戦争そのものは、アメリカが空爆して治まった正義の戦争なのだ、というのが彼らの主張です。しかし私はその政治的な意図は全く役に立たないことを主張しました。戦争の犠牲者はコソボ市民なのだ、と訴えました。当初はいざこざがよく起こりました。アメリカが可哀想な国を助けてあげた、という論理は中道右派勢力にこてんぱんに非難されました。会場の前に死んだ猫を置かれたり、カラスプレーで落書きされたり、もう消えろなどと張り紙をべたべた貼られたりしました。

しかし理解がある人もいるのがアメリカです。

「大変なところでよく頑張ったわねえ」という気遣いや、

「マスコミのせいでアメリカよりの主張で洗脳されてしまうんだ、君のこの写真は行き過ぎた国論をひとつ慎重に考えさせてくれる」という意見も寄せられました。

驚いたのはアメリカ軍の下士官までもが見に来てくれたことです。私は因果を感じずにはいられませんでした。その軍曹は敬礼し、私は頭を下げました。

それはただいつもの平穏な日でのことでした。突然大きな爆音を聞きました。

慌てて外に出ると、もう一回大きな音がしました。音というより体に響く振動に尋常ではないなにかが起きていることを予感させました。

なんだ？ 何が起きたんだ？ 煙のような焦げた臭いがここまで届きます。警官があっちこっちに走り回り、ゲタアウヒア、ゲタアウヒアと何度も繰り返していました。腰を抜かした老婆が車の陰に隠れて現場を心配そうに眺めている。数人の男が駆けより老婆の腕を掴んで一緒に避難した。顔中血まみれの男が砂埃の中から現れた。まだ人がいるよ、とっていました。私は現場

に行こうと思いましたが運悪く警官に捕まり、

「立ち入り禁止だ、早く向こうへ行け！」

私は腕を強く握られ、放り投げられました。カメラは無事でした。

私はその足で住み処にしている安アパートに戻りました。急いでテレビをつけました。

「えー、繰り返します。現地時間九月十一日午前八時四十五分頃、乗客乗員合わせ九十九人を乗せたボストン発ロサンゼルス行きアメリカン航空十一便が、ニューヨーク世界貿易センタービル北タワーに衝突しました」キャスターは続けた。「続けて同日午前十時三分頃乗員乗客六十五人を乗せたボストン発ロサンゼルス行きユナイテッド航空百七十五便が同ビル南タワーに衝突しました。映像だけで多くの被害者がいると思いますが、正確な情報はない状態です」

ジェット旅客機が低空を飛んでいる映像が流れた。その寸前にはビルがある。あっと叫ぶ間もなく、吸い込まれるように突っ込んだ。カメラのアングルが替わる。ビルが正面にあり、その奥に旅客機がカーブを切るように飛んでいる。旅客機はビルに近づいている。やがてビルの陰に隠れた。そしてその背後で炎と煙が噴出した。また違うアングルに何度か切り替わった。

救急車、消防車がサイレンを鳴らし現場に急行する映像が映っていました。記者が何かいっているがよく聞こえない。パレスティナ解放戦線が犯行声明を発した、という報道がほぼ同時に入った情報と共に否定された。さらに今度は国防総省に旅客機が突っ込んだという情報が入る。

「繰り返します。乗員乗客六十四人を乗せたワシントン発ロサンゼルス行きアメリカン航空七十七便が、アメリカ国防総省ビルに衝突しました。それとたった今ホワイトハウスに避難命令が出たようです……」

飛行機がペンタゴンに突っ込む？ ホワイトハウスに避難命令？ 狐につままれたような話です。すぐその路地から確かに救急車、消防車がサイレンを鳴らして急行しているのを見ました。

テレビカメラが切り替わりました。堅牢なビルから一つ二つ小石が落ち始め、ゆっくりと傾きだしました。まるで映画のワンシーンのようです。私は目を見開きました。

落ちてくる石はだんだん大きくなっている。私はソファーに体をあずけ同時にすぐ裸になり、性器を両手でいじりました。左の人差し指と薬指で性器を開き中指でスポットをいじり、右手で左の乳首をいじりました。テレビの中ではビルの巨石がすぐそこに落ちた映像がありました。それはスローモーションがかかったようにゆっくりとゆっくりと落ちていきました。ロングの画面に切り替わる。男性器をスポットに挿入するように指を外から中程へと押し入れ、煙の中へ隠れると私は絶頂を迎えました。マンハッタン島は砂塵に覆われました。私はそのテレビを撮影しました。舌打ちをしました。私は不満足でした。中途半端な快感でした。あの不条理の中で死を迎えた人への冒瀆を考えもせずに。

超大国アメリカの大統領が専用機で自国の中を逃げ回っているのです。こんな屈辱はないでしょう。そしてこれから何が起きるのか、何が真実で、目的は何なのか。誰も何も分かりません。世界は常軌を逸し、軌道を外れ漂い始めました。私は秩序の崩壊の只中にいるのです。その時私はある感情に包まれました。それは光を帯び、骨髓までも快感を得るような悦びでした。

壊れゆく秩序が一つの被写体として私の目の前に広がっていました。怒りはありませんでした。

テロリストも私も人間であることに違いありません。そこに正義だの悪魔だのという概念を持ち出すからおかしな不条理にとらわれてしまうのです。人間は誰でも悪魔にも聖者にもなれるのです。人物史をひもとくまでもなく。

しかし困ったことにある不条理に気づいてしまいました。

「本当に世界が平和になり、戦争が無い世界になったら、どう生きるつもりなのか」

しかしその心配は徐々に薄れていきました。

「……アメリカ政府の高官はこのテロを企てたテロリストは、アフガニスタンに潜伏していると表明しました。大統領は早急に事態に対処するため、国家安全保障会議をキャンプデーヴィッドに招集した模様です」

私はなじんだカメラを撫でまわしました。そしてそのフォルムを人差し指の爪でなぞりました。まるで尖った女性器をいじるように。噴火前の地熱のように心臓がより大きくより高く拍動しています。私を満たしてくれる被写体。その瞬間を探しました。

「大統領は『これはテロではなくむしろ戦争だ』と口火を切り、アメリカ第七艦隊をインド洋沖へ展開するよう指示しました」

「大統領は我々プレスに向かっていいました。『このような事態で私は世界に問いたい。我が国とともに戦うのか、それともテロリストの側につくのか』」

「大統領は生中継で我々プレスに語りました。これは各国への問いかけというよりも、我々プレスへも問いかけていました。『我々は平和を乱すものには、国家であろうと、テロ集団であろうと許すべきではありません』とアメリカの一市民として私は答えました。大統領は笑みを浮かべ、『それでこそアメリカ市民の矜持だ』と握手を受けました。私は感激しました」と紅潮させてリポーターが報告していました。次のニュースもテロ関連でした。

「大統領の支持率は急激に上がり、我がアメリカに同調する国が怒濤のように現れました。アメリカ大統領の宣言に各国から多くの支持を得ている模様です」

私はその時夜が明けていたのにやっと気づきました。気持ちのいい青空の下で、下着も着けず、素っ裸で、歴史が変わったとさえいわれるこの現場を眺めながら、背伸びのストレッチをしました。そして私は早速最小限の荷物をボストンバッグに詰めました。正面にカメラを構えレンズを覗き込みました。カメラはいつものようににやりと笑んでいました。漆黒の世界の中にある光が私を歓迎してくれている。レンズに映った私の顔も同じように笑んでいました。私は一路アフガニスタンの隣国、パキスタンへ向かいました。（了）